プラトン全集 8

エウテュデモス

山本光雄訳

プロタゴラス

藤沢令夫訳

岩波書店

編集
田中美知太郎
藤　沢　令　夫

目次

凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とＢＣＤＥは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のＡＢＣＤＥの段落づけとの対応——おおよその——を示す(ただしＡは省略した)。引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253Ｃ)。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。

六、〔 〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK＝H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.＝Diogenes Laertios.　古注＝*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

エウテュデモス

——争論家——

山本光雄訳

登場人物

クリトン
ソクラテス
ディオニュソドロス
エウテュデモス
クレイニアス
クテシッポス
（その他）

271

一

クリトン　ソクラテス、昨日君がリュケイオン(1)で問答をしていた相手は、誰だったかね。君たちのまわりには、それはほんとうに大変な人だかりだったので、聞きたいものだと近寄ってみたのだが、はっきりしたことは何一つ聞けなかった。もっとも、爪立って頭越しに見てはみたんだよ、そして君が問答をしていた相手は誰か他国人のように私には思われた。あれは誰だったかね。

ソクラテス　いったい、どちらの人のことなんだろうね(2)、君の訊ねているのは、クリトン。一人じゃなくて、二人いたのだから。

B

クリトン　私の言っている人は、君から右に数えて三番目に坐っていた。その人と君たちとの間にはアクシオコスの若い息子(3)がいた。あの子は、ソクラテス、いや、またたいへん大きくなったもので、うちのクリトブロス(4)と年は大して違わないように思われた。しかしうちのは瘠せているが、あの子は年よりふけていて、見た目も美しく立派なものだ。

ソクラテス　エウテュデモスだよ、クリトン、君の訊ねている男は。しかし、私の左側に腰を下ろしていたのは、この男の兄弟ディオニュソドロスで、これも問答に参加する者だ。

C

クリトン　ソクラテス、どちらも私の見知らぬ人だ。どうやら、あの人たちは誰かまた新しい知者たちのようだが。故郷は？　そしてその知恵は何だね。

D

ソクラテス　生まれはなんでも何処かこちらで、キオスの者のように思うが、しかしトゥリオイに移住したんだ、しかしそこから追放されて、もう長年この地方で暮らしているのだ。それから、君の訊ねている両人の知恵というのは、おおクリトン、それは驚嘆すべきものだよ、あの両人こそ文字通り万知万能の人々だ、そして私は今日までパンクラティアステースとは何であるか、まだ知ってはいなかったのだ。何故かというに、あの両人はまさしく万能選手という人たちで、アカルナニアの兄弟がパンクラティアステースであった程度のものじゃないからね。というのは、あの兄弟はただ肉体によって戦い得るにすぎない、が、この兄弟はまず第一に肉体によっ

1　アポロン・リュケイオスに捧げられた体育所。ソクラテスのなじみの場所。後にアリストテレスが学校を開いた所。

2　B、T写本の ὁπότερον を読む。

3　「解説」登場人物の項参照。

4　Diog. L. II. 13には、このクリトブロスのほかに、クリトンの息子として、なおヘルモゲネス、エピゲネス、クテシッポスの名が挙げられているが、本篇306Dから考えれば、クリトンには二人の息子しかなかったようである。なお、クリトブロスについては、『ソクラテスの弁明』38B、『パイドン』59B参照。

5　小アジア海岸に近い小島の主都で、東岸にあった。

6　タラス(タレントゥム)湾に臨む一都市であった。前四四三年にペリクレスの建策により、アテナイおよびその他の国から人を送って、造られた植民都市。エウテュデモスおよびディオニュソドロスもこの時いっしょに移住したのではないかと想像される。彼らの追放については、トゥリオイには一度ならず内乱が起こっているから、いつの年に彼らが追放せられたかは明らかでない。

7　イタリアのメガレ・ヘラス(マグナ・グラエキア)と区別してギリシア本土をさす。

8　『国家』I. 338Cの古注には「パンクラティアステースとはパンクラティオンの競技を行なうものであって、このパンクラティオンというのは不完全なレスリングと不完全なボクシングとから成立っている一種の競技である」と説明されている。しかしこの言葉をソクラテスはパンクラテース(παγκρατής万能な)との関連において「すべての人を打負かす術」と解しているようである。

9　ギッフォード(Gifford, E. H. The Euthydemus of Plato, Oxford, 1905)の読み οὐ καθ᾽ ἃ による。なお、οὐ の前にある παμμάχω の後はコンマにする。

て戦うことでも、またすべての人を打負かし得る戦いによって戦うことでも一番恐るべき人々だから——というのは、武装をして戦うことにかけて自ら非常な知者であるばかりでなく、他の人をも、報酬を支払えば、その点で知者にしてやることができるのだから——第二に、法廷において黒白を争うことや言論の術を他の人に教えることでも、また法廷向きの言論を作ってやることでも、一番強い人々だからだ。ところで、以前には、彼らの恐るべきものであったのは、ただそれらに関してだけのことだった。が今は、パンクラティアステースの術の奥義に達しているのだ。というのは、まだ一つ彼らの手掛けずにおいた勝負事があったのだが、それを今仕上げてしまったからだよ、だからそのために誰一人彼らには手向かいすることすらできぬだろう、それほどに、彼らは言論で勝負することにかけても、また言われることが偽であろうと真であろうと、それにはお構いなく、言われる度にそれを反駁することにかけても、恐るべきものとなっているのだ。そこで、クリトン、私はあの二人の男に教えを受けるために身を任せるつもりでいる、それに、彼らは僅かな時間で誰であろうが他の人をもその同じ事柄に関して恐るべきものにしてやることができると言っているからね。

272 B C

クリトン しかし、どうだ、ソクラテス、年が心配にはならないかね。それには、もう年をとりすぎていると思うが。

ソクラテス いや、どうして、クリトン、その心配は少しもない、心配しなくてすむ充分な証拠がある、そしてそれが、私の心を励ましてくれるのだ。というのは、あの両人自身にしてからが、私の欲しているあの知恵、すなわち争論術に手をつけた時は、こう言っていいなら、老人だったからね。昨年か一昨年あたりは、まだ知者じゃなかったのだ。しかし、ただ一つ、私の心配になることがある。それは、今もなお私にキタラ琴を教えてい

るキタラ琴の師匠、メトロビオスの息子コンノス(3)についたと同じように、この他国の両人にも私のせいでまた綽(あだ)名がつくようなことになりはせぬかということだ。実際、私と一緒に通っている子供たちはそれを見て私を嘲笑うばかりか、コンノスまでも爺(じじ)教育者と呼んでいるようなわけだよ。そこで私は、ひとがその同じ綽名を他国の両人にもつけはせぬかと心配なのだ、そして両人もちょうどそのことを多分心配して私の弟子入りをおそらく好まないだろうと思う。しかし私は、クリトン、前の場合には、私の相弟子となって稽古に通うように他の老人た

D ちを説きつけたものだが、こんどの場合だって、他の人々を一つ説いて見よう。そこで、どうだね、君も一緒に通わないか。そして彼らを釣る餌には、君の息子さんたちを連れて行くことにしよう。あの息子さんたちが手に入れたくって、われわれをも教育してくれるにきまっているからね。

1　ベッカーの μάχη, ᾗ πάντων ἔστι κρατεῖν を読む。ソクラテスの考えでは、真のパンクラティアステースの術は次に述べられる法廷弁論術をも争論術をも、なお含んでいるのであるから、この箇所に挙げられる術も、それらの術と一緒にその真のパンクラティアステースの術の一つとして含まれたと解する方がよい。そしてその術と言うのは、「というのは」以下で示される武装して戦う術である。この術については『ラケス』181E、『ゴルギアス』456D、『法律』VIII. 813E, 833E 参照。

2　ここで争論術と言われているのは、すぐ前のところで「言われることが偽であろうと真であろうと、それにはお構いなく……反駁する」272B と言われている術のことを指す。具体的には本篇における両ソフィストのすべての議論が、これを示している。形式の上から見れば、個人と個人が一問一答を続けていって、一方が他方を窮地に落し入れる、すなわち、最初言ったことに矛盾したことを遂に承認させる術である。それも相手に勝つために言語を不正に使用することによってである。『ソピステス』225C～D、『メノン』75C, 80E、『国家』V. 454A、アリストテレス『詭弁論駁論』第一一章など参照。

3　295D 参照。『メネクセノス』235E においてもコンノスが音楽の教師であることが述べられている。なお『国家』X. 607B～C 参照。

クリトン ええ、ソクラテス、君さえよければ、それは少しも構わないよ。しかし、まず始めに、あの両人の知恵というのは何であるか、それを詳しく話してくれたまえ、私たちはまた何を学ぶことになるのか、知っておきたいのだ。

二

ソクラテス それは、もう早速聞かせてあげよう。あの両人に注意を向けていなかった、などと言えはしないだろうからね、いや、充分注意を向けていた、それはかりか覚えてもいる、だから一切合財始めっから詳しく話してみることにしよう。ところで、私は或る神の御意(こころ)によって、あそこに——ちょうどそこで、君は私を目にしたのだが、あの脱衣所(1)にただ一人でたまたま腰を下ろしていたのだよ、そして、もう腰を上げて立去ろうと考えていた、が私が腰を上げていると、あの例のダイモンのお験(しるし)(2)が現われたのだ。それで、また腰を下ろしていた。すると、その後間もなくして、あの両人——エウテュデモスとディオニュソドロスとが、それからまた、私の見るところでは学生らしい他のたくさんの人々が、一緒に入って来た。入って来てからは、屋根のあるドロモス(3)を回り歩いていた。そして両人がやっとドロモスを二、三度回り歩くか歩かないうちに、クレイニアスが入って来た、君はあの子がたいへん大きくなったと言ったが、全くその通りだね。

あの子の後からは、実にたくさんなあの子の他の愛人たちと、それからクテシッポスが——彼はパイアニア区(4)の若者で、この若いということによって傲慢だが、その点を除くと、その他の性質はまことに立派で見上げたものだ。ところで、クレイニアスは入口から私のただ一人で坐っているのを見ると、まっ直ぐにやってきて、これ

E 273 B

は君も言ったのだが、私の右側に腰を下ろした、しかしディオニュソドロスとエウテュデモスとは、彼を見て初めは立止って、時々われわれの方を見やりながら、互いに問答していたが——というのは、私は彼らに充分注意を払っていたから——、それからやってきて、その一人は、若者のそばに、これはエウテュデモスだが、それから他の一人は、この私自身の左側に、他の人々は、各自思い思いのところに腰を下ろした。

C そこで、両人に会ったのは、久しぶりのことだったので、挨拶をした。そしてその後で、クレイニアスに向かって言った。「クレイニアス、こちらのお二人は言うまでもなく知恵のある方々で、エウテュデモスとディオニュソドロスだ、それも些細な事についてではなく、大事についてだ。というのは、未来の立派な将軍が知らなければならぬ戦争のことなら何でも知っておられる(5)、つまり、軍隊の隊形や指揮や武装して戦うことをね。しかしまた、人が自分に不正を加えるなら、法廷において自分で自分を助け得る者にしてやることもおできになるからだ」

D ところが、これらのことを言うと、私は両人から軽蔑されたのだ、実際、両人とも互いに顔を見合わせて笑ったんだよ。それから、エウテュデモスはこう言った。「ソクラテス、僕らはもはや決してそれらのことには心を打込んでいない、ただ片手間仕事にやっているだけだ」

---

1 体操所(ギュムナシオン)に付属した脱衣所。ギリシア人は裸で身体を鍛錬したので、このような設備があった。

2 『ソクラテスの弁明』27D参照。

3 体操所に付属した走るためのコース。

4 アテナイの一デモス。デモスというのは簡単に言えば市の行政区のようなものである。

5 ディオニュソドロスのこの職業に就いてはクセノポン『ソクラテスの思い出』第三巻(一)参照。

で、私はびっくりして言った。「これほどのことが、あなた方には片手間仕事にすぎないというのでしたら、あなた方の仕事というのは、さぞ、立派なものでしょう。どうか是非とも、その立派なものは何か、私に言って下さい」

「徳を(1)、ソクラテス、僕らは、何人にもまして美しく且つ速やかに授けることができると思う」と彼は言った。

三

E

で、私は言った。「おやおや、まあ何ということをおっしゃるのです、それはめっけものだ、何処から見つけ出したのですか(2)。しかし、私は、今も申した通り、あなた方について、あなた方のお偉いのは、主としてこのこと、すなわち武装して戦うことにかけてだなぞと、今まで思っていました。それればかりか、あなた方についてそう言ってもきました。それも、この前こちらへやって見えた時、あなた方が自分でこのことを宣伝しておられたのを覚えていたからのことです。しかし、今ほんとうにその知恵をもっておいでなら、願わくは御慈悲を垂れたまえ！　——というのは、前に申したことを許していただくには、あなた方に私はただもう神々に向かってのように呼びかけるほかはないからです。だが、エウテュデモスにディオニュソドロス、よく気をつけて、見て下さいよ、あなた方がほんとうのことをおっしゃっていなさるのか、どうかね。何故って、宣伝が大きいために信用しないというのは、こりゃ、ごく当り前の話ですからね」

「いや、ソクラテス、それはわれわれの言う通りだ、確信を持つがよい」と両人は言った。

「それなら、少なくとも私は、あなた方がこの知恵の所有のために幸福であると思います。それも、あのペル

シア大王(3)がその支配のために幸福であるよりも、はるかに優れてそうだと思います。しかし私にこれだけのことを言ってください、あなた方はその知恵を皆の前でお見せになる考えですか、それともどうなさる御決心ですか」

B 「他ならぬそのためにこそ、ソクラテス、僕らはここにいるのだ、すなわち、それを見せてやり、誰か学ぼうと望むものがあれば、教えてやろうがためである」

「いや、それなら、これは私が証人になります、もたぬものは誰でも皆望むでしょう、まず第一に私、それからこれこのクレイニアス、また私たちのほかには、このクテシッポス、それに他のこれらの人々」と、私は彼にクレイニアスの愛人たちを指さしながら、言った。これらの人々は、ちょうどその時、すでにわれわれを取囲んで立っていたのだ。というのは、クテシッポスはクレイニアスから遠く離れて坐っていたのだが、――そしてエ

C ウテュデモスは私と話をする度に前へかがみこんで、クレイニアスがわれわれの間にいたものだから、その彼を陰にしてクテシッポスの目を遮ったらしいのだ――だから、クテシッポスは自分の稚児を見たいと思って、また同時に話をよく聞こうとして、その席からまず最初に飛び出して、われわれのまん前に立ったのだ。そこでまた、

---

1 ソフィストたちの多くがこのように自分を徳の教師であると言っていたことは、『メノン』95C～Dなどから明らかに察せられる。しかし、その徳の概念のもとに普通一般には当時漠然と善いものと思われるものを生み出す優れた能力が考えられていた。したがって、その善いものを何において見るかに応じて、あるいは肉体的卓越性が、あるいは精神的卓越性が、あるいは政治的卓越性が、あるいは道徳的卓越性が、あるいはそれらのもののすべてが徳と考えられる。

2 現実の世界に真の意味での徳の教師を見つけ出し得なかったソクラテスが、徳の教師を以て自任するソフィストたちに浴びせた皮肉である。

3 ペルシア大王はこの世で一番幸福なものと考えられていた。

D
他の人々も彼に倣ってそういう風にわれわれの囲りに立ったというわけだ、クレイニアスの愛人たちとエウテュデモスにディオニュソドロスの仲間とがね。で、私はそれらの人々を指差しながらエウテュデモスに「皆の者がすぐにでも学ぶ気でいますよ」と言った。すると、クテシッポスは非常に勢いこんで「そうです」と言った。それから他の人々も、そして皆が一緒になって、知恵の力のほどを見せていただきたい、と両人に願ったのだった。

四

そこで私は言った。「エウテュデモスにディオニュソドロス、では、どうか是が非でも、これらの人々の願いを聞きとどけてやって下さい。そしてまた、私のためにも知恵の力のほどをお見せになっていただきたい。ところで、もちろん、それに属する非常にたくさんなことをお見せになるというのは、たしかに一通りのお骨折りではありますまい。で、これを一つ、言って下さい、あなた方が善い者にすることのできるのは、あなた方から学ばねばならぬとすでに信じている者だけですか、それともまた徳というものが断じて学びうるものではないと考
E
えるためなのか、あるいはあなた方を徳の教師ではないと考えるためなのか(1)、ともかくまだ信じていないあの者までもですか。さあ、どうです、こんな風の者までも説きつけて、徳は教え得るものであるばかりでなく、ひとがそれを最も立派に教えて貰うことのできるのが、あなた方であるということを信じさせるのは、この同じ術の働きなのですか、それとも他の術の働きなのですか」

「もちろん、この同じ術の働きさ、ソクラテス」とディオニュソドロスは言った。

「それでは、あなた方は、ディオニュソドロス、当代の人々のうちで一番上手に説ききかせて知恵を愛し(2)徳を

心掛けることへ人を向かわせることがおできでしょうね」と私は言った。

「そうだ、ソクラテス、たしかにそう信じている」

「では、どうか、他のことについて知恵の力のほどを見せて下さるのは、また今度のことにして、ただこのことについてだけ見せて下さい、すなわちこの若者を説きつけて知恵を愛さねばならぬ、徳を心掛けねばならぬと信じさせて下さい、そして私とここにいるこの皆の人々の願いをお聞きとどけ下さい。というのは、この若者には、まあ、こういったような事情があるのです。すなわち、私とここのこの皆のものとは、この子がこの上なく B 善い者になるようにと願っている次第です。これは先代のアルキビアデスの子のアクシオコスの息子で、当代のアルキビアデスの肉親の従兄弟になるのです、その名はクレイニアス。年は若い、だからわれわれはこれのために、誰かがわれわれより先に、これの心を何か他の事に向けさせて、台なしにしはせぬかと心配しているのです――このような心配は、若者のためには当然の事ですがね。そこで、あなた方は実にうってつけの折にお出でになったというものです。それはともかく、あなた方に何か御異存がおありでないなら、若者を一つ試してみて下さい、そしてわれわれの眼の前で問答して下さい」と私は言った。

ところで、私がこれだけのことを、ほとんど言ってしまうかしまわないうちに、エウテュデモスは断乎と、そ C して同時に自信たっぷりに「いや、何も異存はない、ソクラテス、もし若者にして答える気さえあるならば」と

1　ソクラテス自身がちょうどそのように考えた人である。

2　知恵を愛することの原語はピロソピアー(φιλοσοφία)である。今日の哲学に文字の上では相当するものであるが、これでは充分にその意を尽せないから、こういう訳をつけた。288D参照。

言った。

「いや、なあに、そのことなら、実は慣れてもいるのですよ、というのはこの連中はよくこの子のところへ押しかけて行って、いろんなことを問うたり問答したりしています、だから答えることには相当臆しないはずですから」と私は言った。

五

ところで、それから後のことは、クリトン、どうすれば、うまく君に話してきかせることができるだろう。摩訶不思議の知恵を想い出して、隅から隅まで伝えるなんて、それは、並大抵の仕事ではないからな。で、この私D も詩人たちのように、その話を始めるに当たってムゥサたちとムネモシュネ(1)に呼びかけて、そのご援助をお願いしなければならない。それはそうと、エウテュデモスは何かこんなところから始めたように思う。「クレイニアス、学ぶ人は人間たちのうちいずれであるか、知者かそれとも無知者か(2)」

すると、あの若者は問がむずかしいので顔を赤くし、困って私の方に眼を向けた。私は、あれがどぎまぎしているのを見てとって、「しっかりしろ、クレイニアス、どちらでも君の思うところをどしどし答えるがいい、君のE 得る利益はたぶんこの上もないものだろうからな」と私は言った。

こう言っている間に、ディオニュソドロスは私の方にかがみこんで、顔いっぱい、にやにや笑って私の耳もとで小声でささやいた。「ところが、ソクラテス、君に予め言っておくがね、若者はどちらを答えるにしろ、反駁されることになるのだよ」

276

彼がこう言っているうちに、クレイニアスはもう答えてしまったので、よく気をつけるようにと、はたから若者に注意をしてやることさえ、私にはできないことになった。そして、彼の答えたのは「学ぶ者は知者です」というのだった。

すると、エウテュデモスは「して君は或る人々を教師という名で呼んでいるか、それとも呼んでいないか」と言った。

彼は呼んでいると言った。

「教師とは学ぶ者の教師ではないか、ちょうどキタラ琴の教師や読み書きの教師がたしかに君やその他の子供たちの教師であり、諸君たちがその学生であったように」

彼は肯定した。

「しからば、どうだ。諸君が学んでいた時には、その学んでいたものを、未だ知ってはいなかったのであろう」

「さようです」と彼は言った。

---

1 ムネモシュネ(Μνημοσύνη)は日常語としては「記憶」の意味。ムゥサたちはゼウスとこの女神の間に生まれた娘と言われている。『テアイテトス』191D参照。

2 次の詭弁は知者および無知者という言葉の曖昧を利用してなされる。すなわち、知者というのは二つの意味に解される。一つは、すでに知識を有する者、他は、知能の優れた者という意味である。無知者という言葉も、これに応じて二つの意味をもつ。クレイニアスは後の意味において「知者が学ぶ」と答える。そこで、エウテュデモスは前の意味を利用してクレイニアスの答をくつがえすのである。次に、ディオニュソドロスは後の意味を利用して、さらにクレイニアスを困惑させてしまうのである。しかしまた「学ぶ」という言葉のうちにも、曖昧は含まれている。

(276)
B

「しからば、諸君はそれを知っていなかった時に、知者であったか」
「いや、そんなことはありません」と彼は言った。
「知者でなくば、無知者ではないか」
「ええ、たしかにそうです」
「しからば、諸君は知っていなかったものを学んでいた時に、無知なる者として学んでいたわけである」
若者はうなずいた。
「しからば無知者が学ぶのである、クレイニアス、しかし、君が思うように、知者がではない」
ところが、それらのことを彼が言い終わると、あたかも舞歌団が指揮者から合図を受けた時のように、ディオ

C

ニュソドロスとエウテュデモスのあの取巻き連中は喝采すると共に大笑いをしたのだ、そうして若者が充分に息つく暇もなく、ディオニュソドロスはエウテュデモスの言葉を引きついで「しかし、どうだ、クレイニアス、諸君に読み書きの教師が語り聞かせる時、(1)その語り聞かせるものをいつも学んだのは子供らのうちいずれであるか、知者か、それとも無知者か」と言った。
「知者」とクレイニアスは言った。
「しからば知者が学ぶのである、しかし無知者がではない、そして君がただ今エウテュデモスに答えたのは、うまくなかったのだ」

六

D　さて、こうなると、あの両人の愛好者たちは両人の知恵を讃歎しながら、途方もない大声で笑ったり喝采したりした。しかし、われわれ残りの者はびっくり仰天して黙っていた。われわれがびっくり仰天しているのを、エウテュデモスは見てとって、なおもっと自分をわれわれに驚歎させようと、若者を手放さずに訊ねた、そして同じことに関する問を、上手な踊手のように、少し模様を変えた上で、再び繰りかえして言った。[2]「学ぶ者は、いったい、いずれを学ぶのか、知っているものをか、それとも知っていないものをか[3]」

E　するとディオニュソドロスは再び私に小声でささやいて言った。「これも、ソクラテス、前のと対の同じようなものだよ」

「これは驚いた！　前の問も、それはほんとうに、あなた方には[4]、うまい結果になりましたよ」と私は言った。

「ソクラテス、僕らのかけるかような問は、どれ一つとして逃れることはできないのだ」と彼は言った。

「それだからこそ、あなた方は学生さんたちに評判がいいのだと私には思われます」と私は言った。

1　ギリシアでは書物が少なかったので、教師たちの或る者は生徒の前で彼の記憶しているものを、また或る者は彼の書きとどめているものを語りきかせた(ἀποστοματίζειν)。ラテン語の dictare はこれに相当する。しかしまた教師によって語り聞かされたものを暗誦する生徒についてもこの言葉は使用されたように見える(シュタルバウム)。

2　シュタルバウムはこの文章の全体の意味は疑いもなく「同一の詭弁を、ただ僅かにその形を変えて持ち出す」ことであるとし、「上手な踊手のように」という句において考えられたものは、身体の同一の運動が少し変更せられて繰り返されるを常とした踊りの或る種類であると言っている。ほかにもいろいろ解釈があるが、訳はこれに従った。

3　以下の詭弁は、ソクラテスが自ら277E以下において説明しているように、「学ぶ」という言葉の多義に基づいている。この詭弁はまたアリストテレス『詭弁論駁論』(165^{b}30 sqq.)においても同様な解決が示され、『弁論術』第二巻(1401^{a}24 sqq.)にも言及されている。

4　B、T、W写本の ὑμῖν による。

この間にクレイニアスはエウテュデモスに「学ぶ人々は彼らの知っていないものを学びます」と答えた。すると、彼は前のと同じ仕方でクレイニアスに訊ねた。「しかしどうだ。君はいろはの文字を知っていやしないか」と言った。

「ええ」と彼は言った。

「では、いろはのすべてを、だろうな」

彼は同意した。

「しからば、誰かが何によらず語り聞かせる時には、いろはの文字を語り聞かせるのではないか」

彼は同意した。

「では、君がいろはのすべてを知っている以上、君が知っているもののどれかを語り聞かせるのではないか」と彼は言った。

これもまた同意した。

「しからばどうだ、誰かが何かを語り聞かせるならば、それを学ぶのは君ではなくて、いろはを知らない者ではないか」と彼は言った。

「いや、私です、私が学ぶのです」と彼は言った。

B

「しからば、君は君の知っているものを学ぶのだ、いやしくもいろはをすべて君が知っている以上は」と彼は言った。

彼は同意した。

C

「したがって君は、正しくは答えなかったわけだ」と彼は言った。

これらのことをエウテュデモスが全部言うか言わないうちに、ディオニュソドロスは、その問答をボールのように受け取って、再び若者めがけて投げつけようとして言った。「エウテュデモスは君を騙しているのだ、クレイニアス。何故なら、僕に言って見たまえ、学ぶということは、何かひとが学ぶものの知識を取り入れることではないのか」

クレイニアスは同意した。

「して、知っているというのは、すでに知識をもっているということにほかなるまい」と彼は言った。

彼は肯定した。

「したがって、知っていないということは、未だ知識をもっていないということだな」

彼は同意した。

「ところで、何によらず取り入れる人々は、すでにもっている人々か、それとも、もっていない人々か」

「もっていない人々です」

「しからば、君は先に知っていない人々もまたこの人々、すなわち、もっていない人々に属するということに同意していはしなかったか」

彼はうなずいた。

「したがって、学ぶ人々は取り入れる人々に属するが、しかし、もっている人々にではないのだな」

彼は肯定した。

「したがって、知っていない人々が学ぶのだ、クレイニアス、しかし、知っている人々がではない」

七

D なおその上、エウテュデモスは若者を投げ倒そうとして、いわば相撲の三番目の勝負(1)をするために突進しようとした、そして私は、若者が参りそうにしているのを見てとって、あの子が怯むことのないように、一息つかしてやろうと思って、彼を励ましながら言った。「な、クレイニアス、問答が君には変に見えても、驚くことはないよ。というのは、たぶん君は他国のご両人が君を囲んで、どんなことをやっていなさるのか、気がつかないんだろうからな。しかしこの人たちは、コリュバンテス(2)の秘儀を行なう人々がこれから秘儀に与らせようとする者を囲んで着座式を行なう時にやるのと同じことを、やっていなさるのだ。すなわち、あの式でも一種の輪舞と戯

E れとがあるのだ——君も秘儀に与ったことがあるなら、〔知っていようが。〕今このご両人は、その後で、君を秘儀に与らせるつもりで、君を囲んで、ほかじゃない、輪舞をやって、言わば戯れながら踊っていなさるようなものだ。だから今、君は知者たちの秘教の最初の部分(3)を聞いているのだと思うがよい。何故かというと、プロディコス(4)が言うように、人は先ず第一に名辞の正しさについて学ばねばならないからだ。そして他国のご両人が君に知らしていなさるのも、ちょうどこのことだ。すなわち、学ぶという言葉を人々はこういう場合に、すなわち、ある事柄について初めには、何らの知識をももっていない人が、後になってその事柄について知識を取り入れる場合に用いるが、しかしまた、この同じ言葉を、すでに知識をもっていて、その知識によって同じ事柄を——それが、為されることであろうが、言われることであろうが、一層よく見てみる場合にも用いるということを君が

知っていなかったということをね、——もっとも、人々はこの後の場合を学ぶというよりは、むしろ理解するという言葉で呼んではいるが、時にはまた、学ぶと呼ぶこともあるのだ。そしてこの方々が、知らしていなさるのはこのことなんだが、それを君はまるで気づかずにいたのだ、つまり、同じ名辞がまるで反対の状態にある人々、すなわち、知っている人にも、知っていない人にも用いられるということをね。それから、第二の問におけるも B のもこれとほぼ同じだ、その問では君に、人々はいずれを学ぶのか、知っているものをか、それとも知っていないものをか、とご両人は尋ねられたんだが。たしかにそれらは学識の戯れだ——それだから実際、僕はこの方々が君に戯れかけていなさると主張するのだ——そして戯れと僕が言うのは、たとえかようなものを多く、いや皆学んでみたところで、事柄がどうあるかということが、それだけ余計に知れるというものではなく、名辞〔の意 C 味〕の相違を利用し、小股をすくって投げ倒しながら、人々に戯れかけることができるくらいのものだからだ。ちょうどそれは、腰を下ろそうとしている人々の小椅子を、こっそり後ろにひっぱる奴らが、人の後ろざまにひっくりかえったのを見て、喜び笑うようなものなのだ。だから、これまでのことは、このご両人から君に戯れとして、なされてきたのだと思うがよい。しかしこの後では、このご両人なら、きっと君に真面目なことを自分か

---

1 ギリシアの相撲では相手を三度投げ倒した時に、始めて勝名乗が挙げられることになっていた。

2 コリュバンテスはプリュギアにおいて崇拝せられた神々の母レア、あるいはキュベレの祭司であった。その厳粛な祭礼においては彼らは武装して熱狂的に踊り狂い、それに合わせて笛を吹き太鼓、鐃鈸（にょうはち）を打ちならしたという。

3 秘教にも初歩的なものや奥義的なものなどのあったことは『饗宴』210Aに暗示されている。そしてソクラテスがソフィストの言論を謎と見て、その真意を忖度する例は『テアイテトス』152Cにも見られる。

4 紀前五世紀、ソクラテスとほぼ同年輩のソフィスト。ケオスの人で、類語の区別を得意とした。

ら示して下さるに違いあるまいが、僕もご両人が先に約束なさったことを、僕に果たして下さるように、ご両人の先払の役をつとめよう。というのは、説き勧める知恵の力を見せてやるとおっしゃったからだよ。しかし今は、僕に思われるのだが、まず初めに、君に戯れなければならぬとお考えになったのだ」

D 「ところで、エウテュデモスにディオニュソドロス、あなた方の戯れは、これだけにして下さい、それに、もう充分でしょう。そして、どうか、次には、この若者に説ききかせながら、どういう風に知恵と徳とを心掛けねばならないかということを、ひとつ、示して下さい。しかしそれより前に、私はあなた方に、私がそれをどのようなものと解しているか、またそれをどのようなものとして聞きたく思っているか、をご覧に入れましょう。ところで、私がそれをやるのでは、あなた方には素人臭く滑稽に見えるかも知れませんが、私を笑わないで下さい。あなた方の知恵を心から聞きたいばかりに、あなた方のお前もはばからず、口から出てきたところで、ひとつ、やってみようというのですから。それで、あなた方自身もあなた方のお弟子さんたちも、どうか、笑わずに辛抱して聞いて下さい」

E 「しかし、君は、な、アクシオコスの息子よ、僕に答えてくれ」

八(1)

「いったい、われわれ人間というものは、誰でも旨(うま)くいくこと(幸福であること)(2)を望みはしないか。いや、これはたしかに僕が今さき心配していた笑うべきものに属する問の一つじゃないかな。何故って、こういうことを問うことさえが、もうたしかに愚かなことだろうからな。いったい、人間のうちに誰か旨くいくことを望まない

279

ものがあるか」

「そんな者は、一人もいません」とクレイニアスは言った。

「それはそれでいいとして、さあ次だ、旨くいくことを望むからには、では、どうすれば旨くいくだろうか。多くの善いものをわれわれがもっていれば、いくだろうか。それとも、これは先のよりもっとつまらぬ問かな。何故って、これも、やっぱりそうだということは、わかりきったことだからな」と私は言った。

彼は肯定した。

「では、さあ来た！ そして、有るものどものうちで、いったい、どのようなものが、われわれにとって善いものなのか。いや、これだって、むずかしいものではなく、非常にお偉い方でなければ、旨く答えられないというものではないようだ。何故って、富んでいることが善いことだ、と皆がわれわれに言うだろうからな。え、そうじゃないか」

「たしかにそうです」と彼は言った。

1　以下一〇章まで(278E〜282E)及び一七章より一八章まで(288D〜291Dまで)、いわゆるプロトレプティコス・ロゴス。

2　ギリシア語 εὖ πράττειν はうまくいくこと(あるいは、うまくやること)と幸福であることという二つの意味で用いられうる。後者の意味において普通は使用される。この言葉が語られた時、クレイニアスも、またその他の人々もこの意味において、それを聞いたと思われる。しかし、ソクラテスはこの両義を利用して、幸福をもたらすのは知恵にほかならぬことを導き出してくるのである。また『ゴルギアス』495E〜496Bにおける問答にもこの両義が利用されている。なお同書、507Cには両義の関連が示され、本篇、280Bには εὐδαιμονεῖν と εὖ πράττειν とは並べて挙げられている。

B

「それから、健康であることも、美しくあることも、またその他身体(からだ)に関することでは申し分なくできているということも[1]、そうではないか」

彼にも、そうだと思われた。

「それからさらに、生まれがいいというのも、また自分の国で力をもつというのも、尊敬せられるというのも、善いものである、これは明らかだ」

彼は同意した。

「それではなお、善いもののうちで何がわれわれに残っているか。思慮深くあることや、正しくあることや、勇敢であることは[2]、いったい何なのか。な、クレイニアス、君は、ゼウスに誓って、どちらだと思う、仮にこれらを善いものとして挙げるなら、われわれは正しく挙げることになるだろうか、それとも挙げないほうが、かね。われわれと考えの違った者がないでもなかろうからな。が、君にはどう思われるか」と私は言った。

「善いものです」とクレイニアスは言った。

C

「それでよろしい、が、知恵は舞歌団[3]のどこに入れたものだろう。善いものの間にか、それともどうだ、君の答は」

「善いものの間に、です」

「ようく気をつけるんだよ、善いもののうちで、いやしくも語るに値するほどのものは、何一つ見落とすことのないようにね」

「ええ、しかし何一つ、われわれは見落としていないように私には思われます」とクレイニアスは言った。

それで、私は想い出して言った。「ゼウスにかけて！　たしかにわれわれは、善いもののうちで一番大きなのを見落としたようだぞ」

「何ですか、それは」と彼は言った。

「成功だ、(4) クレイニアス、それはすべての人が、いや、非常に馬鹿な奴さえが、それを善いもののうちで一番大きなものだと言っているよ」

「おっしゃる通りです」と彼は言った。

D　それで、私はもういっぺん考えなおして言った。「これは、少しのところで、他国の方々に笑いものにされるところだったよ、僕も君も、な、アクシオコスの息子よ」

「それは、いったい、どうしてですか」と彼は言った。

1　『法律』I. 631C, II. 661A, IX. 870B、『ピレボス』48D、『ゴルギアス』451E参照。

2　次に挙げられる知恵と共に、ギリシアにおける主要な四つの徳である。

3　単に仲間とか同類とか組とか言うところを特に劇のコロスに見立てて述べたのである。

4　ギリシア語はεὐτυχίαで、これは普通には自分の力によらずに得られた好い結果、すなわち日本語の僥倖、好運の意味で使用されていた。しかしそれを語源的に見れば、τὸ εὖ τυγχάνειν τινός すなわち、或るものを狙ってうまくそれにあてることという意味をもち得るのである。ソクラテスは、この意味を普通の用語法に反して、与えることによって以下の議論を展開していく。この場合には、自分の力で得られた成功の意になる。クレイニアスがこの言葉を聞いた時、普通の意味で解していたのは、もちろんである。日本語としては為合（しあわせ）(仕合)がこれに近くはないかとも思われたが、これでも、やはり意を尽せないので、結局成功と訳しておいた。以下の議論においては、この両義を常に念頭において読んでいただきたい。

「成功は、さっきのところで挙げたのに、今またもういっぺん、その同じものについて語っていたからだよ」

「そして、それは、いったい、どうしてですか」

「可笑(おか)しなことじゃないか、さっき挙げられていたものを、もういっぺん挙げて、二度も同じことを言うなんて」

「とおっしゃると、それはどういうことなんですか」と彼は言った。

「知恵は、な、成功だろう、そして、これは、子供にだってわかることだろう」と私は言った。

すると、彼はびっくりした。そんなに、彼はまだ若くて人が好いのだよ。

そして私は、彼がびっくりしているのを見てとって「クレイニアス、君は笛を旨くやることでは、笛吹きたちが一番成功する者だということを知ってはいないか」と私は言った。

E

彼は肯定した。

「では、また文字を書くことや読むことでは、読み書きの師匠たちではないか」と私は言った。

「ええ、全くそうです」

「しかしどうだ。海の危険を避けることでは、一般的に言って、知恵のある舵取りよりももっと成功する人々が誰かいるなんて、まさか君は思うまいね」

「ええ、思いませんとも」

「しかしどうだ。戦に出ては、どちらと君は好んで危険や好運を共にしたいかね。知恵のある将軍とか、それとも知恵のない将軍とか」

「それは、知恵のある将軍とです」
「しかしどうだ。病気のさいには、どちらと君は好んで一緒に危険を冒したいか、知恵のある医者とか、それとも知恵のない医者とか」
「それは、知恵のある医者とです」
「それは、つまり、知恵のあるものと一緒に行れば、知恵のないものと一緒にやるよりは、成功するだろうと考えるからではないか」と私は言った。
彼は承認した。
「それでは、知恵はどんな場合にも人間たちに成功を得させるものだ。何故かというと、知恵はどんな時でも何についても為損じるというようなことは決してなく、むしろそれは正しく行って、為当てるからだ。そうでなければ、実はもう知恵ではないだろうからな」

九

B
われわれは、どうにかこうにかしてとうとう、それは、ひっくるめて言うと、こうであること、すなわち、ただ知恵が手もとにありさえすれば、その知恵が手もとにある人は、その上成功を少しも必要とするものではない、ということに意見の一致をみたのだ。そして、この点でわれわれは一致をみたから、先に同意せられていたものが、われわれにはどういうことになるだろうかと、再び私は彼に訊ねにかかった。「すなわち、われわれの同意を見たのは、もしわれわれの手もとにたくさんな善いものがあるなら、幸福であって、旨くいくだろうというのだ

った」と私は言った。

彼は肯定した。

「では、われわれのもとにある善いものによって幸福であるのは、それらが、われわれに少しも為にならない場合だろうか、それとも為になる場合だろうか」

「それは、為になる場合にです」と彼は言った。

C 「では、われわれのもとに、ただあるだけで、それを用いない場合に、何か為になるだろうか。例えば、われわれのもとに、たくさんの食糧はあるが、しかしそれらを食べない場合に、あるいは飲物はあるが、しかし飲まない場合に、何かわれわれの為になるものがあるだろうか」

「いや、決してありません」と彼は言った。

「しかしどうだ。すべての職人のことだが、もし彼らのためにそれぞれ自分の仕事に必要なものが、すべて準備されてはいるが、しかしそれらを用いない場合に、職人が所有していなければならぬものを、すべて所有しているからといって、これらの職人たちは、この所有によって旨くいくものだろうか。例えば大工だが、もし彼がすべての道具と充分な材木を準備してはいるが、しかし大工仕事をやらない場合に、この所有から何か彼の為になるようなものが出てくるかね」

D 「いや、断じて出てきません」と彼は言った。

「しかしどうだ。もし誰かが富や、さっきわれわれの挙げた善いものを、すべて所有してはいるが、しかしそれらを用いない場合に、それら善いものの所有によって、幸福であるだろうか」

「いや、ありませんよ、決して、ソクラテス」

「それでは、幸福になろうとする者は、このような善いものを、ただ所有しているばかりではなく、またそれらを用いなければならぬということになるようだ。というのは、ただの所有からは、何も為になるものは出てこないんだからな(1)」と私は言った。

「おおせの通りです」

E 「ところで、クレイニアス、人を幸福にするのには、もうこれで充分か、善いものを所有していて、それを用いるというだけで」

「ええ、私にはそう思われます」

「どちらだね、ひとが正しく用いる場合にか、それともまた、そうでない場合にもか」と私は言った。

「それは、正しく用いる場合に、です」

「これはうまい、その通りだよ。というのは、たとえどんなものでも、ひとがそれを正しく用いない場合には、それを放っておく場合よりも、一層いけないことが多いだろうと僕は思うからだ。何故って、先の場合は悪いのだが、後の場合は悪くもなければ善くもない(2)からだ。それとも、われわれはそういう風には主張しないかな」と

281 私は言った。

1 B、T写本の ὡς による。

2 相対立する二つのものの中間者、「あれでも、これでもないもの」は初期の対話篇においては相当の役割を演じている。『ゴルギアス』467 E sqq.、『リュシス』216 D sqq.、『メノン』88 C、『カルミデス』161 A sqq.、『饗宴』202 A sqq. 参照。

彼は承認した。

「それではどうだ。材木に手を加えたり用いたりすることにおいて、それを正しく用いるようにさせるものは、まさか大工の知識よりほかのものじゃあるまいね」

「ええ、ありませんとも」と彼は言った。

「さらにまた、家具を作る仕事においても、正しく用いることを得させるものは、思うに、知識だろう」

彼は肯定した。

「それでは、われわれが初めに挙げた善いもの、すなわち、富や健康や美の使用について見てみても、すべて B このようなものを正しく用いる道を教え、その行為を旨く成し遂げさせるのは、きっと知識ではないか、それとも何か他のものなのか」と私は言った。

「それは、知識」と彼は言った。

「したがって知識は、人間にどの所有と行為においても〔幸運な〕成功のみでなく、善処をも与えるようだ」

彼は同意した。

「では、ゼウスを証人にきくが、思慮や知恵なしに、これら以外の所有物から何か為になるものが得られるものかね。人間がもし理性をもっていないなら、いったい、利益を得るのは、多くのものを所有していて多くのことを為す場合だろうか、それともむしろ、少しのものを所有していて少しのことを為す場合だろうか(1)。それは、C こういう風に考えて見るがよい。為すことがより少なければ、為損じることも、それだけ少ないだろうし、為損じることが、より少なければ、拙(まず)くいくことも、それだけ少ないだろうし、拙くいくことが、より少なければ、

不幸も、それだけ少ないだろう、そうじゃないか」

「ええ、全くです」と彼は言った。

「ところで、ひとがより少しのことを為すのは、どちらの場合だろうか、貧しい場合か、それとも富んでいる場合か」

「貧しい場合です」と彼は言った。

「して、それは病気している場合か、それとも丈夫な場合か」

「病気の場合」

「して、名声のある場合か、それとも名声のない場合か」

「名声のない場合」

「して、より少なく為すのは勇敢で、自制のある場合か、それとも臆病な場合だろうか」

「臆病である場合」

「それではまた、忙しく働いている場合よりも、むしろ怠けている場合ではないか」

彼は承認した。

D

「また、速力の速い場合よりも遅い場合、視力や聴力の鋭い場合よりも鈍い場合ではないか」

このようなことをすべて、われわれは互いに承認し合った。

---

1 イアンブリコスに従い、νοῦν ἔχων を削って読む。

「では、今までのところをひっくるめて言うと、クレイニアス、われわれの問答は、われわれの最初に善いものであると言ったすべてのものが、遺憾ながら、どうしてもともとそれら自らただ自分らだけで善いものであるかという問題についてなされてきたものではないようだ、むしろ僕の見るところでは、次のようなものだ。すなわち、もし愚昧がそれらの道案内をすれば、それらが、その悪くある案内者に随うことができればできるだけ、その反対のものどもよりもそれだけ大きな悪いものである。これに反して、もし思慮や知恵が道案内をすれば、E それらは、それだけ大きな善いものである、しかしそれらのどちらも、それら自らただ自分らだけでは、何の値打もないものだ」と私は言った。

「そうですね、私の見るところでは、あなたのおっしゃる通りのようです」と彼は言った。

「それでは、上に言われてきたところから、われわれにはどんな帰結が出てくるかね。それはほかではあるまい、他のものはどれ一つとして善いものでもなければ悪いものでもなくて、これら二つあるうちで、一方の知恵は善いものだが、他方の愚昧は悪いものである、ということになるだろう」

彼は同意した。

一〇

282 「それでは、更に進んで残りのものをよく見てみることにしよう。われわれは皆幸福であることを心から望んでいるが、しかしかようなものになるのは物を用いること、しかも正しく用いることによってであるということがわかったし、それにこの正しさ、成功というものをもたらすのは知識であることがわかったから(1)、それで人は

皆できるだけ知恵のある人になるように、どうにでもこうにでもして身を修めなければならないようだ。それとも違うかね」と私は言った。

「いいえ」と彼は言った。

B 「そうして、父からはもちろんのこと、後見人からも友だちからも——愛人だと称しているものなら、なおさらのこと、それらが他国の人だろうが、国の人だろうが、金銭よりかこれの方をはるかに多く譲り受けねばならないと思って、知恵をお裾わけして下さいと願ったり泣きついたりしながら、知恵のある者になりたいばかりに恥ずかしからぬ奉仕ならどんなことでも奉仕しようと覚悟して、この知恵のために愛人ばかりかすべての人々に、召使や奴隷のように仕えるのは、決して恥ずべきことでもなければ、クレイニアス、また決して非難すべきことでもないのだ(2)。それとも君にはそのようには思われないかね」と私は言った。

「いや、そうです、もちろんあなたのお言葉の通りでよろしいと思われます」と彼は言った。

C 「そうだ、クレイニアス、いやしくも知恵が教え得るものであって(3)、ひとりでに人間のもとに出来てくるのでないのなら、ね。というのは、これはまだわれわれの調べてみないものだし、また僕と君とが一致を見ていないものだ」と私は言った。

---

1 原文は諸写本のままに読む。バーネットは τι を補って読んでいる。

2 『饗宴』218C〜D参照、ここでアルキビアデスは出来るだけ立派な人間になるために、ソクラテスに対して何ものをも、その貞操をさえも惜しまぬことを述べている。

3 『プロタゴラス』361Bでソクラテスは徳の教え得られるものであることを述べているが、それは徳は知恵であるという前提に基づいている。

「だが、私にはね、ソクラテス、教え得るものであるように思われます」と彼は言った。

そこで、私は喜んで言った。「これはこれは、全く有難い、ほんとによくしてくれたよ君、親切にも君は知恵が教え得るものであるか、それとも教え得るものでないか、というほかならぬこの問題について長い考察を私から免除してくれたのだ。だから、知恵は教え得るものであるばかりか、有るもののうちでただそれだけが人間 D を幸福にし、成功者にするものだと君には思われるのだから、今は知恵を愛さなければならぬ、と主張するよりほかはなかろう、そして君自身はそれをやるつもりかね」

「もちろんですとも、ソクラテス、力の及ぶ限りね」

そして私はそれを聞いて喜んで言った。「私の見本というのはこんなものです、ディオニュソドロスにエウテュデモス、私は説き勧める言論はこのようなものであって欲しいと願っているのですが、それは多分素人臭いでしょうし、それに話口もぎこちなく長ったらしい。しかしあなた方のうちどちらなりとお好みの方がこの同じことを術を用いてやりながら、われわれにやってみせて下さい。しかしそれがお嫌なら、私がやめたところから次 E のことをこの若者にやってみせて下さい。すなわち、これがすべての知識を手に入れなければならないか、それとも何か一つの知識があって、幸福であり善い人であるには、それを我ものにしなければならないか、そしてそれは何であるかということをね。というのは、初めにあたって私が言いましたように、この若者が知恵のある善い人になるということは、われわれにとってほんとに大切なことなんですからね」

二

さて、クリトン、私は以上のことを言ったのだ。そして、この後から続いてくるものに出来るだけ気を配って、いったい、彼らはどんな仕方で問答にとりかかるだろうか、また知恵や徳を修養するように、若者を励ますのに何処から始めるだろうか、それらを詳しく見ようとした。すると、彼らのうち年長者であるディオニュソドロスが先に話をし始めた、そしてわれわれは皆、立ちどころに何か非常に驚くべき言論が聞けるだろうと思って、彼の方に目を向けていた。すると、果してそいつがわれわれに起ったのだ。というのは、クリトン、実に驚くべき問答をあの男はし始めたのだからね、その問答が徳に向けてどんなに心を励ますものであったか、そりゃ、君、傾聴に値するものだよ。

B 「僕に言いたまえ、ソクラテス、それから、この若者が知恵のある者になることを望んでいると言っているその他の諸君、その言葉は戯談(じょうだん)なのか、それとも実際ほんとうに望んでいることなのか、本気なのか」と彼は言った。

そこで私は考えた、して見ると、さっき両人に若者と問答をしてくれるようにと願った時にはわれわれが、戯談を言っていると思ったのだな、それだからこそ戯れかけて本気ではなかったのだな、と。さて、こんなことを考えて私は一段声を高めて「私たちは、それはもうとても本気なのです」と言った。

C するとディオニュソドロスは言った。「さあ、それなら、よっく考えたまえ、ソクラテス、君が今言っていることを否定するようなことにならぬように、ね」

「それは、もう考えたところです。というのは、否定するようなことには決してならぬということですよ」と私は言った。

「しからばどうだ。諸君は彼が知恵のあるものになるのを欲すると主張するのか」と彼は言った。
「ええ、全く」
「して今、クレイニアスは知恵のあるものであるか、それともないか」と彼は言った。
「これは、まだ知恵のあるものでなんかない、と言っていますよ、法螺を吹く子じゃありませんからね」と私は言った。

D 「して、諸君はこれが知恵のあるものになって愚かなものではあらぬ、ことを欲するか[1]」と彼は言った。

われわれは同意した。
「しからばこれがあらぬものになって、今あるものではもはやあらぬことを諸君は欲するのだ」
私は聞いて、どぎまぎした。しかし彼は、私がどぎまぎしているところを、すかさず言った。「しからば諸君は、これが今あるところのものでは、もはやあらぬことを欲するのであるから、どうやら諸君はこれが亡いことを欲しているようだ、ね、そう言うよりほかはあるまい。だが、その稚児さんが亡くなってしまうのを、何にもまして大事なことだと思っているような友人や愛人たちというものは、これは大したものだろうって」

三

E そしてクテシッポスはこれを聞くと、その稚児さんのために怒って言った。「トゥリオイのお人、もしこう言うのがあまり無躾でないなら、貴様の首こそ亡くなりやがれ！　と僕は言うでしょうがね、だってあなたは、どんなつもりか、僕とその他の人々とについてこのようなひどい拵えごとをして、僕がこの人の亡くなってしまうの

284

を願っているなんて嘘をつこうとするのだから。そんなことは口にするさえ僕は神をはばからぬことだと思っているのに」

「しかし、どうだ、クテシッポス、え、君には嘘をつくことができると思われるのだね(2)」とエウテュデモスは言った。

「ええ、そうです、ゼウスに誓って、もし僕の気が狂ってさえいなければ」と彼は言った。

「嘘をつくというのは、何であれ言論がそれについてなされている当(とう)の物事を言ってなのか、それとも言わずになのか」

「言ってです」と彼は言った。

「しからば、いやしくもそれを言っているとすれば、有るものどものうちで、彼が言っているちょうどその当のものよりほかの物を言っていないのではないのか」

「ええ、それはもちろんのことです」とクテシッポスは言った。

1　以下の詭弁は「である」を「がある」と、また「であらぬ」を「があらぬ」と取換えたところに成立する。すなわち、ギッフォードの言うように、「……の性質のもの(οἷος)であるところの」と言うべきところを、「あるところの(ὅς)」と言ったところに成立する。

2　後の284Aでエウテュデモスは「有るものや有るものどもを言っている人というものは、本当のことを言っているのである」と言っている。しかし、実際は、有るものについて或ることを言うというのが言う(λέγειν)という言葉の本来の用法であるが、それを普通には、このソフィストのように「当の物事を言う」あるいは「有るものを言う」という風に、用いられているところに以下の詭弁が成立し得るのである。

「しかるに彼の言っているその当のものだが、これもまた有るものどものうちの一つである、他の有るものとは別の」

「ええ、全くです」

「しからば、その当のものを言っている人は有るものを言っているのではないか」と彼は言った。

「そう」

「しかるに少なくとも有るものや有るものどもを言っている人というものは、本当のことを言っているのである。したがってディオニュソドロスは、いやしくも彼が有るものどもを言っているのであるならば、本当のことを言っているのであって、君について何も嘘をついているわけではない」

B

「それはそうです。が、しかしあんなことを言う人[1]は、エウテュデモス、有るものどもを言っているのではありませんよ」とクテシッポスは言った。

すると、エウテュデモスは言った。「して、有らぬものどもは、どうだ、有らぬのだろう」

「有りません」

「しからば、少なくとも有らぬものどもは、どうだ、何処においても有るものどもではないのだろう」

「そうです、何処においても」

「しからば、これら、すなわち有らぬものどもについて誰かが何か或る行ないを為して、その結果、たとえ誰であれ、これら何処にもあらぬものどもを作るというようなことができるか」

「僕にはできるとは思えません」とクテシッポスは言った。

C

「しからばどうか。弁論家は大衆の中で語る時に、何ものも為さないのか」
「いや、たしかに為すのです」と彼は言った。
「しからば、いやしくも為す以上は、また作るのではないか(2)」
「そうです」
「しからば語ることは為すことであり、また作ることだね」
彼は同意した。
「しからば少なくとも有らぬものどもを言うものは誰もいないわけだ、――何故ならば、すでに何かを作るのであろうから(3)。しかるに君は誰も有らぬものを作ることはできないということに同意しているのだ――したがって君の言論によれば、誰も嘘を言いはしない、むしろディオニュソドロスがもし言っているとすれば、彼は本当

1　この言葉が誰を指すかについては、問題はあるが、このところは次のように解される。すなわち、クテシッポスは「いやしくもディオニュソドロスが有るものを言っているならば、本当のことを言っている」という命題を先ず許して、次にそのいやしくも……ならばという条件が現在の場合には充たされないことを主張しているのである。つまり、先にディオニュソドロスが、「諸君はクレイニアスが亡くなることを欲している」と言ったのは、有るものを言っているのではないと主張しているのである。

2　『カルミデス』163A～Eにおいては為すこと(πράττειν)は、美しい有益な作品を作ること(ποιεῖν)だとして区別されている。

3　ここでは次の如き推論が働いているものと見ることができる。――言うことは為すことである、したがって作ることである。作るというのは何かを作るのである。そしてその何かというのは有るものか、有らぬものかのいずれかである。然るに有らぬものを作ることはできない。したがって作るものは有るものを作るのである。したがってまた有るものを言うのである。

のことをも、有るものどもをも言っているのだ」

「そうです、ゼウスに誓って、エウテュデモス。だが、有るものどもをなるほど或る仕方で言ってはいますが、しかし事実ある通りにではありません」とクテシッポスは言った。

D　「どう言うんだね、クテシッポス、いったい物事をそれがある通りに言う人々がいるのか」とディオニュソドロスが言った。

「いますとも、善美な人々と本当のことを言う人々とがそうですよ」と彼は言った。

「しからばどうか。善きものは善くあり、悪しきものは悪しく(拙く)[1]あるのではないか」と彼は言った。

彼は承認した。

「して君は、善美な人々は物事がある通りに言うということに同意するね」

「同意します」

「しからば、クテシッポス、善き人々は悪しきものを悪しく(拙く)言うのだな、ある通りに言う以上は」と彼は言った。

E　「ええ、ゼウスに誓って、大いにそうです、少なくとも悪い人々をね。で、もし僕の言うことを信じられるなら、あなたは善い人々があなたを悪く言わないために、その仲間の一人とならないよう、用心なさるがよい。百もご承知でしょうが、善い人々は悪い人々を悪く言うのですからね」と彼は言った。

「また大きい人々を大きく、温い人々を温く言うか」とエウテュデモスは言った。

「ええ、たしかにそうですよ、少なくとも冷たい(冷やかな)人々を冷やかに言い、そしてそんな人々は冷やか

に問答をすると申しますよ(2)」とクテシッポスは言った。

「君、そいつは当てこすりだ、クテシッポス、当てこすりだよ」とディオニュソドロスは言った。

「いやいや、僕に限って決してそんなことはありませんよ、ディオニュソドロス、僕はあなたを愛しているのですから。いや、僕はあなたを友人と思って忠告しているのです、そして僕に面と向かって、こんなに不躾に、

285

僕がこの上なく大事に思っている人々の亡くなってしまうのを望んでいるなんて、言われることの決してないように説きつけようと努めているのです」と彼は言った。

一三

そこで私は、彼らがお互いにあまり粗暴にすぎると私には思われたので、クテシッポスをからかってやろうと思って言った。「おい、クテシッポス、われわれは他国の方々から、その言われるものを、もしくれてやろうとなさるのなら、いただいて、そして名辞のことで(3)喧嘩をしないがいいと僕には思えるがな。だって、もしご両人が人間を亡くするといっても、こういう工合に、つまり悪くて考えのないものから、善くて考えのあるものを作る

1　ギリシア語 κακῶς はここで悪しくとも拙くとも解されるのである。そこでディオニュソドロスはこの曖昧さを利用して、クテシッポスの「善美なる人々は物事がある通りに言う」という主張から「善美なる人々が拙く言う」という背理を導き出そうとする。しかるにクテシッポスはすでにソフィストの手のうちを鋭く看破して以下巧みに応答する。

2　これはエウテュデモスたちの無味乾燥な言論に対する皮肉である。これを覚ってディオニュソドロスは「当てこすりだ」と言って怒るわけである。

3　「名辞のことで」とは283Dの「亡くなすこと」を指す。

という工合に亡くすることを心得ておいでになるのなら——そしてこれを、つまり、その、悪い人間であるのを

B　亡くして再び善い人間として出現させるというような何かそういう破壊と滅却とをさ、自分で発見されたのにせよ、また誰か他の人から学ばれたのにせよ、もしこのことを心得ておいでになるのなら——いや、明らかに心得ていなさる。何故と言って、それはご両人が自分たちの術は人間たちを悪いものから善いものにするために最近発見されたばかりのものだと言われたからだ——で、ともかく、われわれはご両人にそれを認めることにして、われわれのためにこの若者を亡くしてもらって考えのあるものにしていただこう、それからわれわれ他の者も皆

C　ね。だが、もし君たち若い者が恐がるなら、その危険は、まあ、僕をカリア人(1)と見たてて、僕のうちでやってもらおう。というのは、僕は実際年寄なので危険を冒す用意ができている、それで僕の身をこのディオニュソドロスに、ちょうどコルキス人のあのメデイア(2)に任せるように、お任せするからね。この方は僕を亡くなされるがよい、そしてお望みなら、煮なさるがよい、またお望みなら、何でもお望みのことをなさるがよい、ただ善いものとしてだけは再び出現させて下さるように」

するとクテシッポスは言った。「私はね、また自分でも、ソクラテス、私の身をこの他国の方々に提供する用意はできています、たとえこの方々が現在皮を剝がれるよりも、なおもっとこっぴどく剝ごうとされようとも、

D　この私の皮が、マルシュアス(3)のそれのように、けっきょく皮袋になるのではなくて、徳になってくれるのでしたらね。けれども、このディオニュソドロスは私がこの方に腹をたてていると思っていられるのです、しかし私は腹をたてているのではなくて、私に向かって立派に言っていられないと私に思われることに対して反対を言っているのです」それから彼は〔ディオニュソドロスに向かって〕言った。「それはそうと、あなたは反対を言うことを、

どうか容赦して、ディオニュソドロス、当てこすりと呼ばないで下さい。だって、当てこすりというのは何かそれとは別のことなんですからね」

一四

するとディオニュソドロスは「クテシッポス、君は反対を言うことができるとでも思って、そういうことを言っているのかね」と言った。

E 「できますとも、ええ、大いにできます、それともあなたは、ディオニュソドロス、反対を言うことはできないと思うのですか」と彼は言った。

「ともかく、君はね、ひとりの人が或る他の人に反対を言っているのを、かつて聞いたことがあるということは決して証明できまいよ」と彼は言った。

1 「カリア人において危険を冒す」というのは「費用のかからぬ冒険をやる」という意味で慣用的に使用される。

2 コルキス王アイエテスの娘で、魔法に通じていた。金羊皮を求めて父のもとに来たイアソンを愛してその妻となり、イアソンの老衰した父アイソンを薬草やその他のものから製した秘薬によって四〇歳も若返らせる。この話を聞いてペリアスの娘たちもメデイアにその父を若返らせてくれるように懇願する。そこでメデイアは彼女たちにその父を剣で切り刻ませて後、これを煮えかえっている草の汁の中に投げ入れるという物語がある。

3 マルシュアスは女神アテネの捨てた笛を拾い、その笛を吹き、アポロンはキタラ琴をかなでて、音楽の競演をやった結果マルシュアスが敗れ、その罰としてアポロンにその身の皮を剝がれ、皮袋に作られて木につるされたという伝説から、「皮を剝ぐ」という言葉が最も厳しい拷問を意味する慣用句として得らるるにいたった。

「それはほんとうですよ。しかし、クテシッポスがディオニュソドロスに反対を言っている間に、僕がその反対を言うことはできるということをあなたに証明できるかどうか、現に今聞いてみたらどうでしょう[1]」と彼は言った。

「どうだ、きっと君はそのわけを答弁することもできるだろうね[2]」と彼は言った。

「ええ、できます」と彼は言った。

「しからばどうか。有るものどものそれぞれに対して定義があるか」と彼は言った。

「それは、ありますよ」

「しからばその定義が言い表わすのは、それぞれのものが有る通りにか、それとも有らぬ通りになのか」

「それは、有る通りにです」

「というのは、君が覚えているならば、クテシッポス、先にもわれわれは有らぬ通りに言うものは誰もいないということを示したからだね。何故ならば有らぬものを言うものは一人もいないということが明らかになったからだ」

「だと、それが、いったい、どうだというのですか。僕とあなたとは、そのために互いに反対を言うこともそれだけ少なくなるのですか」とクテシッポスは言った。

「ところで、どちらだ[3]、われわれ両人とも同一事物の定義を言っている時、互いにわれわれは反対を言うのであろうか、いや、その場合はおそらく同一のことを言うのではなかろうか」と彼は言った。

彼は同意した。

B

「しかしいずれの者も事物の定義を言わない時に、われわれは互いに反対を言うのであろうか。いや、かかる場合には、われわれはいずれも事物のことを全然口にさえしていないのではなかろうか」と彼は言った。

これにも彼は同意した。

「しかしそうだとすると、つまり僕が一事物の定義を言い、君が或る他の事物の定義を言う時、互いに反対を言うのであるか。いや、僕はその事物を言うのであるが、しかし君は全然それを言わないのだね。だが、言わない者が言う者にどうして反対を言うことができようか」

一五

するとクテシッポスは黙り込んだ。しかし私はその言論に驚いて言った。「それはどういうことですか、デ C ィオニュソドロス、いや、実はね、この言論は非常に多くの人々から、そして度々聞いていつも驚いているわけ

---

1 クテシッポスはディオニュソドロスが彼の問に直接答えようとはしないで、再びくだらぬ問答に彼を引き入れようとするのを早くも見てとって、ディオニュソドロスの言葉をあっさり承認した上で、直ちに現在の事実を以て彼の主張を否定しようとする巧みな問答のかけ引きであると解される。それは284Bにおけるクテシッポスの抗議によく似ている。285E5の原文については、'Ἀληθῆ λέγεις の後はピリオドで切り、その後T写本の ἀκούωμεν νῦν εἴ を読む。

2 互いに反対を言っている事実は否定できないので、クテシッポスの提案を軽く聞き流して、再び彼を得意の言論のうちに引き込んで、言論の上では反対を言うことは不可能だということを示そうとするのである。

3 以下ソフィストの言論の根底には「ひとは常に有るものを言う」、したがって「人は誰でも常に正しい定義」を言うという考えが働いている。このことはすでにソクラテスも見抜いて、次章初めにおいてその言論の意味を「間違ったことを言うことはできない」を言い現わすものと解している。

ですが、――実際プロタゴラス派のもの[1]も、もっと昔の人々[2]もそれを大いに用いていたのです。しかしいつも私には非常に驚くべきもののように思われます。それは、実際、他のものばかりか自分で自分をもひっくりかえしさえする[3]からです。――しかしそれの本当のところを、あなたから聞いて一番立派に学べるだろうと思っています。間違ったことを言うことはできない、こういうんですね――というのは、これがその言論の意味なんですから、そうじゃありませんか。――それはそうと、ものを言えば、本当のことを言うか、それとも、ものを言わないか、このどちらかでなくちゃならないのですね」

彼は承認した。

D

「では、間違ったことを言うことはできないが、しかしそれを思うことはできるのですか、できないのですか」

「思うこともできない」と彼は言った。

「それでは、間違った思いも全然ないわけですね」と私は言った。

「ない」と彼は言った。

「では、愚かさも愚かな人間たちもいないわけですね、それとも、もしあるとすれば、これが愚かさじゃないでしょうか、事物について間違うということが」

「うん、たしかにそうだ」と彼は言った。

「しかしこれはできない」と私は言った。

「うん、できない」と彼は言った。

「言論のために、ディオニュソドロス、こういう言論を言っているのですか[4]、奇妙なことを言おうと思ってね、

E

それとも実際ほんとうに愚かな人間は一人もいないとあなたには思われるのですか」
「そうだ、しかし君は、ひとつ、反駁してみたまえ」と彼は言った。
「え、これもあなたの言論によれば、できる〔有る〕というのですか、反駁することも、誰一人間違いはしないのに」
「それはできない〔有らぬ〕」とエウテュデモスは言った。
「だからただ今、僕は反駁するように命じたわけではなかったのだ。何故というに、どうしてできぬこと〔有らぬこと〕を命ずることができようか」とディオニュソドロスは言った。(5)

1　プロタゴラスはアブデラの人で、前五世紀に活躍したソフィスト。

2　『クラテュロス』429D参照。なお、『ソピステス』260C sqq. にもソフィストが虚偽の不可能を主張することが述べられている。ここでもっと昔の人々と言われているのは、『テアイテトス』152Eと照合すれば、ヘラクレイトスやエムペドクレスなどであろう。もちろん彼らは自らそういうことをそのままの形で述べたわけではないが、彼らの説くところを推してゆけば、そういう帰結が生じてくると考えられるところから、ここでソクラテスはもっと昔の人々もそれを用いたと言っているのであろう。

3　Diog. L. III. 35 に、「アンティステネスが皆の前で自分の書いたものの一つを読もうとして、プラトンに臨席を乞うた、そこでプラトンが何を読むつもりなのかと尋ねたところ、反駁は不可能であるということについてだ、と答えた。では、どうして他ならぬこの題目について君は書くことができるのか、と言って、プラトンはその言論が自分で自分を反駁することを教えてやった。」と言われている。なお、288A参照。

4　事柄そのものを探究するのではなく、ただ言葉の上だけで、その場逃れの議論をすることは、ソクラテスの好まないところである。『ラケス』196C、『クリトン』46D、『テアイテトス』164C参照。

5　B、T写本の οὐδ' ἄρα ἐκέλευον, ἔφη, ἐγώ, νυνδή, ὁ Διονυσόδωρος, ἐξελέγξαι を読む。

287

「あなたかな、命じたのは。[1] エウテュデモス、それらの器用なことも、正しいことも全くわからず、どうも頭の働きが鈍いもんだから。だから、大方もっと何か野暮なことを言うかも知れません。だが、どうか許して下さい。して、これはどうでしょう、いいですか、もし間違うことも間違ったことを思うことも、愚かであることもできないなら、ひとが何かをやる時に、やり損うこともできますまい、ね、そうでしょう。というのは、やれば、そのやることを誤ることはできないんですからね。こう、あなた方は言うのじゃありませんか」と私は言った。

「もちろんだ」と彼は言った。

「これからしてが、すでに野暮な問です。何故って、やるのにしろ、言うのにしろ、心で考えるのにしろ、もしわれわれは誤ることがないのなら、あなた方は、ゼウスに誓って、もしそれがそうであるのなら、何の師匠としてお見えになったのですか。[2] いや、さっきあなた方は、学ぼうと望むものには何人にもまして徳を一番立派に授けるだろう、とおっしゃりはしませんでしたか」と私は言った。

B

一六

「いや、これはソクラテス、君はそれほど耄碌(もうろく)しているのか、われわれが最初に言ったものを今時分思い出し、そしてもし昨年僕が何かを言ったとしたら、今から思い出すだろうが、しかし現在言われているものは、どう始末していいかわからんほどもな」とディオニュソドロスが口をさしはさんで言った。

「ええ、わかりません、実際それらの言論は格別むずかしいときていますからね——それも、もっともなことだ、知恵のある方々から言われているんだから——何故なら、あなたがおっしゃるその最後の言葉さえ始末する

のはむずかしいのですから。つまり、その〃どう始末していいかわからん〃とあなたのおっしゃるのは、いったC い、何のことですか、ディオニュソドロス、それとも、問うまでもなく私がその言葉を反駁することを知らない、ということをおっしゃっているのですか。というのは言って下さい、この〃言論をどう始末していいかわからん〃という言葉は、あなたには他にどんなことを考えている(3)〔意味している〕のですか」と私は言った。

「いや、とにかく、君の言っていることなら、それを始末するのに大して手間隙はとらぬ(4)。というのは答えてみたまえ」と彼は言った。

「あなたが答える前にですか、ディオニュソドロス」と私は言った。

「答えないのか」と彼は言った。

「え、それはまた正しいというんですね」と私は言った。

「もちろん、正しいことだ」と彼は言った。

---

1 この箇所は文章の割当てや読方について、校訂者の間に多くの相違が見られるが、ギッフォードによって、τὸ γὰρ ……κελεύσαι, までをディオニュソドロスに、οὐ δὲ κελεύεις をソクラテスに割り当てた。

2 『テアイテトス』161C参照。ここでは同じような考えが述べられている。

3 原語は νοεῖ で、この語がここに示されたような両義をもつところに、以下の詭弁が成立するのである。

4 訳文はバッダムの校訂 τούτῳ 〈γ' οὔ〉 πάνυ χαλεπὸν χρῆσθαι による。ここのところでも、286E注5におけると同様、相手の言うことなど全く問題にしないで、自分の思うつぼへ無理やりに相手を引きずり込んでいこうとする傲慢なディオニュソドロスの態度がうかがわれる。ソクラテスの真面目な問に表われた νοεῖ という一つの語を捕えて、ソクラテスの言うように、いたずら小僧のやるようなことを、すなわち、ただ言葉の遊戯をこれからもやろうとするのである。

「どんなわけで。いや、明らかにこんなわけからですか、つまりあなたは、現在われわれのもとに言論にかけては実に万知万能の人としてやってきて、何時答えなくてはならぬか、何時答えてはならぬかをご存じだからですか。そして今は、何ごとによらずお答えにならないのでしょうか、答えてはならぬということをご存じだから」と私は言った。

D

「べちゃくちゃ言っているな、答えるのを放っておいて。しかし、まあ、いいから君、僕の言うことを聞いて答えたまえ、僕が知者だということを、君は実際認めてもいるんだから」

「それじゃ、言うことを聞かねばなりますまい、また是非そうしなくてはならぬようです、あなたが指導者なんですから。さあ、ともかく訊ねなさい」と私は言った。

「しからば、考えるものとして考えるのは、魂をもつものか、それともまた魂をもたぬものもか」

「魂をもつものです」

「しからば、何か魂をもつ言葉を知っているか」

「ゼウスにかけて、それは、私なんぞの知るところではありません」

E

「しからば何故にさっき、言葉が僕には何を考えているか〔意味しているか〕と尋ねたのだ」

「ほかにわけなんかありますまい、馬鹿なために誤ったというより。いや、それとも誤ったのじゃなくて、これも正しく言ったのかな、言葉が何を考えているのかと言った時に。あなたは私が誤ったとおっしゃいますか、それとも誤っていないと。というのは、もし私が誤らなかったのなら、たとえあなたは知者でおありになっても、反駁しもなさるまいし、またその言葉をどう始末していいかおわかりにもなりますまい。が、もし誤ったのなら、

288

それなら、あなたは誤ることはできないと主張なさる時、正しくは言っていないのです。そうして、これらのことを私は昨年おっしゃったことに対して言っているのではありません」と言った、〔それから更に〕「それはそうと、ディオニュソドロスにエウテュデモス、この言論はいつまでも同じところに留っていて、[1] 昔と同じように、[2] やはり投げ倒しながら自分でも倒れるようです。だから、こんな目に逢わないことは、まだあなた方の術によってさえも発見されていないわけです、もっともあなた方の術は言論の精緻という点にかけては、いやはや、実に驚嘆すべきものではありますがね」と私は言った。

B

と、クテシッポスは「実に奇妙なことをあなた方はおっしゃいますね、トゥリオイの方々、でなければ、キオスの方々、でなければ、どこの人とでも、またどんなようにでもお好きなように呼びますが、[3] あなた方は妄言(たわごと)うのをまるきり何とも思っていられないものだから」と言った。

そこで私は罵(ののし)り合いになりはせぬかと心配して、クテシッポスを再び宥(なだ)めようと思って言った。「クテシッポス、これは先にもクレイニアスに言ったんだが、その同じことを君にもまた言うと、つまり君はこの他国の方々の知恵が驚嘆すべきものであるのを知らないのだ。ともかくご両人は本気になって、われわれに〔知恵の力のほ

1　言論の少しも進行しないことを意味している。『パイドン』86E、『テアイテトス』200A参照。

2　プロタゴラスやそれ以前の人々と同じようにということである。このことは先にも(286C)述べられた。なお、後の303D～Eをも見よ。またこのような、他のものをも自分をも投げ倒す言論については『ソピステス』238D参照。

3　ここで、クテシッポスはちょうど神に呼びかけるような表現を用いて(神は多くの名前で呼びかけられた)、彼らを自分が神のように思っているという風を見せながら、しかも他方では彼らが街から街へ歩き回っている(271C)ことを皮肉っているのである。

どを〕見せてやろうとはされないで、プロテウスを、あのエジプトのソフィストを真似て、われわれを誑かされるのだ。だからわれわれはメネラオスを真似て、ご両人を逃さないことにしよう、自分たちが本気で取扱われるものにおいて、その正体をわれわれに現わして下さらないうちはね。というのは、本気になり始められた暁には、ご両人のうちにある何かこの上もなく立派なものが現われてくると思うからだ。ともかく正体を現わして下さるよう、ご両人にお願いしお勧めし、またお祈りもしよう。ところでご両人が自分たちの方で僕にどのようなものとして現われられんことを祈っているか、その手本を僕は自分の方でもう一度ご覧に入れたがいいと思う。そこで、以前にやめたところのすぐ次を、一つ出来るかぎり、すっかり詳しく話してみることにしよう、もしどうにかして自分の方に釣り込んで、ご両人が僕の一生懸命で本気なのをかわいそうだと思って、情をかけ、自分たちでも本気になられるようにな」

C D

一七

「だが、君は、クレイニアス、あの時われわれは何処でやめたか、僕に想い出させてくれ。ええと、僕が思うには、何処かここらあたりであったようだ。知恵を愛さなければならん、これが最後にわれわれの一致したことだ。そうじゃないかね」と私は言った。

「はい」と彼は言った。

「が、愛知と言えば知識の獲得だ、そうじゃないか」と私は言った。

「はい」と彼は言った。

E

「では、いったい、どんな知識を獲得したなら、正しく獲得したことになるだろうか。これは、つまり、何であれわれわれの為になる知識を、ということは、こりゃ定りきったことじゃないか」

「ええ、全くです」と彼は言った。

「では、もし歩き回って土地の何処に非常に沢山な金が埋めてあるかを見分けることを知っているならば、何かわれわれの為になるだろうか」

「ええ、多分」と彼は言った。

「しかし、先の吟味によって、われわれは少なくともこのことを、すなわち、骨も折らず土地を掘り返しもせずに、金をすべてわれわれの手に入れたとしても、それは何の足しにもならないということを明らかにした。だからたとえ石を金にすることを知っているにしても、その知識は一文の値打もないだろう。というのは、もしまた金を用いることをも知っていなかろうものなら、それから何の利益も生じてこないことが明らかになったから

289

だ。それとも憶えていないかね」と私は言った。

---

1 ホメロスの『オデュッセイア』第四巻三五一行以下のメネラオスの物語の中に出てくる人物を指すもので、その物語によると、このプロテウスはエジプト沖合のパロス島に住み海神ポセイドンの下僕で、予言の術を心得、また変化自在の神通力を有する半神である。ラケダイモン王メネラオスはトロイアからの帰途、この島において順風に恵まれず、いたずらに二〇日あまりを過ごした時、このプロテウスの娘と言われているエイドテイアに謀を授けられ、その援けを得てプロテウスを捕える。初め彼は獅子や大蛇に、あるいは水や木などに変化するが、飽くまでも抑えつづけているうち、遂に変化に疲れて正体を現わし、メネラオスの問に答えて、順風の恵まれぬ理由などを教えるのである。

2 前注参照。

「いや、それは、もうよく憶えています」と彼は言った。

「そしてまた、その他の知識からも決して為になるものは何も生じて来ないようだ、金儲けの術からも、医術からも、またその他何かを作ることは知っているが、しかし自分の作るものを用いることは知らぬ術からもね。そうじゃないか」

彼は肯定した。

B
「そしてまた何か、不死な者にするほどの術があってもね、その不死を用いることを知っていなければ、その術からさえ為になるものは何も生じて来ないようだ、もしさきに一致せられたことを証拠に何かを判断しなければならぬとすればね」

それらすべてのことに関してわれわれは同意見であった。

「だから、美しい少年よ、われわれは作ることと、その作るものの用い方を知っていることとが一緒にそこでは落ち合っているような何かそうした知識を必要とするわけだ」と私は言った。

「ええ、そう見えます」と彼は言った。

C
「それじゃ、まだなかなかのようだね、われわれがリュラ琴作りでなくちゃならん、何かまたそうした知識を手に入れたものでなくちゃならんというのでは。というのは、知っての通り、ここでは作る術と用いる術とは——もっとも同じものに関係はあるが、それぞれ別々に引き分けられているからだ、何故といって、リュラ琴作りの術とキタラ琴弾きの術とは互いに著しく相違しているからだ。そうじゃないか」

彼は肯定した。

「しかしまた、笛作りの術を必要とせぬことも明らかだ。それもまたやはりこうしたものだから」

彼は同意見だった。

「しかし、神々にかけて、もしわれわれが作辞の術を学ぶなら、それはわれわれが幸福であるために手に入れておかねばならぬものじゃないか」と私は言った。

「いや、そうは思いません私は」とクレイニアスは答えて言った。

D

「それには、どんな証拠を用いるのか」と私は言った。

「私は見るのです、ちょうどリュラ琴作りがリュラ琴を用いることを知っていないように、自分たちが作る自分の言論を用いることを知っていない或る作辞家たち(1)を。ここでもそれらの人々が作ったものを用いることのできるのは、かえって他の人々で、自分では言論を作ることのできない人々です。だから明らかに、言論に関しても作る術と用いる術とは別です」と彼は言った。

「君のあげる証拠は僕には充分だと思われる、人がそれを手に入れたら幸福であるものというのは、作辞家の

E

術じゃないということについてね。もっとも僕は多分そこで、われわれが長いこと求めてきたちょうどその知識が現われるだろうと思っていたんだがね。というのは、僕にも作辞家たちは、これと一緒になると、その人物そのものも、ね、クレイニアス、飛切り賢く、彼らの術そのものも非常に神々しい崇高なものと思われるからだ。

1　ギリシア語 λογοποιός は元来、ἐποποιός(詩作家)に対して散文作家を意味するが、ここでは法廷弁論の作家たちを指す。なお、304D注1をも参照。

290 そしてそう見えても、もちろんそれは何も不思議なことじゃないのだ。何故って、それは妖術師の術の一部でそれより少しばかり劣ったものなのだから。というのは、妖術師の術の方は毒蛇や蜘蛛や蝎(さそり)やその他の動物、または病気を魅惑するものだが、この術の方は裁判官や民会員やその他の群集を魅惑するものであり鎮静させるものであるからだ。それとも君には何か違った風に思われるか」と私は言った。

「いいえ、私にはね、あなたのおっしゃる通りに思われます」と彼は言った。

「じゃ、われわれはなお何処へ向かうことができるだろうか。どんな術へ」と私は言った。

「私などには、よくわかりません」と彼は言った。

「そうかね、しかし僕の方は見つけだしたようだぞ」と私は言った。

「それは何ですか」とクレイニアスは言った。

B 「将軍術が何ものにもまして、ひとがそれを手に入れたら幸福である術だと僕には思われるよ」と私は言った。

「私には、そうは思われません」

「どうしてだ」と私は言った。

「この術はですね、一種の、人間たちを狩る狩猟術ですよ」

「そうだと、いったい、どうなるんだ」と私は言った。

「狩猟術そのものはどんなのでも、狩って手に入れるだけで、それ以上には出ません。そして、それが何か狩るものを手に入れた時に、それを用いることができません、むしろ陸(おか)の猟師たちや海の漁師たちは調理人たちに

C 譲り渡すのです。しかしまた、幾何学者や星学者や算数学者は——というのは、これらの人々もまた狩猟家です

から、何故ってこれらの人々はそれぞれ図形を作るのではなくて、有るものどもを見出すのですから――だから自分ではそれらを用いることを知らず、ただ狩ることを知っているだけですから。もちろん彼らは、少なくともてんからの考えなしでないかぎり、誰でも自分の発見したものを問答家たち[1]に用いて貰うために譲り渡します」と彼は言った。

「いかにもね、クレイニアス、君は非常に美しいばかりか、また大変賢いのだね、だが、それは実際そうなのかい」と私は言った。

D

「ええ、そうですとも。また将軍たちだって同じように、彼らが或る国なり陣地なりを狩りとると、それを政治家たちに譲り渡します――何故なら狩ったものを自分では用いることを知らないからです――それは、思うに、ちょうど鶉取りが鶉飼い[2]に譲り渡すようなものです」と言い、さらに「だからもし作るなり、狩るなりして手に入れるものを自分で用いることをも知っているあの術をわれわれが必要とするのでしたら、そしてかような術がわれわれを幸福にするのでしたら、言うまでもなく将軍術の代りに何か他のものを探さなければなりません」と彼は言った。

1　幾何学者と問答との関係については、『国家』VII. 531B～536Bを参照のこと。

2　鶉を飼い育てたのは、それらを闘わせるためであったらしい。『法律』VII. 789Bには老人たちが闘わせるために鳥の雛を育てることが語られている。

一八

E

クリトン ソクラテス、君は何を言っているのだね。あの若者がそんなことを口にしたのか。

ソクラテス 信じないか、クリトン。

クリトン ええ、信じてたまるもんか、ゼウスに誓って。そんなことを言ったのなら、彼は教育のためにエウテュデモスも、なおその他の人も決して必要とはしないと私は思うよ。

ソクラテス いや、それだと、ゼウスにかけて、クテシッポスだったかも知れないな、それを言ったのは。私は憶えていないよ。

291

クリトン いや、どうして、クテシッポスなんかじゃあるまいよ。

ソクラテス いや、それでも、このことだけはよく知っている、それを言ったのはエウテュデモスでもなければディオニュソドロスでもなかったということは。しかし、奇妙なことだが、クリトン、誰か優れた方々のお一人が居合わせて、それをおっしゃったのかも知れないな。それを聞いたということだけはたしかだからね。(1)

クリトン ゼウスに誓って、ソクラテス、それはきっとどなたか優れた方々のお一人だったと私には思われる、それも非常に優れた、ね。(2)が、その後でなお何か術を君たちは探したのか。そして探し求めていた目当ての術を発見したのか。それとも発見しなかったのか。

B

ソクラテス これはお目出度い！ 発見したかだって？ どうして、私たちはそれは実におかしなものだったよ。ちょうど雲雀(3)を追っかける子供のように、毎度どの知識でも直ぐに捕まえるだろうと思ったが、しかしその

都度それらは手の下からすり抜けて逃げ去ったのだ。ところで、それをいろいろ君に話して聞かせたところで何になろう。が、ともかく、帝王の術へやって来て、それについて、それは幸福を提供し成就する術であるかどうかを調べてみると、そこではまるでラビュリントス(4)に陥ったように、もう終わりにいると思っていると、一回りぐるりと回って、またもいわば探究の初めにいて、最初に探し求めていた時に必要としたものとちょうど等しいものを必要とするということがわかったのだ。

C

クリトン いったい、ソクラテス、どうして君たちはそんなことになったのかね。

ソクラテス ええ、それは私がこれから話すよ。つまり、私たちには政治の術と帝王の術とが同じものであると思われるにいたったのだ。

クリトン すると、いったい、どうなのだ。

ソクラテス その術には将軍術もその他の術も、ただそれだけが用いることを知っているもののように思って、

1　優れた方々とはここで神々のことをいう。『ソピステス』216B参照。ソクラテスはクリトンの強い疑いに敢えて反対しようとせず、自分の記憶が曖昧であるようなふりをして、それを神が言ったことにするのである。ソクラテスと交った結果、最初には全然無知であるように見える者が、自分自身の見るところでも、他人の見るところでも驚くばかりの進歩をすることは、ソクラテスが自ら『テアイテトス』の151Dにおいて語っている。

2　クリトンはソクラテスの「優れた方」がソクラテス自身であったのではないかというような語調を見せている。

3　古注には「鶉に似た鳥で、コリュダルロスと言っている人々もあって、ゲー(地神)とアテナの両神に捧げられた鳥である。」と言われている。普通の雲雀と違ってその頭に冠毛をもっていたようである。

4　伝説によれば、ダイダロスがエジプトのラビュリントスを真似てクノッソスに建てたミノタウロスの住居で、そこに一度足を踏み入れると決して出てこれぬということである。

自分たちがその職人として作ったものを支配して貰うために譲り渡しているように思われたのだ。そこで明らかにそれは私たちの探し求めていたものだと思われたのだ、そして国における正しい行為の原因で、全くアイスキ

D ュロスのイアンボス調の詩の通り(1)、それだけが国という船の艫に坐してすべてのものの舵を取りすべてのものを支配してすべてのものを有用なものにすると思われたのだ。

クリトン ええ、どうだ、その君たちの思ったことは正しかったのじゃないかね、ソクラテス。

一九

ソクラテス それは、クリトン、君が批判するがよい、もしまたその後でわれわれに起こったことをも聞く気があるならね。つまり、まあ、こういう工合にまたまた考察し始めたのだ。さあ来た、帝王の術はすべてのもの

E を支配してわれわれのために何か仕事を仕上げるのか、それとも何も仕上げないのか。ええ、仕上げますとも、と私たちは互いに言った。君も、クリトン、そう主張しはしないだろうか。

クリトン ええ、そうだ、私も。

ソクラテス では、何がそれの仕事だと君は主張するだろうか。それは、仮に私が君に、医術はそれが支配するすべてのものを支配してどんな仕事を提供するか、と聞いたようなものだ。君は健康を、と主張しはしないだろうか。

クリトン ええ、そうだ。

ソクラテス して、どうだ。君たちの術の農業術は。それが支配するすべてのものを支配してどんな仕事を仕

上げるか。君は、土地からできる栄養をわれわれに提供する、と主張しはしないだろうか。

クリトン ええ、そうだ。

ソクラテス して、どうだ、帝王の術は、それが支配するすべてのものを支配して、何を仕上げるか、大方、おいそれと造作なくいきはすまい。

クリトン そうだとも、ゼウスに誓って、ソクラテス。

ソクラテス そうだろうよ、私たちもいかなかったんだから、クリトン。しかし君は少なくともこれだけのことはご存じだ。すなわち、もしそれがわれわれの求めているものであるならば、それは為になるものでなくちゃならんということはね。

クリトン ええ、全く。

ソクラテス じゃ、少なくとも何か善いものを、それはわれわれに提供しなくちゃならんのじゃないか。

クリトン それは、もう是非ともね、ソクラテス。

B

ソクラテス ところが、善いものは或る知識より何かほかのものではない、ということに私とクレイニアスとは一致を見たと思うが。

クリトン そう、君はそう言ったよ。

1 アイスキュロス『テバイ攻めの七将』一―三行「カドモスの臣民たちよ、国という船の艫に坐し、舵を操り、国の政を看る人は……適宜な布告をしなくてはならぬ」参照。

ソクラテス　だから人が政治術に属すると主張するようなその他の仕事――そしてそれはたくさんあるだろう、例えば国民たちを裕福にするとか、自由にするとか、騒動しない者にするとか、あるだろうが、――これらすべてのものは悪くもなければ善くもないということが明らかになった、そしてそれが国民たちの為になり、また彼

C

らを幸福にするものでなくちゃならんというのなら、彼らを知恵のあるものにし、また知識を分け与えなくちゃならなかった。

クリトン　それはそうだ。少なくともあの時は、君たちによって、君が今話を伝えた通りに、一致せられたのだった。

ソクラテス　ところで、帝王の術は人々を知恵のあるものにし、善いものにするか。

クリトン　ソクラテス、いったい、どうしてしないわけがあろう。

ソクラテス　が、すべての人をすべてのものに関して善いものにするかね。そしてすべての知識を、すなわち靴作りの術や大工の術やその他のすべての知識を、それは提供するものなのか。

クリトン　いや、そうは思わないよ私は、ソクラテス。

D

ソクラテス　そうかね、それではそれが提供するのはどんな知識なのか。それをわれわれは何のために用いたらよいのか。というのは、それは悪くもなければ善くもないどんな仕事の職人であってもならないし、自分自身よりほかに他のどんな知識をも与えてはならないのだからね。だからそれは、そもそも、何なのか、それを何のために用いたらよいのか、ということを話すことにしよう。クリトン、どうだね、それは、われわれがそれによって他の人々を善い者にするべきものだと言ったら、よいだろうか。

クリトン　ええ、そうだ。

ソクラテス　そして、それらの人々はどんなことで善く、どんなことで有用だというのであろうか。それとも更にわれわれは、彼らが他の人々を、そしてその他の人々はまた他の人々をそういうものにする、と言ったもの E であろうか。しかし、そもそも、どんなことで彼らは善いのか、それは少しもわれわれには明らかにならない。政治術に属すると言われる仕事を、われわれは信用しなかったものだからね。むしろ全く諺の通り、「ゼウスの息子、コリントス」(1)が生じてくる、そしてこれはさっき言ったことだが、等しいものが、いや、もっと多くのものがわれわれには必要だ、われわれを幸福にすることのできるあの知識はそもそも何であるかということを知るためにはね。

クリトン　ゼウスにかけて、ソクラテス、ほんとに君たちは大きな困難のうちにやってきたようだね、見るところ。

ソクラテス　だから、クリトン、私は自分でも、この困難に落ち込むと、直ぐにありとあらゆる声を放って(2)、293 ちょうどディオスクロイ(3)に助けを求めるように、この他国の方々にわれわれを、私とクレイニアスとを言論の大

---

1 この諺は同一の事柄を何の得るところもなく幾度も繰り返す場合に用いられる。ここでは、「われわれを幸福にする知識は何か」という問題について幾度も探究が繰り返されるので、この諺が用いられているのである。

2 「ありとあらゆる声を放って」という句は、『法律』X. 890Dによく人に言われる言葉として挙っている。

3 すべての困難、特に戦場や荒海において苦しんでいる人人を、助ける兄弟の神、神話ではテュンダレイオス、またはゼウスとレダとの間にできた息子で、一人はカストル、他の一人はポリュデウケスまたはポリュクスと呼ばれている。

浪から助け出して下さい、是非とも本気になって下さい、そして本気になった上で、それを手に入れたら余生を立派に過せる知識というのはそもそも何であるか、それを示して下さいと願ったのだ。

クリトン　すると、どうだね。エウテュデモスは何かを君たちに示そうとしたか。

ソクラテス　ええ、それはもちろんだ。しかも、ざっくばらんに言うと、君、極めて尊大にその言論をこういう工合に始めたのだよ。

二〇

B

「ソクラテス、では、諸君がもうさっきから困っているその知識を君に教えてやろうか、それとも君がそれをもっているということを示してやろうか」と彼は言った。

「ああ、それは有難い！　でも、それはあなたの力でできることですか」と私は言った。

「うん、もちろんだ」と彼は言った。

「じゃ、ゼウスに誓って、どうか、私がそれをもっているということを示して下さい。何故って、こんな年輩の男としては、学ぶよりもその方がずっと楽ですから」と私は言った。

「では、さあ、僕に答えたまえ。何か君の知っているものがあるか」と彼は言った。

「ええ、ありますよ、たくさん、ほんとにつまらぬものですが」と私は言った。

「いや、それで結構。ところで君は、有るものどものうちの何かで、それが現に有るところのちょうどそのもので有らぬことのできるものがある、と思うか」と彼は言った。

C 「いや、ゼウスにかけて、私はそういうものがあるとは思いませんよ」

「ところで、君は何かを知っていると言ったじゃないか(1)」

「そうです」

「では、いやしくも知っているならば、君は識者じゃないか」

「ええ、もちろんです、ちょうどそのことに関してなら、ですね」

「そんなことはどうでもいいさ。とにかく識者である以上、君はすべてのものを知っているのが必然じゃないか」

「いや、ゼウスに誓って、そんなことはありませんよ。私はたくさん他のことを知らないんですから」と私は言った。

「では、君が何かを知っていないならば、無識者であるわけだ」

「ええ、そのことについてなら、ですね、ご友人」と私は言った。

「ほう、そう言ったら、それでいくらか君の無識者たることが少ないというのかね。しかし、さっき君は識者 D であると言ったね。かくして君は現に有るところのちょうどそのもので有り、且つまた他方ではそれで有らぬのだ、同時に同じものに関して(2)」と彼は言った。

---

1 B、T、W写本の ἔφης を読み、その後に ἐπίσθασθαι を読む。

2 知識に関して。

「なるほどね、エウテュデモス。実際、あなたの言われるのは、よく言う奴ですが、〝嬉しい便[1]〟というものです。ところで、私たちが探し求めてきたあの知識を私はどういう工合に知っているのですか。いかさま、あいつは、つまり同じもので有りまた有らぬということはできないのだから、もしいやしくも私が一つを知っているなら、すべてを知っている——というのは、私は同時に識者と無識者ではあり得ないから——そしてすべてを知っているからには、言わずとまたあの知識をもっている。こうあなたは言うのですね、そしてこれがあの〔見つけ出された〕知恵なんですね」と私は言った。

E

「それでは、君は自分でほかならぬ自分を反駁しているというものだ[2]、ソクラテス」と彼は言った。

「が、どうです、エウテュデモス、あなたもこの同じ羽目に陥ってはいませんか。こうお聞きするのは、たしかにあなたと一緒なら、また親友のこのディオニュソドロスと一緒なら、どんな羽目に陥ったって、少しも私は不満には思わないからです。私に言って下さい、あなた方ご自身は、有るもののどものうち或るものは知っているが、しかし或るものは知っていないのじゃありませんか」と私は言った。

「いやいや、そんなことは少しもない、ソクラテス」とディオニュソドロスは言った。

「と、おっしゃると、それはどういうことですか。いや、すると、何も知っていないのですか」と私は言った。

「いや、どうしてどうして」と彼は言った。

「それでは、すべてを知っているのですね、たとえどんなのでも知っていなさるからは」と私は言った。

294

「そうだ、すべてを知っている、そして僕だけではない、また君だって一つでも知っていれば、すべてを知っているのだ」と彼は言った。

「これは驚いた！　あなたのお告げでは、ほんとにまあ魂消（たまげ）た、ど偉い善いものが明らかにされたわけなんですねえ！　どうです、また他のすべての人間たちにしてもすべてを知っているか、それとも何も知っていないかじゃありませんか」と私は言った。

「そうだ、何としても或るものは知っているが、或るものは知らない、すなわち同時に識者であり、無識者であることはできないのだからね」と彼は言った。

「だとすると、どうなんです」と私は言った。

「すべての人はすべてを知っているのだ、一つでも知っておれば」と彼は言った。

B

「神々にかけて、ディオニュソドロス、――というのは、あなた方が本気だということは今はもう私には明らかなんだから。あなた方に勧めて本気になって貰うのはなかなかのことでしたが――ほんとうに自分たちがすべてのことを知っているのですか、例えば大工の術や製靴の術を」と私は言った。

「もちろんだ」と彼は言った。

「じゃ、靴を縫うこともできるのですね」

1　ここは色々の校訂がほどこされているが、B、T、W写本のままに καλὰ δὴ πάντα λέγεις を読み、そして諺にあたる部分を καλὰ πάντα と見た。
　ソクラテスはソフィストの詭弁がどういう点で成り立つかをすでに承知しながらも、ソフィストの言うことは願ったりかなったりの嬉しいことだとして一応有難そうにその言を受け入れておいて、次にその急所を抑えるのである。

2　ソクラテスは先に自分には知らぬことがたくさんあると言っている。しかるに今彼はソフィストの主張から「自分はすべてを知っている」という帰結を出して見せる。すなわち、彼は自分で自分の言葉を反駁することになるのである。

「ゼウスに誓って！　また靴底をつけることでもできるのだ」と彼は言った。
「じゃ、またこんなことも、星や砂について、それらの数がどれだけあるか、ということも知っているのですね」
「もちろんだよ、なあんだ、君は僕らがそれを認めないだろうなんて思っているのか」と彼は言った。

二一

と、クテシッポスは口をさしはさんで「ゼウスにかけて、ディオニュソドロス、それらのことについて何か証拠として、次のようなことを示して下さい。それは、それによってあなた方が本当のことを言っていられる、ということを知るためなのです」と言った。
C
「何を示せというのか」と彼は言った。
「あなたは、エウテュデモスが歯を幾本持っておられるか、またエウテュデモスは、あなたが幾本持っておられるか、ご存じですか」
「僕らがすべてを知っているということを聞くだけで、君には充分でないのか」と彼は言った。
「よして下さいよ、そんなことは。それよりか、われわれにやっぱりただ一つそのことをおっしゃって、あなた方が本当のことを言っている、ということを示して下さい。そして、もしあなた方がそれぞれ幾本持っているかをおっしゃって、僕たちが数えて見た上でご存じだということがわかれば、そしたら、もう僕たちは他のことでもあなた方を信ずるでしょう」と彼は言った。

D　すると、両人はからかわれていると思って答えようとしなかったが、しかし一つずつクテシッポスが尋ねていくと、どれもこれも承認して知っていると言った。クテシッポスは全くあけすけにとうとう何でもかでも尋ねたのだ、非常に恥ずかしいことまで彼らが知っているかどうかとね。しかし両人はそれらを認めて知っていると言いながら、ちょうど打撃を目がけてそれにぶっつかろうと突進する猪のように、非常に勇敢にそれらの問にぶっつかって行ったのだった。だから、私はね、クリトン、信用がおけないで、自分でもとうとうディオニュソドロスがまた踊ることも知っているかどうか、と訊かずにはおれなかったよ。と、彼は「そうだ」と言った。

E　「まさかなんでも、あなた方の知恵は、その年で並べた剣の間をとんぼがえりしていったり、輪の上でぐるぐるまいしたりする曲芸までできるほど、遠くまで進んではいますまい」と私は言った。

「いや、何一つ知らないものはないさ」と彼は言った。

「が、すべてをあなた方ご両人はただ今だけ知っているのですか、それともまた、いつでも知っているのですか」と私は言った。

「また、いつでもだ」と彼は言った。

「子供であった時にも、生まれて直ぐにも、すべてを知っていたのですか」

両人とも同時にそうだと言った。

295　そしてその事柄は信じられぬことのようにわれわれには思われた。と、エウテュデモスは「信じないのか、ソクラテス」と言った。

「ええ、あなた方がどうも知者であるらしい、ということ以外はですね」と私は言った。

「しかし僕に答える気があるなら、君もまたその驚くべきことに同意する、ということを示してやろう」と彼は言った。

「ええ、どうぞ、それらについて反駁されるのは非常に嬉しいことです。というのは、ねえ、私が自分の知者であることを気づかずにいるのに、あなたがそれを、つまり私がすべてをそしていつでも知っているということを示して下さるなら、全生涯の間にこれより大きいどんなめっけものをすることができるでしょうか」と私は言った。

二三

B

「では、答えたまえ」と彼は言った。

「お訊きなさい、答えるつもりですから」

「では、ソクラテス、君は或ることの識者か、それともそうではないか」と彼は言った。

「識者です」

「では、君がよって以て識者であるところのそのものによって、また君は知るのか、それとも何か他のものによってか」

「識者であるところのものによってです。というのは、あなたは魂のことをおっしゃっていると思いますから。それとも、これのことをおっしゃっているのじゃないんですか(1)」

「恥ずかしくはないか、え、ソクラテス。君は尋ねられる者のくせに、逆に尋ねるのか」と彼は言った。

「うーむ、なるほどね、しかしどうしたらいいのですかね。どんなにでも、あなたが命じなさるようにするつもりですから。あなたが何を尋ねているのかわからない時に、それでも私に答えろ、再び尋ねちゃいかん、とおっしゃるのですか」と私は言った。

C

「そうだ、だって君は、きっと僕が言っているものを何かと解るだろう?」と彼は言った。

「ええ、そうです」と私は言った。

「では、その君の解るものに対して答えたまえ」

「じゃ、どうですか、あなたが心に思って尋ねているのとは別な意味に私が解って、それからこれを目当てにして答えるなら、その答が少しも要点に触れていなくとも、あなたは満足なさるのですか」と私は言った。

「僕にはそうだ、しかし、思うに、その君にはたしかにそうじゃあるまいよ」と彼は言った。

「それでは、ゼウスにかけて、私は答えはしませんよ、尋ねて合点のいくまではね」と私は言った。

「うん、君は答えようとしないんだ、その時々に何か君の解るものに対して。くだらぬことをしょっちゅうしゃべくって、焼が回りすぎているもんだから」と彼は言った。

D

で私は、彼が私のまわりに名辞の網を張りめぐらして私を捕えよう、と思っているものだから、向こうの言うことを私がはっきりさせようとすると、腹をたてるんだということがわかった。すると、コンノスのことが思い

---

1 アリストテレス『詭弁論駁論』($175^{b}10$)に、争論術においては答は「然り」か、あるいは「否」とのみ言わるべきことが要求されていたことが見られる。そしてまた訊く人の問が曖昧であるために、答える人は訊かれていることに何かをつけ加えて答えることを余儀なくされるということも述べられている。

出された。あの先生もまた、私が彼の言うことに従わないと、いつでも私に腹をたてて、それからというものは私を馬鹿者扱いにして余り私を構ってくれないのだ。だが、つまるところ、私はこの人にも弟子入りする腹だったから、私をぼんやりだと思って弟子にとらないようなことのないように、彼の言うことを聞かなくちゃならんと思った。そこで私は言った。「とにかく、エウテュデモス、そうするのが善いことだ、とあなたに思われるなら、そうしなくちゃなりません。何故って、ともかくあなたは私よりも、素人の人間よりも、術を心得ておいでだから、定めて立派に問答するすべをご存じでしょう、だからもう一度初めからお尋ね下さい」

E

「しからば、もう一度答えたまえ、君の知るものを君が知るのは、或るものによってか、それともそうでないか」と彼は言った。

「ええ、そうです、魂によってです」と私は言った。

296

「また、この男は訊かれていることより余計な返答をする。何故って、僕が訊いているのは、何によってかというのじゃなくて、或るものによって知るか、どうかというのだ」と彼は言った。

「また必要以上のことを答えた、教育がありませんのでね。が、お許し下さい。もう余計なことは言わないで、私の知るものは或るものによって知る、と答えますから」と私は言った。

「この同じものによって常に知るのか、それとも或る時はこのものによって、また或る時には別なものによって知るのか」と彼は言った。

「知る時には、常にこのものによってです(1)」と私は言った。

「また余計な口を出す、え、よさないか」と彼は言った。

「が、この〃常に〃がわれわれを何かに躓かせて転ばさないようにと思ってね」と私は言った。

B

「決してわれわれじゃないよ、転ばすなら、君さ。それはそうと、答えたまえ。ね、君は常にこのものによって知るのだね」と彼は言った。

「ええ、常にです、というのは〃時に〃というのを取り除かなくちゃならんのですから」と私は言った。

「しからば、このものによって君は常に知るのだね、しかし常に知る場合、或るものは、よって以て君が知るところのこのものによって、しかし或るものは他のものによって知るのかね、それともすべてをこのものによって知るのかね」

「このものによってです、少なくとも私の知るものは一切」と私は言った。

1　ソクラテスはすでにソフィストが「常に」という言葉によって展開しようとする詭弁を見てとって「識る時には」という制限を与えるのである。「常に」に当るギリシア語の ἀεί は「その時々に」という意味と「始終」という意味とをもっているのである。

ソフィストはすべて(πάντα)をこのものによって識るのかと尋ねている。これに対する次の答においてソクラテスはすべて(πάντα)を一切(ἅπαντα)という言葉で置換えている。しかしソクラテスは何か考えるところがあって、そうしたのだとは思われない。両者は同じ意味で一般に使用されていたのを、そのまま用いたまでであろう。しかしまた両者を区別して用いることもあったのである。その場合 πάντα は「すべてそれぞれを」を意味し、ἅπαντα は 296 C10 に見えるように「すべてを一緒に」を意味する。したがって、ソフィストはこの区別を利用して「すべてを知らない場合に一切を知ることができるだろうか」と尋ねることができたのである。この問によってソフィストはソクラテスが彼の答において限定を加えることによってソフィストの詭弁を警戒する余地を残さない。そしてソフィストはソクラテスの「そういうことはできない」という意味の答を自分に好都合なように、ソクラテスが「すべてを一緒に識っている、したがってまたすべてを識っている」という風に解釈している。

「それ、またあいつだ、同じ余計な口だ」と彼は言った。

「ああ、そう、じゃ、取り除きましょう、その〃少なくとも私の知るものは〃というのを」と私は言った。

C 「いや、何一つだって取り除くには及ばん、何も君にお願いはしないからね。それよりか僕に答えたまえ、すべてを知らない場合に、君は一切を〔すべてを一緒に〕知ることができるだろうか」と彼は言った。

「いや、できないでしょう、それは奇怪なことでしょうからね」と私は言った。

と、彼は「では、もう何でも君の好きなものを付け加えたまえ、何故なら君は一切を〔すべてを一緒に〕知るということを承認するのだから」と言った。

「そのようですね、何分〃私の知るものは〃というのが何の力も持たないで、私はすべてを知るのですからね」と私は言った。

「じゃ、君は〃君が知る時に〃と付け加えようが、また君の好むままにどんなことを付け加えようが、君がよって以て知るところのものによって常に知る〔知っている〕ということをも承認しているわけだ。何故ならば君は常にしかもすべてを一緒に知る〔知っている〕ということを承認したからだ。だから明らかに君は子供の頃にも、D 生まれた時にも、胎に宿った時にも、また君自身が生まれる前にも、また天地が生ずる前にも知っていたのだ、常に君が知っているのならね。そしてゼウスにかけて、僕が望むならば、君自身が常にしかも一切を知ることになろう」と彼は言った。

二三

E

「それでは、エウテュデモス、あなたは神も同じです、願わくはお望みあらんことを！[1] 事実、あなたが本当のことをおっしゃっているのでしたらね。でも、もしこのあなたのご兄弟のディオニュソドロスがあなたと一緒に望まれないなら、あなたの力でそれができる、とはどうしても信じられませんね、が、お望みになれば、多分できるでしょう」と私は言った、さらに「が、私に言って下さい、ご両人――というのは他のことで、あなた方、すなわち知恵にかけては実に奇怪ともいうべき人々と、私はすべてを知らないと言って言い争うすべを知りません、あなた方が実際そうおっしゃるんだから――が、このようなこと、例えば善い人々は不正である、ということを知っているというのは、エウテュデモス、どういう風に主張したらいいのですか。さあ、言って下さい、これを私は知っているのですか、知っていないのですか」と私は言った。

「もちろん知っているさ」と彼は言った。

「何をですか」と私は言った。

297

「善い人々は不正でないということを」

「ええ、そうです、そのことなら、とうから知っています。しかし私が尋ねているのは、それじゃありません、善い人々が不正であるという、このことを何処で私は学んだかというのです」と私は言った。

---

1 ソクラテスは普通には神に呼びかけるときに、その神に付して用いられる πολυτίμητος という神の尊さを称える形容詞をここではエウテュデモスに付して用いている。前章の終りでエウテュデモスが自分が望めば望み通りになると言った傲慢な態度をからかうつもりで、そう言ったものと解される。これに応じて本文の如き意訳を試みてみた。ソクラテスがこのソフィストたちを神々と見なしている例は273Eにも見えている。

「いや、何処でも学ばない」とディオニュソドロスが言った。

「それでは、私はこれを知らないのです」と私は言った。

と、エウテュデモスはディオニュソドロスに向かって、「言論をぶちこわすんだお前は。この男は知らないものだということになり、識者であると同時に無識者であるということになるんだぞ」と言った。

するとディオニュソドロスは赤くなった。

B 「しかし、エウテュデモス、あなたのおっしゃるのはどういうことですか。あなたには、すべてを知っているご兄弟が正しく言っている、とは思われないのですか」と私は言った。

「なに、兄弟？ 僕がエウテュデモスのかね[1]」とディオニュソドロスは急いで私の言葉を遮った。

そこで私は言った。「およしなさい、お願いです、エウテュデモスが、善い人々は不正であるというのを私が知っている、ということを教えて下さるまではね。そして私のためにその学識を出し惜しみしないで下さい」

「おい、ソクラテス、君は逃げるんだ、答えようとはしないんだ」とディオニュソドロスは言った。

「それは当り前ですよ、何故って、私はあなた方のどちらか一人からでも負けるんです、まして二人と来ては C どうして逃げ出さずにおれるもんですか[2]。というのは、ね、私はヘラクレスよりはるかに弱い男でしょう、が、彼は水蛇――それは女ソフィストで[3]、言論の一つの首を人が切り落とすと、知恵によってその一つの首の代りにたくさんな首を生え上らせるのですが――そ奴と、海からやって来てどうやら最近陸(おか)に上ったばかりらしい[4]他のソフィストの蟹とを相手に戦うことはできなかったのです、この蟹がこんな風に左側から話しかけたり[5]、鋏ではさんだりして彼を悩ましたものだから、彼はその甥のイオレオスに助太刀を求めました、そしてその甥はよく彼

D を助けたのです。しかし私のイオレオスが助けに来たら、そのために一層ひどいことになるでしょうよ」と私は言った。

二四

「さあ、その繰言(くりごと)がすんだら、答えたまえ、イオレオスは君のというより、むしろヘラクレスの甥だったのだね、どうだ」とディオニュソドロスは言った。

「これじゃ、ディオニュソドロス、あなたにお答えするのが私には一番いいことです。何故って、あなたは尋ねるのをやめるようなことは決してないんですから――これは、まあ、私にはようくわかっているのですが、あ

1 ディオニュソドロスは弟のエウテュデモスが窮地に陥りそうなのを見てとって、話をそらすために、またも新たに詭弁をたくらむのである。

2 「二人にはヘラクレスさえもかなわない」という言葉は諺になっていた。この諺は古注によれば、「ヘラクレスが水蛇を殺そうとしていた時に、ヘラが彼に向かって蟹を放った。そこでヘラクレスは両者を相手に戦うことはできないので、イオレオスに救いを求めて一緒に戦ってくれるように願った」というのである。ソクラテスはここで水蛇をエウテュデモスに、蟹をディオニュソドロスにたとえている。

3 ここで女ソフィストと言われているのは、水蛇がギリシア語では、女性名詞だからである。

4 これは 271B, 273C からわかるように、この二人のソフィストが最近アテナイにやってきたことを暗示している。

5 271B にはソクラテスの左側にディオニュソドロスが坐っていたと述べられている。

6 おそらくクテシッポスのことを暗示しているのであろう。彼は先にソクラテスを援けて議論に加わったものの、余りに議論に熱心で怒りっぽく、その為に、ソクラテスを援けるどころではなく、かえって事態をほとんど台なしにするところであった。

なたは出し惜しんで、エウテュデモスがあの巧知[1]を私に教えないように邪魔しようと思ってね」と私は言った。

「さあ、答えたまえ」と彼は言った。

「じゃ、答えます、イオレオスはヘラクレスの甥でしたが、しかし私に思われるところでは、どうにもこうにも私のではありません。というのは、私の兄弟パトロクレスは彼には父でなくて、名前の似た、ヘラクレスの兄弟イピクレスがそうでしたから」と私は言った。

E

「が、パトロクレスは君の兄弟かね」と彼は言った。

「ええ、そうです。母が同じ兄弟ではありますが、しかし父が同じ兄弟じゃありません」と私は言った。

「しからば、彼は君には兄弟であり、また兄弟でないわけだ」

「なるほど、先生、父が同じ兄弟じゃありません。というのは、あれの父はカイレデモスでしたが、私のはソプロニスコスでしたから」と私は言った。

298

「しかし、ソプロニスコスとカイレデモスとは父だったか」と彼は言った。

「それはもちろんです。先のは私ので、後のはあれのです」と私は言った。

「じゃ、カイレデモスは、父とは別なものではなかったか」と彼は言った。

「ええ、私のとはね」と私は言った。

「それでは、彼は父とは別なものでありながら、父だったのか。それとも君は石と同じものなのか[2]」

「私はね、あなたから同じものに見えるようにされはせぬか、とびくびくしてはいますが、しかし私には同じものとは思われませんよ」と私は言った。

「それでは、君は石とは別なものじゃないか」と彼は言った。
「ええ、別なものですとも」
「しからば、こうじゃないか。石とは別なものだから、君は石ではないのだろう。また金(きん)とは別なものだから、金ではないのだろう」と彼は言った。
「それはそうです」
「それでは、カイレデモスもまた父とは別なものだから、父ではないだろう(3)」と彼は言った。
「父ではないようですね」と私は言った。
B　と、エウテュデモスが口をさしはさんで「そうだよ、何故というに、もしカイレデモスが事実父であるならば、一方ソプロニスコスにしても父とは別なものだから、父ではないことになり、したがって君は、おおソクラテス、

1　善い人々が不正であるということを意味している。
2　この問はわれわれにはいかにもだしぬけに出されたもののように感じられるが、ディオニュソドロスはこの問によって、ソクラテスに前の問を否定させて「父でない」ということを認めさせようとたくらんでいるのである。「石のようである」というのはギリシア人の間では馬鹿者であるという意味で使用されていたのである。そこでディオニュソドロスはソクラテスもそのことを知っていて、直ちに「石と同じものではない」と答えるものと期待する。しかし、ソクラテスは彼の意図をすでに承知しながらも、そらとぼけて、万能のこのソフィストに無言の石にされはしないかと心配している様子を先ず見せるのである。
3　テクストはT写本の οὐκ ἂν πατὴρ εἴη による。なお、この詭弁を三段論法の形式に改めると以下のようになる。カイレデモスはソプロニスコスではない(大前提)。ソプロニスコスは父である(小前提)。それ故にカイレデモスは父でない(結論)。右の論法においては父は前提において特殊、結論において普遍であるところに誤謬が伏在する。アリストテレス『詭弁論駁論』($166^b37-167^a9$, $179^a26-{}^b6$)参照。

父無児（てて）だということになるからだ」と言った。
するとクテシッポスがそれを受けついで「しかし、あなたたちのお父さんも、やはり同じようなことになりはしませんか。私の父とは別な方ですね」と言った。
「いや、そんなことがあるものか」とエウテュデモスは言った。
「え、同じですか」と彼は言った。
「むろん、同じだ」

C

「いや、そいつは承知できません。が、とにかく、エウテュデモス、その方はただ私だけの父ですか、それともまた他の人々の父でもあるのですか」
「また他の人々のでもある、それとも同一人が父でありながら父でないと君は思うのか」と彼は言った。
「ところが、私はそう思っていたのですよ」とクテシッポスは言った。
「が、どうだ。金でありながら、金でない、あるいは人間でありながら、人間でないと思うのか」と彼は言った。
「おお、エウテュデモス、どうでしょう、あなたは諺にある通り、『木に竹をついでいる』(1)のじゃないでしょうか。というのはもしあなたのお父さんが皆の父なら、あなたのおっしゃることは奇妙なことですからね」とクテシッポスは言った。
「が、そうなんだ」と彼は言った。
「人間の、ですか、それとも、また馬やその他の動物皆の、でもあるのですか」とクテシッポスは言った。

D

「皆の、のだ」と彼は言った。
「またお母さんも皆の母なんですね」
「そうだ、母もだ」
「それじゃ、あなたのお母さんはまた海胆の母なんですね」と彼は言った。
「君の母だって、またそうだ」と彼は言った。
「じゃ、あなたはまた仔牛(2)や仔犬や仔豚の兄弟なんですね」
「そうだ、そして君もだ」と彼は言った。
「それじゃ、あなたにはおまけに犬(3)までが父なんですね」と彼は言った。
「そうだ、そして君にもだ」と彼は言った。
「が、直ぐにも君は、クテシッポス、もし僕に答えるなら、それを承認するだろう。というのは、僕に答えた

1　直訳は「亜麻に亜麻を結びつけない」である。この諺は古注に「亜麻に亜麻を結びつけるというのは、同一のものを同一のものによって言ったり、為したり、あるいは似たものを互いに結び合わせて親しくさせたりする者について用いられる。例えば、アリストテレスは『自然学講義』においてこの諺を挙げている。すなわち、亜麻に亜麻を結びつけることではないと言っている。またストラティスは『ポタモイ』において、プラトンは『エウテュデモス』において挙げている。」と説明されている。ともかく、この諺は互いに相容れないものを結びつける場合に用いられる。ここではエウテュデモスが自分の主張、すなわち自分の父が他の人々の父でもあるということを、クテシッポスに認めさせるために持ち出した例が、それと結びつき得ない、つまり不適当であると言っているのである。

2　B写本の βοιδίων による。

3　B、T、W写本の καὶ πρὸς による。

E

まえ、君は犬を持っているか」とディオニュソドロスは言った。
「ええ、非常にすごい奴を」とクテシッポスは言った。
「じゃ、そ奴には仔どもがあるか」
「ええ、そうです、やっぱり同じような奴らが」と彼は言った。
「しからば、その犬はそ奴らの父ではないか」
「私は、ね、そ奴が牝犬とつるむのを見たのですよ」と彼は言った。
「じゃ、どうだ。その犬は君の、ではないか」
「ええ、そうです」と彼は言った。
「しからば、父でありながら君の、である、したがってその犬は君の父となり、また君は仔犬らの兄弟となるのじゃないか(1)」

二五

そして、再びディオニュソドロスはクテシッポスが何かを先に言い出さないように、大急ぎで語をついで、「なお、も一つ、ちょっとしたことを僕に答えてくれたまえ、君はその犬を打つか」と言った。
と、クテシッポスは笑って、「ええ、神々にかけて、打ちますよ、あなたを打つことができないのですから」と言った。
「じゃ、君は自分のお父さんを打つのじゃないか」と彼は言った。

「だけれど、あなたたちのお父さんを打った方が、はるかに正しいことになるでしょう、いったい、どんなつもりか、こんなに賢い息子さんたちをお産みになったんだから。しかし、ねえ、エウテュデモス、あなたたちや仔犬たちのお父さんは、あなたたちのその知恵からきっと善いことを沢山お楽しみのことでしょうね」と彼は言った。

「しかし、クテシッポス、善いことをたくさんあの人も君も必要とはしないのだ」

「あなた自身もまた、エウテュデモス、必要としないのですか」

「また他の人間だって誰一人必要としないのだ。何故ならば、クテシッポス、僕に言ってみたまえ、病気のさいには、必要な時に薬を飲むことは善いことだと思うか、それとも君には善くないことだと思われるか、どちらだ。あるいは戦争に行く時に、武器を持って行く方が、素手で行くより善いことだと思われるかどうか」

B

「善いことだと思われます。けれども、あなたは何かうまいことをおっしゃるだろうと思います」と彼は言った。

---

1 これは compositionis(結合の)と言われる誤謬である。すなわち、別々に離して取らるべきものが一緒に取られたことに基づく誤謬である。ただし、アリストテレス『詭弁論駁論』($179^{a}36$)には『エウテュデモス』のこの箇所は「付帯性の誤謬(fallacia accidentis)」の例として挙げられている。

2 この善いこととは何を指すか。ハインドルフの言うように、ソフィストの父がまた犬の父ともなり、打たれるに値するものになったことを指すか、あるいは、トゥリオイから追放せられて多年アッティカに暮しながらもなお産をなさずといったその状態――したがってその父にとっても面白くない状態を指すかであろう。いずれにしても、彼らの知恵を揶揄する皮肉な言葉である。

「そいつは、君が一番よく知ることになろう。とにかく答えてみたまえ。ところで、君は必要な時に薬を飲むのは、人には善いことだということを承認したんだから、この善いものを及ぶかぎりたくさん飲まなくてはならん、そしてその場合に、誰かが彼のために車一台のエレボロス草を粉にして煎じ出してくれるならば、それは立派なことだろう。そうに違いあるまい(1)」と彼は言った。

C と、クテシッポスは「ええ、エウテュデモス、全く以て大いにそうです、もしその飲む人がデルポイの彫像(2)ほどのものでしたらね」と言った。

「じゃ、また戦争において武器を持って行くことは善いことなんだから、できるだけたくさん槍や楯を持たなければならんのじゃないか、それは善いことなんだから」と彼は言った。

「ええ、全くそうですよ、しかし、エウテュデモス、あなたはそうでなくて、一帖(じょう)の楯、一本の槍で充分だとお考えになるのでしょう」

「そうだ」

「ね、あなたはまたゲリュオネス(3)やブリアレオス(4)にもそういう風に武装させるんでしょうね、しかし僕はあなたもこのお仲間も剣客(5)のことだから、もっと腕利きの方だと思っていましたよ(6)」

するとエウテュデモスは黙り込んだ。しかしディオニュソドロスは、先にクテシッポスによって答えられていたものに関して尋ねて言った。「では、また君には金をもつことも善いことだと思われるのじゃないか」

D 「そうです、しかもそれはたくさんもつことがね」とクテシッポスは言った。

「しからば、どうだ。善いものは常にあらゆる処でもたなければならぬ、と君には思われないか」

「ええ、もちろん」と彼は言った。

「じゃ、金もまた善いものである、ということに同意しはしないか」

「それは、もう同意したことですよ」と彼は言った。

「じゃ、それを常にあらゆる処で、そしてできるだけたくさん自分自身のうちにもたなければならぬのじゃないか。E そしてもし金の三タラントンを腹のうちに、一タラントンを頭蓋のうちに、また金の一スタテールを両眼のうちに持つならば、その人はこの上もなく幸福だろうな」

---

1 以上の帰結が出てくるためには、クテシッポスが薬を飲むことは善いことだということの外に、善いものはできるだけ多く必要とするということを承認していなくてはならぬ。しかし、彼はそのような承認までも与えてはいない。そのような詭弁を問題にするのは、馬鹿馬鹿しいくらいなので、むしろ彼はソフィストの意表に出でて、以下の返答をすることになるのである。

2 パウサニアス(第一〇巻)はデルポイにおけるほとんど数え切れないほどの彫刻の目録を与えているが、並はずれて大きな型のもののことは一つも誌していない。恐らくそれは「ペルシア王と戦ったギリシア人たちがアルテミシオンとサラミスの戦の後で、オリュンピアにゼウスの銅像を、デルポイにアポロンの銅像を建てた」と言われている、そのアポロン自身の像のことであろう(ギッフォードによる)。

3 ゲリュオネスの身体は三人の男が一緒になったような恰好で、腹の下のところでくっついて脇腹と脚のところから三つに分れていた、という。

4 ブリアレオスはその体格力量が卓絶し、百の手と五十の頭を持っていたという。なお、プラトンの『法律』VII. 795Cには、左手も右手の如く利くように教育されなければならぬことを説いているところと関連して、「そしてもし人がゲリュオネスやブリアレオスの性質を持って生まれて来たならば、百の手で以て百の投槍を投げることができなくてはならぬ」と述べられている。

5 271C～D参照。

6 注4において見た如くに、プラトンは両手が同じように利くように教育されねばならぬという意見を持っていたことを考え合せてみると、ここでクテシッポスはただ一本の槍で充分だと考え、多分また一本しか使えない片手利きのソフィストたちをからかっているものとも思われる。

「ええ、そうでしょうよ、エウテュデモス、少なくともスキュタイ人たちのうちでは、あなたが今さき犬が父であるとおっしゃったようなやり口でいくと、自分自身の頭蓋のうちに金をたくさんもっている男が一番幸福で一番立派な人だということですからね、そしてなおもっと不思議極まることには、また金鍍金されている自分自身の頭蓋から酒を飲む、しかも自分の頭を両手に抱いてその内側を見るということですからね」とクテシッポスは言った。

「しかしまたスキュタイ人たちにせよ、その他の人々にせよ、彼らが見るのは見ることのできるものか、それともできないものか」とエウテュデモスは言った。

「それは、もちろんできるものです」

「君もまた、そうじゃないか」と彼は言った。

「ええ、僕もです」

「しからば、君は僕らの着物を見るか」

「ええ」

「しからば、それらは見ることのできるものだ」

「できるどころじゃありません」とクテシッポスは言った。

「が、何を見るのだ」と彼は言った。

「無をでしょう。しかしあなたは、多分それらが見るとはお考えにならないのでしょう。それほどあなたは甘いのです。とにかく、エウテュデモス、僕にはあなたは目をつむらないで、寝入っていられるように思われます、

またもしものを言いながら、何も言わないことができるものなら、あなたもそれをやっていられるように思われます」

二六

B

「え、どうだ、沈黙するものとして言うことは、いったい、できないのかね(5)」とディオニュソドロスは言った。

「どうしてできるもんですか、そんなことが」とクテシッポスは言った。

1　ヘロドトス『歴史』第六巻(六五)参照。

2　先のディオニュソドロスの論法は「父でありながら君の、である、したがって犬は君の父であることになる」(298E)というのであったが、ここでクテシッポスは、自分のである頭蓋骨(すなわち自分の所有している)を、彼の論法を真似、自分自身の頭蓋骨と改めて彼に一矢を報いたわけである。

3　「見ることのできる」という表現は二つの意味をもっている、すなわち(一)人が見ることのできるもの(見られるもの)、(二)自分で見ることのできるもの(見るもの)。したがってそれはアリストテレスのいう「文意の不明確(fallacia ambiguitatis)」に基づく詭弁である。『詭弁論駁論』(166ª6–14)参照。

4　この答も、前問のクテシッポスの答と同様、ソフィストの意表に出でた巧みな答である。

5　この詭弁はσιγῶντα λέγειν というギリシア語の語句が、「沈黙するもの、あるいは、ものを言わないものが言う」という意味と「沈黙するもののことを言う」という意味を有し得ることに基づいている。日本文で同時にこの両義をうまく表現し得る文句がないので、本文の如き訳を当ててみた。この詭弁は300A注3のアリストテレスの箇所にこのままの語句で「文意不明確の詭弁」の例として挙げられている。なお、同書(177ª12)においてはこの詭弁の文意不明確は結論にあることが語られている。ソフィストはクテシッポスを反駁するために、「鉄具(のこと)は言うことができる。鉄具は沈黙するものである。したがって沈黙するもの(のこと)は言うことが出来る」という風に推論しようとしたのである。この詭弁を早くも見てとったクテシッポスは、小前提を否定して、鉄具は沈黙するものではないということを答えるのである。

「また、言うものとして沈黙することはできないのかね」
「それは、なおさらのことです」と彼は言った。
「ところで、君は石や木や鉄具のことを言うときに、沈黙するものとして言いはしないか」
「いや、もし僕が鍛冶屋の店の中を通るならね、決してそうじゃないんですよ、もし人が手を触れようものなら、鉄具は非常に大きな音をたてたり大声に叫んだりする、と言われています。したがって、あなたはこの点についてはそれと気付かずに知恵によってつまらぬことをおっしゃったのです。しかしあなたたちは僕にもう一つの方、すなわち逆に、どうして言うものとして沈黙することができるのか、それを教えて下さい」と彼は言った。

C

そして私にはクテシッポスはその稚児さんに気に入ろうと思ってたいへん気を使っているように思われた。
「君が沈黙する時、すべて沈黙するのではないか(1)」とエウテュデモスは言った。
「ええ、そうです」と彼は言った。
「しからば、言うものも沈黙するのではないか、言うものがすべてに属している以上は」
「が、どうです。すべては沈黙するのではありませんか」とクテシッポスは言った。
「いや、決してそんなことはない」とエウテュデモスは言った。
「だと、これは先生、むしろすべては言うのですか」
「うん、たしかにそうだ、少なくとも言うものはね(2)」
「いや、僕の尋ねているのはそのことじゃありません、すべてが沈黙するか、それとも言うかということです」

と彼は言った。

D　と、ディオニュソドロスはよく言わせもせず、「孰れでもなく、孰れでもある。というのは君がこの答えをどう始末していいかわからんことは、たしかだから」と言った。

するとクテシッポスは例の如く、ふき出しながら大笑いをして言った。「おお、エウテュデモス、あなたのご兄弟はその言論を二股にされました。[3] だから殺られて負かされたのです」

と、クレイニアスは非常に喜んで笑った。そのためにクテシッポスは〔得意になって〕一〇倍以上も大きくなった。そしてあの男は、あのクテシッポスは、悪戯者だから、思うに、てっきりあの人々から盗み聴きして、ほかならぬそのことを知っていたのだ。というのは、今日このような知恵を持っている人は、ほかにいないのだからね。

二七

E　そこで私は言った。「なんで笑っているんだ、おいクレイニアス、これほど真面目で美しいものを」

1　ここの詭弁もまた λέγοντα σιγᾶν が「言うものが沈黙する」と「言うものについて沈黙する」の両義を有し得るところに成り立つものと思われるが、ここに到ってソフィストの詭弁もようやく種切れの感がある。厳密に訳すれば、「すべてのものについて君は沈黙するのではないか」となるのであるが、以下詭弁の味を出すために、曖昧な訳し方をした。

2　エウテュデモスは、295Bや296Aなどにおいてソクラテスが彼の問に制限を加えて答えると、これを非難したのに、自分がクテシッポスに問いつめられると、図々しくも自分が禁じたことを自ら犯すのである。

3　297Aからわかるように、同一の言論は肯定と否定とを同時に含むことは許されないのである。

「ところで、ソクラテス、君はすでにいつか美しいものを何か見たことがあるのか」とディオニュソドロスは言った。

「ええ、ありますよ、しかもたくさんね、ディオニュソドロス」と私は言った。

301

「それは美とは別なものだったか、それとも美と同じものだったか(1)」と彼は言った。

と、私は答に窮して全く途方に暮れた、そしてこんなことになったのも、モグモグ呟いたのだから、それは当り前のことだと考えた、が、それにもかかわらず私は「少なくとも美そのものとは別です、けれどもそれらのそれぞれのもとには或る美があります」と言った。

「それでは、もし君のもとに牛があるならば、君は牛なんだな、そして今僕は君のもとにあるから、君はディオニュソドロスなんだな(2)」と彼は言った。

「縁起でもない、そんなこと、よして下さい」と私は言った。

「しかし、どんな仕方で別なものが別なもののもとにあるならば、別なものは別なものであるのだろうか(3)」と彼は言った。

B

「そんなものに、あなたは困っているのですか」と私は言った。すでに私は両人の知恵を真似ようと手掛けていたのだ、それが欲しかったものだからね。

「困らないでどうする、僕にしろ、その他のすべての人間にしろ、有らぬものについてはな(4)」と彼は言った。

「と、おっしゃると、ディオニュソドロス、それは何のことですか。美しいものは美しいものであり、醜いものは醜いものであるのじゃありませんか」と私は言った。

「この僕にそう思われればね」と彼は言った。
「じゃ、そう思われはしませんか」
「むろんだよ」と彼は言った。
「ではまた、同じものは同じものであり、別なものは別なものであるのではありませんか。たしかに、別なものは決して同じものではありますまいからね、いや、私はね、子供でさえもこんなことには、その、別なものが別なものであるということには、困らぬだろうと思っていましたよ。しかし、ディオニュソドロス、あなたはそれをわざと見過ごされたのです、何故って、あなた方は私には他のことでは、ちょうどそれぞれのことを仕遂げるのがふさわしい職人たちのようで、あなた方も問答を極めて立派に仕遂げなさるように思われますから」
C

1　この問はソフィストたちの今までの問に比べると、何か毛色の変ったものを感じさせる。それはすでに美そのものと美しいものとの区別を予想している。

2　この詭弁は「もとに……ある」という言葉が、美の場合と、牛の場合とでは、それぞれ異なった意味で使用されるのに、それを同じように解したところに成立するのである。すなわち、アリストテレスにおける「語の曖昧による詭弁(fallacia aequivocationis)」である。

3　この問の意味はディオニュソドロスにおいては、どんな仕方で甲がそれとは別な或るもの(乙)のもとにあるならば、甲は乙であるのだろうかというのである。しかるに、ソクラテスは彼自ら直ぐ後で言っているように、ソフィストの知恵を真似て、すなわち別なもの(ἕτερον)というギリシア語の多義性を利用して、彼の問の意味をまるで気付かぬもののように、美しいものが美しいものであり、醜いものが醜いものであるように、別なものは別なものであって、そんなことは問題にするに足りない、子供でさえも判ることである、偉い筈のあなたがそれ位のことに困っているのは、どうも変だ、とからかっているのである。

4　この有らぬものは甲は乙であらぬものという場合のあらぬものを言っているのであろう。この語は先の「別なもの」、すなわち「であらぬもの」との関連において語られたと思われる。しかしソクラテスはそれを気付かぬものの如く次の問を発しているものと思われる。

D

「それじゃ、君は職人のそれぞれに何がふさわしいか知っているか。まず金打するのにふさわしいのは誰か、知っているか(1)」と彼は言った。
「ええ、知っています、それは鍛冶屋です」
「これはどうだ、陶物を作ることは」
「陶物作りです」
「これはどうだ、屠殺して皮を剝ぎ、切り刻んでその細かな肉を煮たり焼いたりすることは」
「料理人です」と私は言った。
「じゃ、もし誰かがふさわしいことを為すならば、その行ないは正しいのではなかろうか」と彼は言った。
「ええ、そうですとも」
「しかるに、君の主張するところによると、料理人は切り刻んだり皮を剝いだりするのがふさわしいんだ。君はそれを承認したか、しなかったか」
「承認しました。しかし、どうか勘弁して下さい」と私は言った。
「しからば、もし誰かが料理人を屠殺し切り刻んで煮たり焼いたりするならば、明らかにふさわしいことを為しているのであろう。また、もし誰かが鍛冶屋自身を金打し、また陶物作りを陶物にするならば、この人もふさわしいことを為しているのであろう」と彼は言った。

E

「ポセイドンに誓って、すでにあなたはあなたの知恵に最後の仕上げをなさっています。いつかそれが私の手に入って私のものとなるでしょうか」と私は言った。

「ソクラテス、君はそれを、もし君のものとなったら、君のものだと認めることができるだろうか」と彼は言った。

「少なくともあなたがお望みなさるなら、認めるのは明らかです」と私は言った。

「が、どうだ、君は自分自身のものを、知っていると思うか」と彼は言った。

「ええ、そうです、もしあなたが何かほかのことをおっしゃっているのでないなら、ね。こういうのも、あなたとこのエウテュデモスよりほかに、私の頼りとするものは天にも地にもないからです(2)」

302

「では、君は君が支配して、そして君の好むままに使用することのできるものなら、それらを君のものと考え

---

1 以下の詭弁は、「金打(かじ)するのにふさわしいのは誰か」の誰かに相当するギリシア語が、τίνι(誰に)でもよければ――τίνα(誰を)でもよいこちらの方が普通用いられるが、――ところに成立する。すなわちその文章が「金打をすることは誰にふさわしいか」という意味にも、「誰を金打するのがふさわしいか」の意味にもとれるところに成立するのである。この詭弁は「文意の不明確(fallacia ambiguitatis)」に属すると見ることができよう。アリストテレス『詭弁論駁論』(166a6 sqq.)参照。

2 この箇所の原文の直訳は「というのは、あなたから始まってこのエウテュデモスに終らなければならぬのですから」となる。そして諸家の注によると、これは神に呼びかけようとする時に用いられる祈の形式を模倣したものであるということである。シュタルバウムは次のような意訳をこれに与えている。「というのは、あなたは万人に匹敵するお方です、あなたから始められなければなりません、そしてあなたの兄弟において終らなければなりません、他のすべての人々を失っても、あなた方二人の御同意をうれば、それで満足しなくてはなりません」。本訳も大体この意味にとってなされたものである。

るか。例えば牛や羊だ、君が売ったり与(や)ったり、また神々のうち君の好むお方に生贄にしたりすることができれば、それらは君のものだが、しかしそうできなければ、君のものではないと考えるだろうか」と彼は言った。

そこで私は——というのは、彼らの問いから何か立派なものがぴょっこり頭をもたげるだろうということをもう知っていたし、また同時にできるだけ早く聞きたいと思ったので、——「ええ、そうです、その通りです、そういうようなものだけが私のです」と私は言った。

「が、どうだ。君は魂を持っているものなら、それらを生物と呼びはしないか」と彼は言った。

「そう」と私は言った。

B

「ところで、生物のうち、君のものであるのは、君がそれらについて僕の今言ったすべてのことを為し得る力を有しているものだけである、ということに同意するか」

「ええ、同意します」

すると、彼は何か重大なことを考察しているかのように、非常に様子ぶって口をつぐんでいた後で、言った。

「僕に言ってくれたまえ、ソクラテス、君は祖先神ゼウス(1)をもっているか」

と、私はこの言論は先に落ちとなったところで落ちとなるだろうという疑いをもったので、逃げようと思って、ちょうど網に捕われているかのように、何にもならぬことながら、すぐに身をあちらこちらにねじむけ始めたのだ。そして言った。「ディオニュソドロス、私はもちません」

C

「だと、君というものは非常に惨(みじ)めな人間で、またアテナイ人でもないのだ、君が祖先神もお社(やしろ)も、またその他善美な人のもつべきものをもたないのだとすれば」

「いや、とんでもない、ディオニュソドロス、言葉を慎んで下さい、そしてそんなに手厳しく私を教えないで下さい。というのは、私だって祭壇も家の神や祖先神のお社も、またその他このようなものは他のアテナイ人たちがもっているだけのものはもっているのですから」と私は言った。

「それじゃ、何だね、他のアテナイ人たちも祖先神としてゼウスをもっていないのだね」と彼は言った。

「ええ、その呼び名のゼウスはイオニア族の誰でも――この国から移住していった者も、われわれももってい D ません、むしろわれわれがもっているのは、イオン(2)の血統なので、祖先神アポロンです、しかしゼウスはわれわれのところで祖先神とは呼ばれないで、家の守神、あるいは氏神と呼ばれ、またアテナイア(3)が氏の女神と呼ばれています」と私は言った。

「いや、それで結構。というのは君はアポロンやゼウスやアテナをもっているようだからね」と彼は言った。

「ええ、全く」と私は言った。

「ではまた、これらの方々は君の神ではないだろうか」と彼は言った。

「祖先で、また主人です」と私は言った。

「いや、それはともかく、君の、だね、それとも君はそれらが君の、であるということに同意していなかった

---

1 ゼウスは、後のソクラテスの言葉からもわかるように、イオニア族にとってではなく、ドリス族にとって祖先神であった。

2 イオンはアポロンとアテナイ王エレウテウスの娘クレウサの間にできた子で、アテナイを建設したと言っている伝えもある。エウリピデス『イオン』参照。

3 アテナの古形で、荘重な表現の場合に使用されたようである。

か」と彼は言った。

「同意しています、だって他に何ができましょう」と私は言った。

E

「では、これらの神々はまた生物でもあるのじゃないか。というのは、およそ魂をもっているものは生物であるということに君は同意しているのだから。それとも、これらの神々は魂をもっていないか」と彼は言った。

「もっていられます」と私は言った。

「ではまた、生物ではないか」

「ええ、生物です」と私は言った。

「しかるに、生物は、そのうちで、君が与ったり、売ったり、それからまた君の好む神にはどの方にも捧げたりすることのできるものなら、それらは君のものであるということに君は同意している」と彼は言った。

「同意しています。こう言うのも、エウテュデモス、私にはそれを引っこめることができないからです」と私は言った。

303

「では、さあ、直ぐに僕に言いたまえ、君はゼウスやその他の神々が君の、であるということに同意するのだから、その他の生物のように、君には、かの神々を売ったり、与ったり、あるいはその他君の好むままに使用したりすることができるのだね(1)」と彼は言った。

ところでクリトン、私はあたかもその言論によって打ちのめされたかのように、声も立てずに倒れていたのだよ。

と、クテシッポスは私を助けるために前進して言った。「ほほう、ヘラクレス、これはこれは、何と、まあ、立

派な言論だろう」と彼は言った。

するとディオニュソドロスは言った。「では、ヘラクレスがほほうなのか、それともほほうがヘラクレスなのか[2]」

と、クテシッポスは「おお、ポセイドン、これは何と畏るべき言論だろう。退却だ、このご両人には敵わない」と言った。

二九

B するとここで、なんと、クリトン、そこに居合わせたものは誰でも彼でもその言論と両人とを法外に賞めたのだよ、そして笑い、手を拍ち、喜んでもう延びんばかりになったのだ。というのは、今までのものには、どれにもこれにも見事な喝采を送っていたのは、ただエウテュデモスの愛好者連だけだったが、ここではほとんどリュケイオンの柱でさえも両人に対して喝采し喜んだのだからね。だから私は、自分の方でもまだこんなに知恵の C ある人間は一人も見たことがないということを、承認するようなそんな気持にされた、そして彼らの知恵に全く

---

1 この詭弁は「もつ」という言葉の意味の曖昧に基づく。

2 先にクテシッポスが「ほほう、ヘラクレス！」と言った時には、この二つの語は何れも驚嘆の気持を表わした感嘆詞で、その場合にヘラクレスは Ἡράκλεις と発音されたのである、ところがディオニュソドロスはこの二つのならべて言われた感嘆詞を名詞に変化し Ἡράκλεις も Ἡρακλῆς と改めて、両者のそれぞれをあるいは主語とし、あるいは客語としてここに詭弁を成立させたのである。これはアリストテレスにおいて「発音に基づく詭弁(fallacia accentus)」と言われるもの(『詭弁論駁論』(165b27))に属するであろう。

屈服させられて、彼らを賞め称える方へ気が変わったのだ。そこで私は言った。「何と、まあ、幸福な！　あなた方ご両人は、驚嘆すべき天性をお持ちになって。これほどのものをこんなに速く、僅かな時日で仕上げなさって。ところで、エウテュデモスにディオニュソドロス、あなた方の言論は他にもいろいろと立派なものを持ってはいますが、しかし中でも、こいつは、すなわち多くの人々を、それぱかりか、偉い一かどのものと思われている人

D　人をあなた方が少しも問題にせず、ただあなた方に同じような人々だけを問題にされているということは、実にすばらしいことです。というのは、ごく少数のあなた方に同じような人々なら、これらの言論を愛するでしょうが、しかしその他の人々はそれらについては何ぶん無知で、自分がそのような言論によって反駁されるよりも他の人々を反駁することを、きっと一層恥ずかしく思うといったくらいな考えしかもっていないのは、たしかなところですから。それに、それらの言論においてまたこいつも、も一つの非常に大衆向きで親しみ易いものです。あなた方が何ものも美しくもなく、善くもなく、白くもなく、またその他こういうものの何でもなく、一般的

E　に言って、他のものどもとは別なものではないと主張なさるとき、これはあなた方もおっしゃっているんだが、てもなく実際人々の口を封じなさる。が、他の人々の口だけではない、またあなた方は自分で自分の口をも封じるように見えるでしょう、こいつは非常に愛嬌があって、それらの言論から嫌なところを取り除いてくれます。だが、一番重要なことは、それらが人間なら誰でもごく僅かな時間で学ぶことができるような工合にあなた方にはなっていて、しかも術によって発見されたものであるということです。実際、この私はクテシッポスに注意を

304　払って、どんなに速やかに造作なくあなた方を真似ることができたかを認めました。だから、あなた方の仕事のうちでこの部分は、人に速やかに伝えるということでは立派なものですが、しかし人々の前で問答することには

適していません。むしろ、私の言うことを聞かれるなら、多くの人々の前では語らないように用心なさい、速やかに習い覚えて、あなた方に感謝しないことのありませんようにね。が、何はさておいて、ただ自分たち同士の間で問答なさるがよい。しかしそうではなく、誰か他の人の前でなさるのなら、ただあなた方にお銀(かね)を支払う者の前だけでなさい。そしてこの同じことを、もしあなた方がお利口な方でしたら、学生さんたちにもご忠告なさい、決して他の人とではなく、ただあなた方や自分たち同士で問答をするようにとね。というのは、エウテュデモス、珍しいものは高価だが、水は、ピンダロスが言ったように(3)、非常に貴重なものだけれど、極く廉(やす)いのですから。しかし、さあ、どうか、私もこのクレイニアスもあなたの弟子に入れて下さい」と私は言った。

B

三〇

クリトン、以上のことやその他なお二、三ちょっとしたことを問答してわれわれは立ち去ったのだ。そこで、君、どうだ、あの両人のもとに一緒に通わないか。あの両人は、銀を支払う気のある者には教えてやってもよいと言い、またどんな素質も年齢も妨げにならない、誰だって自分らの知恵をたやすく受け取れると言っているのだから――そして君にも特に聞く値打のあることは、両人が自分たちは金儲けの邪魔を少しもしないと言ってい

C

1　272B参照。
2　B写本に従い、τὸ σοφὸν を削って読む。
3　ピンダロスは前五二二年もしくは五一八年頃に生まれ、前四四二年もしくは四三八年頃に没したギリシアの詩人。「水は非常に貴重なものである」だけが、彼のオリュンピア頌歌一の一に出ている。

ることだ。

クリトン　そうだねえ、ソクラテス、私だって聞くのは好きだ、そして、ひとつ勉強してみたい、けれど私もエウテュデモスに同じような者たちの一人ではなくて、ちょうど、君が現にさっき言った人々、すなわちこのような言論によって反駁するよりも反駁されることを好むような人々の一人であるらしい。ところで、君に忠告するのは滑稽なことだと私には思われるが、しかしやっぱり、ただ今耳にしたことだけは君にお伝えしたい。ね、いいかね、君たちのもとから立ち去った人々の一人が、それは自分を非常に賢い者だと思っている男で、法廷に必要な言論にかけては恐るべき人々の一人だが(1)、私のぶらついているところにやってきて、「クリトン、あなたは、この知者たちの話を少しもお聞きにはならぬのですか」と言った。

D

「ええ、聞きません、ゼウスに誓って。というのは、近寄ってみたのですが、人だかりのためによく聞くことができなかったものですから」と私は言った。

「でもね、それはほんとに聞く値打がありましたよ」と彼は言った。

「が、どうしてです」と私は言った。

「ええ、そしたら、このような言論にかけては当代随一の知者たちが問答するのを聞けたでしょうよ」

E

そこで私は「すると、あの人々はあなたにはどう見えたのですか」と言った。

「ほかじゃありません、それは人が、馬鹿なことをしゃべって無益なことについて無益な努力をしているこのような人々から、いつも聞くようなものですよ」——まあ、こういう風にこの辞(ことば)通りに実際彼は言ったのだよ。

そこで私は「けれどね、愛知というものは非常に高尚な仕事ですよ」と言った。

305

「なあに、立派ですって！　これはお目出度い、いやいや、そいつはたしかに無益なものですよ。そして今、あなたが居合せたら、かえってあなたは自分の仲間のために非常に恥ずかしい思いをなさったことだろうと思います。自分たちの言っているのは何のことか、少しも頓着せず、どの言葉にでも、からんでいく男たちにその身を任せようと望んだほど、それほどあの人は頓馬だったのですからね。そしてこれらの男は、先に私が申した通り、当代の最も優れた人々に属するのです。しかし実はね、クリトン、この仕事そのものも、またこの仕事に携

B

わっている人々も下らぬ笑うべき人々ですよ」と彼は言った。が、ソクラテス、私にはこの人も、それから誰か他に非難する人があれば、その人も、この仕事を正当には非難していないと思われた。けれども、多くの人々の前でかような者たちと問答しようと思うことについては、正当にけなしているように私には思われたよ。

三一

ソクラテス　クリトン、そのような連中[2]は奇態な人々だ。しかし、私は何と言ったものか、まだわからない。君に近づいてきて愛知をけなした人はどちらに属する人だったか。法廷で対論するのに手強い人々にか、すなわ

1　アテナイの法では、訴訟の関係者たちは法廷において自分で自分を弁護することになっていた(『ソクラテスの弁明』参照、なお、本篇272A参照)。そしてそこで述べられる弁論を作ったり、訴訟上のいろいろの注意を与えたりすることを職業とする人々があった。アンティポン、イソクラテス、アイスキネスなどがそういう人々として挙げられている。この箇所で言われている人物は特定の者であろうが、それが誰であるか、はっきりとは定め難い。

2　クリトンが前章の終りで述べたような人々のこと。

ち弁論家(1)だったか、それともこういう人々を法廷に遣(おく)る人々にか、すなわち弁論家たちが対論するのに用いる言論の作り手(2)だったか。

C　**クリトン**　いや、ゼウスに誓って、決して弁論家ではないよ、また彼はいまだかつて法廷に出たことはないように思う。しかし彼は、ゼウスに誓って言うが、その仕事に明るくて手強い人であり、手強い言論を作り上げるという話だ。

ソクラテス　ああ、それで、もうわかった。それらの人々については自分でも今さっき話そうと思ったところだった。つまり、これらの人々は、クリトン、プロディコス(3)が愛知家と政治家との中間領域と言った人々で、自分はすべての人間のうちで一番知者である、いや、あるばかりではない、また非常に多数の人々にそう思われて

D　いる、したがってすべての人々のもとで名声を挙げる上に自分たちの邪魔になるのは愛知に係わりのある奴らよりほかには誰もいないと思っているのだ。だから彼らはこれらの人々を無益なものだという評判に陥れたら、やがて知恵があるという評判をとってすべての人々から勝利の賞品を得ることは疑いないと考えるのだ。何故かというと、ほんとうは自分らが一番知者なのだが、個人的な問答中に横槍を入れられると、エウテュデモス一派のものからやっつけられると考えるからなのだ(4)。しかし彼らは非常な知者だと思っている——それは当然なことだ

E　が。というのは一方において愛知を適度にやり(5)、傍ら政治も適度にやっている、それも非常に当然な割合で——というのは、必要なだけ両者に与り、そして危険や争いの外に立って知恵の実を穫(と)り入れていると思っているからだ。

クリトン　すると、どうだね。彼らの言うことには、ソクラテス、一理屈あると君には思われるかね。という

のは、いや、実際あの人たちの説には何かもっともらしさがあるからね。

306

ソクラテス　ええ、そうだ、クリトン、実際もっともらしさがあるよ、本当よりはね。というのは、彼らを説いて、人間にしても、またその他或る二つのものの中間にあって両方のものに与っているすべてのものにしても、悪いものと善いものとからできているものは、一方よりは善くなるが、他方よりは悪くなる、しかし二つの善いもの、といっても同じ点で善いものではないが、それらからできているものは、それを合成しているその二つの善いものがそれぞれ有用である点を中心にしてみてみると、その両方より悪くなる、しかし二つの悪いもの、といっても同じ点でそうなのではないが、それらから合成されてその中間にあるものだけが、それの与っている、かの二つのもののそれぞれよりも善いものである、ということを信じさせるのは容易なことではないのだからね。

B

そこで、もし愛知と政治的行動とが善いものであるが、しかしそれぞれ別な点でそうであり、そしてこれらの人人がこれら両者に与ってその中間にいるのだったら、彼らは無意味なことを言っているのだ、——というのは、彼らは両方の人々よりもつまらぬものだから——しかし、もし善いものと悪いものとであるなら、一方の人々よりは善く、他方の人々よりは悪いものである、しかし両方とも悪いものであるなら、この場合には、彼らは何か

1　ここで弁論家と言われているのは、法廷で弁論するのに手強い原告、被告を指す。
2　304D注1参照。
3　プロディコスに就いては、277E注4を見よ。
4　弁論家が個人的な対話の下手なことは『テアイテトス』177Bにも語られている。
5　『ゴルギアス』484Cにおいて、ソフィストのカリクレスは、愛知は若い頃に適度にやるのならば、確かに立派なものであると語っている。

C
本当のことを言っているのだろうが、その他の場合には決してそうではない。ところで、私は彼らがその両方とも悪いということにも、一方が悪くて他方が善いということにも同意はすまいと思う。いや、実は、これらの人人は両者に与って、そして政治的行動と愛知とがそれぞれ語るに価する点を中心にして見てみると、両者より劣っている、そしてほんとうは第三番目のものであるにもかかわらず、第一番目であると思われることを求めているのだ。ところで、彼らにその望みは許してやって、手厳しくあってはならないが、しかし彼らの人物はそのあるがままに考えねばならない。というのは、何であれ思慮に係わりのある事柄を語り、そして男らしくそれにぶつかっていって骨折りを惜しまぬ者には、どの男にでも満足しなければならぬのだからね。
D

三二

クリトン　ところでね、ソクラテス、私は自分でも息子たちについては、いつも君に言うように、彼らをどうしたものかと思い惑っている。なるほど一人の奴はまだ若くて小さいが、しかしクリトブロス(1)はもう年頃で、誰か彼の為になる人を必要とする。ところで、私は君と一緒になる時には、いつもこういう気持になる。すなわち、子供たちの為に他の多くのことではこのような、例えば結婚のことでは、できるだけその子が素性のいい母親から生まれるようにとか、また金銭のことでは、できるだけ金持になるようにとか、というような心配をするが、しかし教育のことでは彼らを気遣わないというのは、狂気の沙汰と私には思われるような気持になる。しかし、人間を教育してやろうと称している人たちの或るものの方に目をやると、私は魂消(たまげ)てしまうのだ、そして君に実のところを打明けるとね、彼らのどれもこれも一人として、よく見てみれば、全くその任に適しないように思わ
E
307

れるよ。だから、どうしても若者たちを愛知に向かわせることができないのだ。

ソクラテス よく打明けてくれた、クリトン、しかし君はどの職業においてもくだらぬ人々は多くて一文の値打もないが、しかし立派な人々は少なくて値打の貴いものだということを知らないか。というのは、体操術は君には立派なものだとは思われないか、それからまた金儲けや弁論や将軍の術も。

クリトン ええ、思われるどころじゃないよ。

B **ソクラテス** ではどうだ。君は、これらのどの術においても多くの人々は、それぞれの仕事に対して笑うべきものであるのを見ないか。

クリトン ええ、それは見るよ、ゼウスに誓って、全く君の言う通りだよ。

ソクラテス じゃ、どうだ、君はそのために君自らすべての職業を避け、君の息子さんたちにもそれを許そうとはしないかね。

クリトン いや、そいつは、ソクラテス、正しいことじゃないよ。

ソクラテス それじゃ、クリトン、する必要のないことなら、しないがいい、むしろ愛知を業としている人々には、彼らが善い人々であるにせよ、悪い人々であるにせよ、おさらばして、事柄そのものを立派に充分に吟味

C した上で、もし君にそれがつまらぬものだとわかったら、すべての人々を遠ざけたまえ、ただ君の息子さんたちに限ってはいけないよ、しかしそれが、もし私がかくかくのものだと思っているちょうどそのようなものである

1　271B注4を見よ。

ことがわかったら、恐れるところなく、追求して修業したまえ、これはよく言うことだが、君たち、親子揃って、[1]ね。

1 『法律』VII. 804D参照、ここでは「よく言われることだが、大人も子供もできる限り是非とも教育を受けねばならぬ」と言われている。

プロタゴラス

——ソフィストたち——

藤沢令夫訳

登場人物

ソクラテスの友人
ソクラテス
ヒッポクラテス
プロタゴラス
アルキビアデス
カリアス
クリティアス
プロディコス
ヒッピアス
（その他）

309

ソクラテスの友人　どこからやってきた？　ソクラテス。言わずとしれたこと、アルキビアデス[1]の青春を追いまわしてきたところなのだろうね。じっさい、ついこのあいだもぼくはこの目でみたが、あいかわらず美しい男だと思ったよ。だが、もう男だね、ソクラテス――われわれのあいだだけの話だが。もうすっかり鬚（ひげ）も生えはじめているし。

B

ソクラテス　それがいったい、どうしたというのだ。君は、「鬚生えそめし若さこそ、げに優美（やさし）さのきわみなれ[2]」と言ったホメロスの讃美者ではなかったのか？　アルキビアデスは、いままさにそういう若盛りにあるのだ。

友人　で、どうなの、いまは？　いままで彼といっしょにいたのだろう？　あの若者の君に対するそぶりは、どんなぐあいかね。

ソクラテス　悪くない、とぼくはにらんだ。とくに、きょうのところはね。ぼくの味方をして、いろいろとたくさんぼくのために弁じてくれたりしたのだから。――そしていかにもぼくは、ここに来るいまのいままで、彼といっしょにいたのだよ。ところがひとつ、妙なことを君に話してあげようか。ぼくはね、彼がそばにいるというのに、ちっともそのほうに気をとられなかったばかりか、ときには彼のことをすっかり忘れてしまうようなことさえ、しばしばあったのだよ。

C

友人　いったいまた、どうしたのだ、君とあの若者とのあいだに、そんな重大な事態が生じたとは？　まさか

この市(まち)で、君がほかにもっと美しい人に出会ったというはずはないしね。

ソクラテス　ところが、大いにそうなのだ。

友人　なんだって？　それはアテナイ人かね、よそ者かね。

ソクラテス　よそ者だ。

友人　どこの人だ。

ソクラテス　アブデラの人さ。

友人　それで君には、そのよそ者がそんなに美しく思えたのかね、あのクレイニアスの息子よりも美しくみえたほど？

ソクラテス　君、最高の知をそなえたものが、より美しくみえなくてどうする。

友人　おやそれでは、ソクラテス、君はここへ来る前に、誰か知者に出あってきたというわけなのかね。

D

ソクラテス　知者も知者、当代随一の知者だ――もしプロタゴラスが最高の知者であることに、君が賛成ならね。

友人　え、なんだって？　プロタゴラスがアテナイに来ているのだって？

ソクラテス　もう三日目になるよ。

1　「解説」の登場人物の説明参照。

2　ホメロス『イリアス』第二四巻三四八行、『オデュッセイア』第一〇巻二七九行。

友人　すると、君はいま、ここに来るまであの人といっしょにいたわけなのか？
ソクラテス　そうとも。いろいろとたくさんのことを、話したり聞いたりしてね。
友人　それならぜひ、さしつかえなかったら、いっしょにいたときの模様を、ぼくたちに話してくれないか。
――さあ、ここに坐って。この召使の子を立たせて。
ソクラテス　大いによかろう。聞いてくれるなら感謝したいくらいだ。
友人　いや、こちらこそだよ。君が話してくれるならね。
ソクラテス　ありがたいのはお互いさま、か。――とにかく聞いてくれたまえ。

二

昨夜のことだ。まだ夜も明けやらぬころというのに、ヒッポクラテス――アポロドロスの息子で、パソンの弟だ――あの男が、杖で戸をひどくはげしくたたいていた。誰かが戸をあけてやると、すぐに息せき切ってかけこんできて、
B
「ソクラテス、目をさましていらっしゃるのですか、眠っていらっしゃるのですか」
と大声で言う。ぼくはその声で彼だとわかったので言った、
「ヒッポクラテスだな。何か変ったしらせでもあるのではなかろうね」
「いえいえ、よいしらせのほかに何がありましょう！」
「それはよかった。しかし何だね、そのしらせというのは？　それに、何のためにこんな時刻にやってきたの

かね？」
「プロタゴラスが来たのです」
と彼はぼくのそばに立って言った。
「おとといね」とぼくは言った、「君はやっといま聞いたところかね」
「神々に誓って、ゆうべ聞いたばかりです」
C
こう言いながら彼は、手さぐりで寝台をつかまえ、ぼくの足もとに腰をおろした。そして言った、
「そうです、ゆうべ、それもずいぶん遅く、オイノエから帰ってきてからのことでした。じつは召使のサテュロスが、私のところから逃亡しましたのでね。まったくそういえば私は、彼を追いかけて行くということをあなたに知らせるつもりでいながら、何かほかのことにまぎれて、忘れてしまったのでした。――私が帰ってきて、みなで夕食を終え、やすもうとしていたときに、兄が、プロタゴラスが来ていることを私に話してくれたのです。はじめ私は、すぐにでもあなたのところへ行こうとしたのですが、やがてしかし、夜があまりふけすぎていると
D
思いなおしました。そしてひと眠りして疲れがなおると、すぐに起きて、こうしてここへかけつけてきたのです」
ぼくは、彼の意気ごみと興奮をみてとったので、こう言ってやった。
「それで、そのことが君にとって、どうしたというのかね。プロタゴラスが何か君に、悪いことでもしたというのかね？」
すると彼は笑って言った、
「神々に誓って、まったくそのとおりなのですよ、ソクラテス。なにしろあの人は、自分だけが知者でいて、

この私を知者にしてくれないのですからね」

「いやいや、そんなはずはない。あの人に金を払ってよく頼みこめば、君だってちゃんと知者にしてくれるはずだ」

(310)

E 「ああ、ほんとうに、ゼウスならびに神々よ、それですむことでしたらねえ！ この私の金も友だちの金も、のこらず使いはたしたってかまわないのに。――いやじつは、私がいまあなたのところへやって来たのも、ちょうどそのことのためなのです。私のために、あの人と話し合っていただきたいと思いましたね。というのは、私自身はまだ若すぎますし、それにまた、これまでまだ一度もプロタゴラスを見たことさえなく、何ひとつ彼から話を聞いたこともないからです。なにしろ、この前あの人が滞在したときには、私はまだ子供でしたからね。しかしそれはともかくとして、ソクラテス、すべての人が口をそろえてあの人をたたえ、言論にかけては第一人者だと言っています。さあすぐに、彼のところへ行きましょう。そうすれば、家にいるところをつかまえられますから。私の聞いたところでは、ヒッポニコスの子カリアスの家に泊っているとのことです。さあ参りましょう」

311

ぼくは言った、

「いや、君、まだあそこへは行かないでおこう。時刻が早すぎるよ。それよりここで、起きて中庭に行こう。そしてそこらをぶらつきながら、明るくなるまで時をすごすことにしよう。それから出かければいいさ。プロタゴラスは、ほとんど家ですごす人でもあることだしね。だから心配しなくてもいいよ。だいじょうぶ、家にいるところをつかまえられるだろう」

三

B それからぼくたちは、立ちあがって中庭に行き、そこをぶらぶらと歩きまわった。ぼくはヒッポクラテスの気持の強さをためしてやろうと思って、質問をして彼をよくしらべてみることにした。

「ちょっときくが」とぼくは言った、「ヒッポクラテス、君はいま、プロタゴラスのところへ出かけて、君自身のために報酬として金を払おうとしているわけだが、いったい君は、自分がこれから行こうとしている人物がどういう人だと考え、また、自分が何になろうというつもりで行くのかね？ ――たとえば、かりに君が、君と同じ名前のアスクレピオス派の医者、コス島のヒッポクラテス[1]のところへ行って、君自身のために報酬として金を払うつもりでいたとする。その場合、誰かが君に向かって、『君にききたいのだが、ヒッポクラテス、君は、君
C がこれから報酬を支払おうとしているヒッポクラテスという人を、何者であると考えているのかね』とたずねたとしたら、君は何と答えるだろうか」

「医者だと考えている、と答えるでしょう」

「『自分が何になろうというつもりなのかね』ときかれたら？」

「医者になるつもりなのだ、と答えるでしょう」

---

1 アポロンの子医神アスクレピオスの流れをくむといわれる学派がアスクレピオス派と呼ばれ、ロドス島、コス島、クニドスなどの土地で活動した。コス島のヒッポクラテス(前四六〇年ころの生まれ)はとくに有名で、医術の祖と呼ばれている。

「では、かりに君が、アルゴスのポリュクレイトスやアテナイのペイディアス(1)のところへ行って、君自身のために彼らに報酬を支払うつもりでいるとした場合、誰かが君に、『君がポリュクレイトスやペイディアスにその金を払うつもりでいるのは、つまり彼らを何者と考えてのことなのかね』とたずねたとしたら、君は何と答えるだろうか」

「彫刻家、と答えるでしょう」

「『君自身は何になろうというつもりで?』」

「むろん、彫刻家」

D 「よろしい、さあそれでは、いまぼくと君とは、プロタゴラスのところへ行って、君のために報酬として金を払う心づもりをしている——われわれの財産だけで彼を説き伏せるのにこと足りるならそれでよし、足りなければ、それに加えて友だちの金をつぎこんでまでね。そこでもし、誰かが、それほどまでにこのことにひどく熱心になっているわれわれに向かって、こうたずねたとしよう。『ぼくに言ってくれ、ソクラテスにヒッポクラテス、君たちはプロタゴラスをどういう人と考えて、金を払うつもりでいるのか』とね。われわれはこの人に何と答えたものだろうか。われわれが耳にするところでは、プロタゴラスには、肩書きとしてどんな名前がつけられているだろうか。ちょうどペイディアスは彫刻家、ホメロスは詩人と呼ばれているのと同じような意味で、プロタゴラスの場合には、どのような名前をわれわれは耳にしているだろうか?」

E 「世間で呼ばれているところでは、たしかにあの人は、ソフィストであるということになっていますね、ソクラテス」

と彼は言った。
「すると、われわれが彼に金を払おうとしているのは、彼をソフィストと考えてのことなのだね」
「たしかにそのとおりです」
312
「そこでもし誰かが、さらにこう君にたずねたとしたら？　『それでは、君自身は何になろうというつもりで、プロタゴラスのところへ行くのか』と」
すると彼は、顔をあからめて答えた——すでに空もいくらか白みかけていたので、彼の様子がよくわかったのだ。
「先のいろいろな例にならうとすれば、明らかに、ソフィストになるためということになるでしょうね」
「だが、君としては、神々に誓って、自分がギリシア人たちの前にソフィストとして現われることに、気がひけはしないだろうか」
「ほんとうのところはそうなのです、ソクラテス。——心に思うことをそのまま打ち明けなければならないとすれば」
「しかし、ヒッポクラテス、おそらく君は、君がプロタゴラスから学ぼうとしているものが、そういった性質
B
のものと考えているわけではないのではなかろうか。むしろそれは読み書きの先生や竪琴の先生や、体育の先生から学んだのと同じような性質のものなのだろう？　つまり君は、そういったもののひとつひとつを、自分が本

1　いずれも前五世紀ギリシアにおける高名の彫刻家。

職の師匠になる目的で、専門的技術として学んだのではなく、一個の素人としての自由人が学ぶにふさわしいものとして、一般的教養のために学んだわけなのだ」

「たしかにおっしゃるとおり、プロタゴラスから学ぼうとするのは、むしろそういった性質のものであるように思われます」

四

ぼくは言った、

「いったい君には、自分がいましようとしていることの意味がわかっているのかね。それとも、気がつかずにいるのかね」

「どんなことについてですか」

C

「君はいま、ほかならぬ自分自身の魂の世話を、あるひとりの男——君の言うところによれば、ソフィストであるところのひとりの男——にゆだねようとしているということだ。では、そのソフィストとはそもそも何ものなのか、君がもしそれを知っているとしたら、ぼくは驚くだろう。だが、その点をもし君が知らないでいるとすれば、君は、自分が魂をゆだねる相手がいかなる人かということも——善いしろものか悪いしろものかも——知らないでいるということになる」

「知っているつもりではいるのですが」

「それならひとつ、言ってみてくれたまえ。君の考えではソフィストとは何ものなのかね」

「私の承知しているところでは、ソフィストとは、まさに読んで字のごとく、賢い事柄を知っている人[1]にほかなりません」

「そのことなら、画家についても大工についても言えるのではないか——これらの人たちは、賢い事柄を知っている人たちである、とね。しかし、もし誰かがわれわれに、『何に関して賢い事柄を、画家は知っているのか』とたずねるならば、われわれはその人に向かって、肖像画の製作に関してだ、と答えることができるはずだろうし、そのほかについても同様だろう。そこでもし誰かが、『では、ソフィストは、何に関して賢い事柄を知っているのか』とたずねたとしたら、われわれはその人に何と答えたものだろうか。ソフィストは、何をつくることを知っている者なのだろうか」

D

「われわれの答としては、ソクラテス、ソフィストとは、ひとを言論に秀でた者にする知識をもっている者である、というよりほかはないでしょう」

「おそらくそれで、間違ってはいないだろうが、しかし充分な答とはいえないようだ。なぜならわれわれにとって、その答はさらにあらたな問を要求するからだ——ソフィストがひとを言論に秀でた者にするというのは、いったい何についての言論なのか、とね。たとえば竪琴の先生は、自分が知識をさずけるまさにその事柄、すなわち琴のひき方について、ひとを上手に話せるようにするはずだ。そうだろう？」

E

「ええ」

---

1 sophistes（ソフィスト）＝soph(on)＋(ep)iste(mon)（賢い事柄を知っている人）という一種の語源的説明。

「よろしい。ではソフィストとは、何についてひとを言論に秀でた者にするのだろうか」
「むろんそれは、自分がひとに知識をさずけるまさにその事柄についてでしょう」
「ちがいないだろうね。では、その事柄とはいったい何なのだろうか。ソフィストが自分でも知識をもち、弟子にも知識をさずけるのは、何についてなのだろうか」
「正直のところ、これ以上は何も言うことができません」

五

313

そこでつぎに、ぼくはこう言ってやった。
「いったいどうなのだね。君には、自分がいま、魂をどのような危険にさらそうとしているかがわかっているのかね？　かりにもしこれが、君が身体を誰かにゆだねて、身体がよくなるか悪くなるかの危険をおかさなければならないというような場合だったとしたら、君はきっと、その人にゆだねるべきか否かを、いろいろと思案を重ねたことだろうし、また、何日も何日も考えながら、友人や身内の者の助言を求めたことだろう。しかるに、君が身体よりも大切にしているこの魂というもの、君のすべての幸不幸はそこにかかり、それが善くなるか悪く

B

なるかによって左右されるところのもの、そういうものについては、君は父親にも、兄弟にも、またわれわれ仲間の誰ひとりにも、ほかならぬこの君の魂をあの新来のよそ者にゆだねるべきか否かを、相談しなかったのかね。君の話によると、昨夜このことを耳にするや、夜明けを待たずにとんできて、君自身をあの男にゆだねるべきかどうかということについては、一言も語らず、相談もせず、そして君自身の金ばかりか、友だちの金まで注ぎこ

んでもかまわぬつもりになっているのか――まるで何が何でもプロタゴラスにつかなければならないと、もうすっかり決めこんでしまったかのように！　そのプロタゴラスという人を、君は知りもしなければ、まだ一度も話をかわしたこともないと言う。ただソフィストと名づけるだけで、ソフィストとはそもそも何ものであるかについては、明らかに君は知らずにいながら、何もわかっていないその人に、わが身をゆだねようとするのか」

C

ぼくの言葉を聞いて彼は言った、

「あなたのおっしゃることから反省してみると、ソクラテス、どうもそういうことになるようです」

「そもそもソフィストとは、ヒッポクラテス、魂の糧食となるものを、商品として卸売りしたり、小売りしたりする者なのではないだろうか。このぼくには、どうも何かそのような者にみえるのだが」

「魂の糧食となるものとは、ソクラテス、何ですか」

「もろもろの学識だ。そして、友だちとして言っておくが、ソフィストが、ちょうど身体の糧食をあきなう卸商人や小売商人と同じように、自分の売りものをほめたてて、われわれをだますことのないように、気をつけたほうがいいよ。というのは、彼ら食物の商人たちも、自分たちが持ってくる商品について、そのどれが身体によいか悪いかを自分自身でも知らないのに、売るにあたって何もかもほめたてるし、彼らから買うほうは買うほうでまた、体育家や医者でもないかぎり、そのよしあしがわからない。それと同じように、いろいろの知識を国から国へと持ち歩いて売りものにしながら、そのときそのときに求めに応じて小売りする人々、そういう人々もまた、売りものとなれば何もかもほめたてるけれども、しかし中にはおそらく、君、自分が売ろうとするものについて、そのどれが魂に有益であり、有害であるかを、知りもしないような連中がいるかもしれない。彼らから

D

E

買うほうの人々も、やはり同様だ——この場合は、魂をあつかう医術の専門家とでもいうべき者でないかぎりはね。

だから、君がもしそういった彼らの売りもののうちで、どれが有益でどれが有害かをちゃんと知っているのだったら、いろいろな学識を買い入れるということは、それがプロタゴラスからであろうと、ほかの誰からであろうと、君にとって別に危険はないわけだ。だが、もしそうでないのなら、君、何よりも大切なものを危険な賭にさらすことのないように、よくよく気をつけたほうがいいよ。じっさいまた、学識を買う場合には、食物を買う場合よりも、はるかに危険が大きいことでもあるからね。なぜって、これが飲食物だったら、卸商人や小売商人からそれを買っても、別の容れものに入れて持ちかえることができるし、飲んだり食べたりして身体に入れる前

314

に、家にとっておいて、食べたり飲んだりしてよいものといけないもの、またその量や時期などについて、識者を呼んできて相談することができる。だから、それを買うのにたいした危険はないわけだ。だが、これが学識と

B

なると、別の容れものに入れて持ちさるわけにはいかない。いったん値を支払うと、その学識を直接魂そのものの中に取り入れて学んだうえで、帰るまでにはすでに、害されるなり益されるなりされてしまっていなければならないのだ。だから、われわれは、こういった事柄を考察するには、われわれより年長の人たちの助けもかりることにしよう。われわれは、これだけのことを決めるにしては、まだ若年の身だからね。

しかし、さしあたっていまのところは、いったんやりかけたことはつづけることにして、いちおう出かけて行ってあの人の話を聞き、そして聞いてから、ほかの人々にも助言を求めることにしよう。というのは、あそこに

C

はただプロタゴラスだけではなく、エリスのヒッピアスや、それにたしかケオス島のプロディコスもいるし、ほ

かにも知者たちがたくさんいることでもあるのだから」

六

そういうことに決めて、われわれは道を歩いて行った。戸口の前まで来たとき、われわれはそこに立ち止まって、ある話題について話し合った。それはわれわれが、来る途中にはじめた話題だったのだが、それが尻切れとんぼにならないように、話の結着をつけてから中へ入ろうと思って、戸口の前で立ち止まって、互いに意見が一致するまで話をつづけていたわけなのだ。ところがどうやら、門番が、それは閹人だったが、われわれの話を聞D いていたらしい。そしておそらく彼は、ソフィストたちがわんさとやってくるために、この家を訪れる者たちに嫌気がさしていたものとみえる。とにかく彼は、われわれが戸をたたくと、開けて一瞥をくれ、「ちぇっ、ソフィストどもだな。――御主人はいまお忙しいのだよ！」と言って、言い終らぬうちに両手で戸を、ありったけの勢いでピシャリと閉めてしまったものだ。そこでわれわれがもう一度戸をたたくと、彼は戸を閉めたままで、「おまえさんがた、主人はいまお忙しいと言ったのが聞えなかったのかね」と答えた。「いや、君」とぼくは言った、「われわれは、カリアスに会いに来たのでもないし、ソフィストでもないのだよ。どうか安心したまえ。プロタE ゴラスに会えればと思って来ただけなのだからね。どうか中へ伝えてくれたまえ」。するとこの男、やっと不承不承に、われわれのために戸を開けてくれた。

中へ入ると、回廊のかなたこなたへと歩をはこんでいるプロタゴラスの姿が、われわれの目にはいった。彼にすぐつづいて逍遙のお伴をしていた面々はと見れば、一方の側に、ヒッポニコスの子カリアス、彼と母を同じく

する弟でペリクレスの子パラロス、(1)グラウコンの子カルミデス。(2)もう一方の側には、ペリクレスのもうひとりの息子クサンティッポス、ピロメロスの子ピリッピデス、そしてメンデの人アンティモイロス(3)——これはプロタゴラスの最も高名の弟子で、ソフィストになろうとして専門的に学んでいる人物だが——であった。そのまたうしろから、話を傾聴しながらつき従っている人々は、多くはよその都市の者と見うけられた。これらの人たちをプロタゴラスは、あたかもオルペウスのように、その語る声をもって魅惑しつつ、彼の遍歴の足どりが通過した国B また国から、いざない連れて来ているのであり、他方魅惑のとりこになった彼らは、その声の聞えるほうへとついてきているわけなのだ。しかしこの土地の者もいくらかは、この合唱舞踏隊に加わっていた。

じつにこの合唱舞踏隊こそは、ぼくにはまたとない楽しい観ものであった。なんと彼らは見事に、プロタゴラスの歩む行く手をけっして邪魔しないようにと、気をくばっていたことだろう。プロタゴラス自身とそのお伴たちが向きを転じてひきかえすと、つづくこれらの聴講者たちは、巧みに一糸乱れず左右にわかれ、ぐるりと旋回しながらそのつどうしろにまわって、世にも見事にぴたりと隊伍をととのえるのであった！

七

「ついでこの目にとらえしは」——とはホメロスの文句だが(4)——エリスの人ヒッピアスであった。向こう側C の回廊にあって、高椅子に腰をかけていた。彼をとりまいて腰掛けにひかえていたのは、アクゥメノスの子エリュクシマコス、(5)ミュリヌゥス区の人パイドロス、(6)アンドロティオンの子アンドロン、(7)それに彼と同じ国もしくはそのほかの、よその国の人々であった。見うけるところ、彼らは自然や天体について、何か天文学上の事柄をヒッ

ピアスに質問しているらしく、ヒッピアスのほうは高椅子に腰をおろしたまま、彼らのひとりひとりの言葉に判定を下し、質問された事柄に説明をあたえていた。

D 「さらにはタンタロスをもこの目にとらえぬ」(8)——やっぱりケオスのプロディコスも逗留(とうりゅう)していたのだ。彼はひとつの部屋にいたが、この部屋はもと、ヒッポニコスが宝蔵として使っていたのを、たくさんの泊り客のためにカリアスがここも空(あ)けて、客室にかえてしまったのだ。さてそのプロディコスは、ずいぶんたくさんの——とみえた——毛皮らしきものや夜具にくるまって、まだ横になったままでいるところだった。その横に、ケラメス区生まれのパウサニアス(9)がそばの寝椅子に腰をおろし、パウサニアスとならんで、まだうら若いひとりの少年が

E いた。この目に狂いがなければ、すぐれて立派な天性をもった人とみたが、とにかく顔だちの美しいことのほうはまちがいなしだ。名前はアガトン(10)と聞いたように思うが、これがパウサニアスの想いを寄せる若者だったとし

---

1 パラロスとつぎに名が挙げられるクサンティッポス(『メノン』94B参照)の母は、ペリクレスに嫁してこの二人の兄弟を生む以前に、かつてヒッポニコスの妻であって、カリアス(「解説」の登場人物の項を参照)を生んでいた。

2 プラトンの母方の叔父。『カルミデス』の主要登場人物。

3 ピロメロス、ピリッピデス、アンティモイロスについては、他に何も知られていない。

4 『オデュッセイア』第一一巻六〇一行参照。

5 医者。『饗宴』の登場人物。

6 『パイドロス』および『饗宴』の主要登場人物。

7 『ゴルギアス』487Cで、哲学についてカリクレスと同意見の人と言われている。

8 『オデュッセイア』第一一巻五八二行。プロディコスは身体が病弱であり、その点の不幸さのゆえにタンタロスに比せられているもの。

9 『饗宴』の登場人物(同篇180C sqq. 参照)。

10 前四四七年ころに生まれ、若くして悲劇詩人として名をあげた。『饗宴』は、彼が最初の作品で優勝したとき(前四一六年)の、彼の家が舞台となっている。

ても、いっこうに不思議はないだろう。その場にはこの少年がいたほか、例の両アデイマントス[1]——ケピスの子とレウコロピデスの子の——と、それにほかにも若干の人々の顔がみえた。この人たちが何について話し合っていたか、ぼくには部屋の外からついに知ることができなかった、——プロディコスの言うことを聞こうと一所懸

316

命になっていたのだが。なにしろこの人をぼくは、たいへんな知者で神様のような人だと思っているからね。彼の声が低いものだから、室内がざわめきのようなものに満たされて、言うことがはっきり聞きとれなかったのだ。

八

われわれがはいって行くとすぐに、われわれのあとから、美しい——とは君が主張してぼくがそれに承服しているところだが——アルキビアデスと、それからカライスクロスの子クリティアス[2]がつづいてはいってきた。

さて、中へはいってからなお少しばかり暇どって、これらの光景をとっくりと眺めたのち、われわれはプロタゴラスのところへ行った。そしてぼくは言った、

B

「プロタゴラス、私とこのヒッポクラテスとは、あなたにお目にかかりにやってきました」

「私だけと話し合いたいと思って来たのかね」と彼は言った、「それとも、ほかの人たちもいっしょのほうがいいのかね」

「私たちとしては」とぼくは答えた、「どちらでもかまいません。まあそれは、私たちがここへやってきたわけを聞いてくださったうえで、あなた御自身が考えてください」

「で、ここへやってきたわけというのは？」

「ここにつれてきたヒッポクラテスは、この都市の者で、アポロドロスの息子、家は富裕な大家です。本人の資質も、同輩にくらべて少しもひけをとらないように思えます。そして、国家有数の人物になりたいとのぞんでいるらしいのですが、そのためにはあなたにつくのがいちばんだろうと、この男は信じているのです。さあ、そういうわけですから、この問題について、あなたと私たちだけが差し向かいで話し合うべきか、ほかの人たちもいっしょのほうがよいか、あなたのほうでお考えになってください」

C

「いや、ソクラテス」と彼は答えた、「君がこの私のために、そうして気を使ってくれるのは当を得たことだ。じっさい、よその国の者でありながら、大きな国々をおとずれ、そこの青年たちの中でも最も優秀な者たちを説いて、ほかの人間との交際は、それがその土地の者であれよその土地の者であれ、年長の者であれ年下の者であれ、これをやめて自分につくようにさせ、自分といっしょになることによって最もすぐれた人間になれると信じこませる者、そういうことをする者は、よくよく気をつけなければならないのだ。それによってまねく嫉み、さらには敵意や陰謀などは、けっして小さなものではないのだから。

D

しかし、この私をして言わしめるならば、ソフィストの技術というものは、むかしからあったものなのであって、ただ古人でそれに従事していた人たちは、この技術がまねく憎悪をおそれて、仮面をもうけてその偽装のか

1　ケピスの子のアデイマントスについては他に知られていない。レウコロピデスの子のアデイマントスは後にアルキビアデス配下の将軍となった人。

2　「解説」の登場人物の説明参照。

げにかくれていたのである。ある人々は詩作をもってこの仮面とした——たとえば、ホメロスやヘシオドスやシモニデスのように。またある人々は、秘儀をさずけ神託を伝えることをもって偽装した——オルペウスとムゥサイオス(1)およびその徒がそれである。またときによると、体育術までもこの偽装に使う人々がしばしばあることに、私は気づいている——たとえばタラスの人イッコス(2)がそれであり、また現になお誰にも劣らぬソフィストとして E 存命しているセリュンブリアのヘロディコス(3)、もとはメガラの人であったこの男がそうである。さらに君たちの国のアガトクレス(4)は、音楽をもって自分の仮面としたが、じつは立派な大ソフィストであるし、またケオスのピュトクレイデス(5)をはじめ、ほかにもそういう人々がたくさんいる。すべてこれらの人々は、くりかえし言うように、自分が嫉まれることをおそれて、こういったさまざまの技術を表にかかげてその陰にかくれたのであった。

317

しかしながら、かくいう私は、この点に関するかぎり、これらの人々のすべてと意見を異にする者である。なぜならば、私の考えるところによれば、彼らはいっこうに、はじめの意図を達成していないからである。ほかでもない、彼らは、世人のなかでもその国々において実権をにぎる人々の目をくらますことができなかったが、これらの偽装も結局はそういう人々が目当てなのであるから。なるほど大衆はといえば、これはいわば何も気づいていないといってよく、ただ前者の宣託するところを、何でもそのままくりかえしているだけなのであるが。——さてこのように、のがれようとしてのがれることができず、あばかれるくらいなら、それを試みること自体 B がそもそも大いに馬鹿げているし、かつ、人々の気持をいっそう硬化させることになるのは必定である。なぜなら人々は、そういうことをする人間を、ほかの点もさることながら、油断のならない陰険な人間だとみなすからである。だから、この私は、先にあげた人たちとはまったく正反対の道を歩んできたし、自分がソフィストであ

って人間の教育を受けもつ者であると、公然と認めている。けだしこのような配慮のほうが先のような配慮よりも、すなわち、公然と認めるほうが隠して否定するよりも、良策というべきであろう。そして、このほかにもいろいろと配慮をめぐらしてきたおかげで、ありがたいことに私は、ソフィストであることを認めたために危害をうけるようなことは、一度もなかった。とはいえ、私がこの技術を業としている期間は、すでに多年にわたっているのである。事実また、生まれてからの歳月全体からして長いのであるから。[6] 君たちが全部あつまっても、このなかには、年齢的にみて私がその父親になれないような者はひとりもいないだろう。

C

とにかくこういう次第であるから、もし君たちの希望があれば、この家にいるすべての人々の前で、この問題について話すのがいちばん私にはのぞましいのだ」

そこでぼくは――彼ののぞむところは、われわれが彼の崇拝者としてやってきていることをプロディコスとヒッピアスに見せつけて、得意になることにあると推察したので――こう言った。

D

「それならぜひ、プロディコスも、ヒッピアスも、それに彼らといっしょにいる人たちも呼んで、私たちの話を聞いてもらわなければなりませんね」

---

1 いずれもオルペウス教と呼ばれる宗教と結びついた神話上の人物。

2 オリュンピア祭で五種競技に優勝した体育家。なお『法律』Ⅷ. 839E sqq. 参照。

3 医者で、種々の養生法や鍛練法を発明して自分でもそれを厳格に守った。『国家』Ⅲ. 406A～C 参照。

4 音楽家で、同じく高名の音楽理論家ダモンの師。『ラケス』180D 参照。

5 アガトクレスの師に当る音楽家。ペリクレスの師でもある。『アルキビアデスⅠ』118C 参照。

6 『メノン』91E によれば、プロタゴラスは七〇歳近くまで生き、そのうち四〇年間をソフィストとして教えた。

(317)

「大いによかろう」とプロタゴラスは答えた。

「ではなんでしたら」とカリアスが言った、あなた方が腰をおろしながら話し合えるように、議席の用意をととのえましょうか」

E

そうしようということになった。われわれはみな、これから賢い人たちの話を聞くのだというよろこびに心をはずませながら、自分でもすすんで腰掛けや寝椅子を手にとり、ヒッピアスのいたところに席を用意した。そこには前から腰掛けが置いてあったからだ。そのあいだにカリアスとアルキビアデスが、プロディコスを寝椅子から起こしてつれてきた。そしてプロディコスといっしょにいた連中も。

九

われわれが全部席に着いたところで、プロタゴラスが口をきった。

「さあそれでは、ソクラテス、この人たちもこうしてそろったことだから、君がすこし前、この若者のために私に言っていたことを、話したらどうだね」

そこでぼくは言った、

318

「もう一度さっきと同じように、プロタゴラス、私がここへやってきたわけからまずお話しすることにしましょう。じつは、ここにいるヒッポクラテスが、あなたにつくことをのぞんでいるのです。そこで、あなたにつくとどういう効果があるのか、それを聞かせていただければ幸いであると彼は言っているのです。こちらから申しあげることは、これだけです」

するとプロタゴラスは、ぼくの言葉を受けて言った、
「若者よ、そのことなら、君はこの私につけばこういうことになるのだ。つまり君は、私についたその日に、前よりもすぐれた人間になって家に帰るだろうし、次の日もやはり同じだろう。そして一日一日と、つねによいほうへ向かって進歩することだろう」

B 聞いてぼくは言った、
「プロタゴラス、それだけのことなら、あなたのおっしゃることに別に不思議はなく、むしろ当り前のはなしでしょう。あなた御自身だって、たとえそれだけの齢を重ね、それだけの知に達していらっしゃるとしても、またまあなたの知らないことがあって、それを誰かから教えられたとしたら、よりすぐれた人間になるわけでしょうからね。おききしたいのはそういうことではなくて、次のような意味なのです。
――かりに、このヒッポクラテスが急に志を変えて、最近アテナイに来ているあの若者、ヘラクレイアのゼウクシッポス(1)につくことをのぞんだといたしましょう。そして、ちょうどこうしていまあなたのところへ来ている

C ように、彼のところへ行って、あなたから聞いたのと同じことを彼から聞いたといたしましょう――彼につくと、一日一日とよりすぐれた人間になり、進歩するであろう、とね。その場合もし、ヒッポクラテスが重ねて彼に、『いったい何に関してすぐれた人間になり、何に向かって進歩するとあなたはおっしゃるのですか』とたずねたとしたら、ゼウクシッポスはきっと『絵をかく技術に関して』と答えるでしょう。またもし、テバイのオルタゴ

1　有名な画家ゼウクシス(『ゴルギアス』453C参照)のことであると思われる(ゼウクシスはゼウクシッポスの略称)。

ラス(1)に習いに行って、あなたから聞いたのと同じことを彼から聞いた場合、重ねて彼に、彼につけば何に向かって日に日にすぐれた人間になるのかとたずねるとしたら、『笛の吹き方だ』と答えることでしょう。あなたもまた、そういうふうに、この若者と、この若者のためにおたずねしている私とに、答えていただきたいのです。

D ――このヒッポクラテスは、プロタゴラスにつくことによって、彼についたその日に、よりすぐれた人間になって帰るだろうし、それからの一日一日も同じように進歩することだろうというのは、プロタゴラスよ、何に向かってであり、何に関してなのですか」

ぼくがこう言うのを聞いて、プロタゴラスは言った、

「君の質問はよい質問だし、ソクラテス、私もまた、よい質問をする人たちにはよろこんで答える者だ。――すなわち、ヒッポクラテスが私のもとに来るならば、彼が誰かほかのソフィストにつくときに受けるような目には、会わずにすむだろう。というのは、ほかの連中は青年たちをいためつけるからだ。なにしろ彼らときたら、

E 青年たちが専門的な学術からせっかく逃げ出しているのに、むりやりに引きもどしながら、やれ算術だ、天文学だ、幾何学だ、音楽だと教えこんで、またしても専門的な学術の中にほうりこむのだからね。(こう言いながら彼は、ヒッピアスのほうをじろりと見た。) しかし、ヒッポクラテスがこの私のところに来るならば、目当てにしてきたものだけを学んで、ほかのよけいなものを学ばされるようなことはないだろう。

319 で、私から学ぶものは何かというと、身内の事柄については最もよく自分の一家を斉(ととの)えるの道をはかり、さらに国家公共の事柄については、これを行なうにも論ずるにも、最も有能有力の者となるべき道をはかることの上手というのが、これである」

「はたして私は」とぼくは言った、「あなたの言葉に間違わずについて行っているでしょうか。――私には、あなたのおっしゃっているのは国家社会のための技術のことであり、あなたが約束されるのは、国家社会の一員としてすぐれた人間をつくるということであるように思えるのですが」

「そのとおり、ソクラテス、それこそまさに、私が広く世に問うところのものだ」

一〇

ぼくは言った、

「そうすると、ずいぶんすばらしい技術をあなたは身につけていらっしゃるわけですね――もしそれがほんとうなら。こんな言い方をするのも、ほかならぬあなたに対しては、自分の考えるとおりを率直に申しあげたいからです。というのは、プロタゴラス、私としては、あなたのおっしゃるような事柄は、ひとに教えることのできるものとは思っていなかったのです。でも、あなたにそう言われると、どうしても信じないわけにはいきません。(B) ただ私がどういうところから、それが教えられることのできないものであり、さらには、一般に人間によって人間に授けることのできないものでもあると考えているか、その理由を申しあげなくてはなりますまい。

――私は、ギリシア人一般も認めているように、アテナイ人が賢明な国民であることを認めている者です。ところが、そのわれわれアテナイ人が議会に集まるときに、私の目にするところでは、何か土木建築を国家の事業

1 将軍エパミノンダスに笛を教えたと伝えられる笛の専門家。

(319)

として行なわなければならない場合には、建築家をまねいてその建築物のことを相談し、造船に関する場合は造 C 船の専門家を呼び、またそのほかすべて、学んだり教えたりすることができると考えるかぎりの事柄については、同じようにします。そして、もし誰かほかの者が人々に向かって意見を述べようとしても、それが専門家と思われない場合は、どんなにその人の風采（ふうさい）が立派で、金持で、家柄がよくても、これを聞き入れないことは同じであって、論じようとする本人がやじり倒されて壇を去るか、または政務委員の命令によって、警官がその人を壇から引きおろすなり連れ去るなりするまでは、人々は嘲笑し、騒ぎたてるのです。こうして、事柄が専門的技術に D 属すると思う場合には、彼らはこのような態度をとるわけですが、これがひとたび、何か国事の処理を審議しなければならないような場合となると、大工でも、鍛冶屋でも靴屋でも、商人でも船主でも、貧富貴賤を問わず、誰でも同じように立って、それらについて人々に向かって意見を述べます。そして、そういう人たちに対して、先の場合のように、どこからも学ばず、誰ひとり先生についたこともないくせに意見を述べようとするといって非難するような者は、誰もいません。ほかでもない、これは明らかに、人々はそういう事柄を、教えられうるものとは考えていないからです。

E さらにこのことは、ただ国家公共のことだけがそうだというのではありません。個人的な面でもやはりそうなのであって、われわれの国民のうちでも最も知恵があり、最もすぐれた人物たちは、彼らがもっているその徳性を、ほかの人々に授けることができないでいるのです。(1) げんにペリクレスがそうです。彼はここにいるこの若者たちの父親ですが、なるほど教師たちから習えるだけの事柄については、彼はこの息子たちに申し分のない立派 320 な教育をあたえました。しかし、かんじんの彼自身が知者であるゆえんのものについては、自分でも教えないし、

誰かほかの者にゆだねるということもしていないのでして、息子たちは放し飼いにされた神社の羊のように、どこかでひとりでにその徳に行きあたりはしないかと、自分たちだけで徘徊して草をはんでいる状態なのです。さらにクレイニアス[2]——これは、ここにいるアルキビアデスの弟で、同じくかのペリクレスという人物が後見人としてついているわけなのですが、ペリクレスは、彼がアルキビアデスからよくない影響をうけることをおそれて、B この兄からひきはなし、教育のために彼をアリプロンの家にあずけました。ところが、六カ月とたたないうちに、彼の扱い方に困りぬいて、ふたたびアルキビアデスのもとにもどしてしまったのです。そしてまだまだほかにも、ずいぶんたくさんの例を私はあげることができますが、そういう人々はいずれも、本人自身はすぐれた人間でありながら、自分以外の人間となると、身内の者たると他人たるとを問わず誰ひとりとして、これをよりすぐれた人間にすることに成功しなかったのです。

ですから、これらの事実に目を向けると、プロタゴラス、私としては、人間の徳性というものが、ひとに教えることのできるものであるとは考えられないのです。しかし、あなたがそれを主張されるのを聞くと、私の考えは折れて、あなたのおっしゃることには一理あるにちがいないと思いたくなります。なにしろ私は、あなたという方を、多くの経験と学問を重ねてきたうえに、自分でもいろいろと発見してきた方だと信じているのですから。C そういうわけで、もしあなたが、徳が教えられうるものであるということを、もっとはっきり私たちに示すこと

1 同じことは『メノン』93Bsqq. において、テミストクレス、アリステイデス、ペリクレス、トゥキュディデスの場合を例として論じられている。 2 『アルキビアデスI』118E 参照。

ができるのでしたら、どうかそれを示すことに吝(やぶさ)かにならないでください」

「いや、ソクラテス」と彼は言った、「私はけっして吝かであろうとはしないつもりだ。だが、それを示すのにどちらのやり方を選んだものだろう。年長者が若い者にするように、物語を話すのがよいだろうか。それとも理論的に説明するのがよいだろうか」

その場に坐っていた者の多くが、どちらでも彼ののぞむやり方で説明してくれるようにと、彼に答えた。

「では、君たちに物語を話すほうがおもしろいように思える」と彼は言った。

二

D 「むかしむかし、神々だけがいて、死すべき者どもの種族はいなかった時代があった。だがやがてこの種族にも、定められた誕生の時がやってくると、神々は大地の中で、土と、火と、それから火と土に混合されるかぎりのものを材料にして、これらをまぜ合わせて死すべき者どもの種族をかたちづくったのである。そしていよいよ、彼らを日の光のもとへつれ出そうとするとき、神々はプロメテウスとエピメテウス(1)を呼んで、これらの種族のそれぞれにふさわしい装備をととのえ、能力を分かちあたえてやるように命じた。しかしエピメテウスはプロメテウスに向かって、この能力分配の仕事を自分ひとりにまかせてくれるようにたのみ、『私が分配を終えたら、あなたがそれを検査してください』と言った。そして、このたのみを承知してもらったうえで、彼は分配をはじめたのである。

さて、分配にあたってエピメテウスは、ある種族には速さをあたえない代りに強さを授け、他方力の弱いもの

E たちには、速さをもって装備させた。また、あるものには武器をあたえ、あるものには、生まれつき武器をもたない種族とした代りに、身の保全のためにまた別の能力を工夫してやることにした。すなわち、そのなかで、小さい姿をまとわせたものたちには、翼を使って逃げることができるようにしたり、地下のすみかをあたえたりしてやった。丈たかく姿を増大させたものたちには、この大きさそれ自体を、彼らの保全の手段とすることにした。

321 そして同じように公平を期しながら、ほかにもいろいろとこういった能力を分配したのである。これらを工夫するにあたって彼が気を使ったのは、けっしていかなる種族も、滅びて消えさることのないようにということであった。

こうして彼らのために、お互いどうしが滅ぼし合うことを避けるための手段をあたえると、今度は、彼らがゼウスのつかさどるもろもろの季節に容易に順応できるような工夫をしてやることにして、冬の寒さを充分にふせぐとともに、夏の暑さからも身をまもることのできる手段として、厚い毛とかたい皮とを彼らにまとわせ、また、ねぐらに入ったとき、同じこれらのものが、それぞれの身にそなわった自然の夜具ともなるように考慮してやった。さらに、履きものとしては、あるものには蹄をあたえ、あるものには血の通わぬかたい皮膚をあたえた。

B それから今度は、身を養う糧として、それぞれの種族にそれぞれ異なった食物を用意した。あるものには地から生ずる草をあたえ、あるものには樹々の果実を、あるものにはその根をあたえた。ほかの動物の肉を食物とす

1 プロメテウス(「予め考慮する者」の意)は人類に火を授けたことで有名な神。エピメテウス(「後から考慮する者」の意)はその弟。このプロタゴラスのプロメテウス説話の特色については「解説」二五四―二五六ページを見よ。

ることをゆるされた種族もある。そしてこの種族に対しては、少しの子供しか産むことをゆるさず、他方、これらの餌食となって減って行くものたちには、多産の能力を賦与して種族保存の途をはかったのである。

C さて、このエピメテウスはあまり賢明ではなかったので、うっかりしているうちに、もろもろの能力を動物たちのためにすっかり使いはたしてしまった。彼にはまだ人間の種族が、何の装備もあたえられないままで残されていたのである。彼はどうしたらよいかと、はたと当惑した。困っているところへ、プロメテウスが、分配を検査するためにやってきた。みると、ほかの動物は万事がぐあいよくいっているのに、人間だけは、はだかのままで、履くものもなく、敷くものもなく、武器もないままでいるではないか。一方、すでに定められた日も来て、人間もまた地の中から出て、日の光のもとへと行かなければならなくなっていた。

かくてプロメテウスは、人間のためにどのような保全の手段を見出してやったものか困りぬいたあげく、つい D にヘパイストス(1)とアテナ(2)のところから、技術的な知恵を火とともに盗み出して――というのは、火がなければ、誰も技術知を獲得したり有効に使用したりできないからである――そのうえでこれを人間に贈った。ところで、生活のための知恵のほうは、これによって人間の手にはいったわけであるが、しかし国家社会をなすための知恵はもたないままでいた。それはゼウスのところにあったからである。プロメテウスにはもはや、ゼウスのすまうアクロポリスの城砦にはいって行く余裕はなかったし、それに、ゼウスをまもる衛兵も、おそるべき者だった。E ただ彼は、アテナとヘパイストスが技術にいそしんでいた共同の仕事場へひそかに忍びこんで、ヘパイストスの火を使う技術と、アテナがもっていたそのほかの技術を盗み出し、これを人間にあたえたのである。このことか 322 ら、人間には生存の途がひらけたけれども、プロメテウスは、エピメテウスのおかげで、伝えられるところによ

ると、のちに窃盗(せっとう)の罪で告発されることになったというはなしである。

三

さて、人間には神の性格の一部分が分けあたえられたので、まず第一に、神に対するこの近しい関係によって、数ある動物たちのうちでただ人間のみが神を崇敬し、神々のために祭壇や聖像をもうけることを試みた。ついでさらに、すみやかに技術によって、音声に区切りをつけていろいろの言葉をつくったし、また家や着物や履きものや寝具、そして大地から生ずる食物などを発見したりした。

B これだけのものを自分のためにととのえていながら、人間は最初のうち、あちこちにばらばらに住んでいて、国家というものがなかった。そのために人間は、あらゆる点で獣(けもの)たちよりも力の弱い存在だったから、その餌食となってしだいに滅ぼされていった。ものを作る技術は、人間たちにとって、身を養うためには充分な助けとなったけれども、獣たちとの戦いのためには、充分な役には立たなかったのである。ほかでもない、彼らはまだ、国家社会をなすための(政治的)技術をもっていなかったし、戦いの技術はそれの一部をなすものなのだから。そこで人間たちは、互いに寄り集まり、国家をつくることによって身の安全をはかろうと求めた。だが、彼らは寄り集まるたびに、政治技術をもっていなかったため、互いに不正をはたらきあい、かくしてふたたびばらばらになって滅亡しかけていった。

---

1 鍛冶、工作の神。

2 知恵、技術の女神。

(322)C

これを見てゼウスは、われわれ人間の種族がやがてすっかり滅亡してしまうのではないかと心配し、ヘルメスをつかわして、人間たちに〈つつしみ〉と〈いましめ〉をもたらすことにした。この二つのものが国家の秩序をととのえ、友愛の心を結集するための絆となるようにとのはからいである。そこでヘルメスはゼウスに、どのような仕方で人間たちに〈いましめ〉と〈つつしみ〉とをあたえるべきかをたずねた——

『どうしたものでしょう、これもやはり、いろいろな技術の場合と同じ仕方で分配したほうがよいでしょうか。ほかの技術は、こういうふうに分配されています。つまり、一人の人間が医術をもっていれば、たくさんの素人のために間に合うというやり方でして、ほかのいろいろな専門家たちについても同様です。〈いましめ〉と〈つつしみ〉も、この方式にならって人間たちにあたえましょうか。それとも、すべての人間にのこらず、これを分配す

D

べきでしょうか』

『すべての人間にあたえて、誰でもがこれを分けもつようにしたほうがよい』とゼウスは答えた、『そうしないと、もしほかの技術と同じように、彼らのうちの少数の者だけがそれを分けもつだけなら、国家は成立しえないだろうから。さらにこれに加えて、〈つつしみ〉と〈いましめ〉をもつ能力のない者があれば、国家の病根として死刑に処するという法律を、私の名によって制定してもらいたい』

——じつにこのような次第で、ソクラテス、またこのような理由によって、他の国の人々もアテナイ人たちも、論じられる事柄が、大工なり、そのほかの制作技術なりにおける徳性にかかわるような場合には、ただ少数の者

E

だけが意見を述べることができると考え、この少数者以外の者が意見を述べても受け入れようとしないのである。

323 それはたしかに君の主張するとおりだが、私に言わせれば、けだし当然のことだといわねばならない。そして他方、人々の行なおうとする論議が、そのすべてが正義と節制を通じて行なわれなければならないような、国民としての徳性にかかわる場合には、彼らは誰の意見でも聞き入れるのであるが、これも当然のことである。ほかでもない、人々は、この徳性に関するかぎり、もともとあらゆる人間がそれを分けもっているべきであり、さもなければ国家は成り立たないと考えているのだから。――これがつまり、ソクラテス、君の指摘した事実のよってきたる理由なのだ。

しかしながら、君がだまされたと思うといけないから、ほんとうに人は誰でも、正義その他の国家社会をなすための徳性は、万人の分けもつところだと考えていることの証拠として、さらに次のことを心にとめてもらいたい。すなわち、ほかの徳性の場合にあっては、君の言うように、もし誰かが実際にはそうでないのに、自分がすぐれた笛吹きであるとか、あるいはほかの何らかの技術に関してすぐれているとか主張するならば、人々は嘲笑 B するか怒るかするだろうし、身内の者はその人のところへ行って、気がへんなのではないかといって叱りつけることだろう。ところが、正義をはじめとして、そのほか国家社会をなすための徳性においては、かりにある人が不正な人間であることを人々が承知していたとしても、もしその人が公衆の前で、自分で自分についてほんとうのことを言うならば、先の場合には節制と考えられていた、このほんとうのことを言うという態度は、ここでは狂気の沙汰とみなされるのである。そして、人は誰でも、実際にそうであろうがなかろうが、自分を正しい人間であると言わなければならない、そう主張しないような者は気違いだと、このように人々は言うのである。これ C はつまり、人間はひとりの例外もなく、必ずや何らかのかたちでこの徳を分けもっているはずであり、そうでな

ければ人間の仲間にははいらないと考えられているからにほかならない。

一三

さて、事柄がこの徳性にかかわるものであるかぎり、人々は当然誰の意見でも聞き入れる、それは万人がこの徳を分けもっていると考えられているからだ、という点については、私の見解は以上のとおりである。他方しかし、人々は、この徳が生まれつきのものでも、ひとりでにそなわるものでもなく、むしろ教えられることのできるものであり、この徳がそなわる人があるとすれば、それは意識的な心がけによるものだと考えているということ、このことの証明をつぎに君に対して試みなければならない。

D すなわち、お互いがもっている欠点が、生まれつきや偶然によるものであると人々が考えるような場合には、何びともそのような欠点の持ち主に対して、これを是正しようという意図のもとに、怒ったり、叱ったり、教えたり、懲らしめたりするようなことはしない。ただ気の毒だと思うだけである。たとえば、醜い顔だちの者や、矮小な者や、虚弱な者たちに向かって、何かいま言ったような態度に出ようとするほど愚かな人間が、どこにいるだろうか。思うにこれは、そのような容姿の美しさだとか醜さだとかいったことは、生まれつきや偶然によって人間にそなわるものだということを、人々はよく知っているからであろう。だがこれに対して、心がけや、躾や、教えの結果として人間にそなわると考えられるような美点に関しては、もし誰かがそういった美点をもたず

E に、その反対の欠点をもっているならば、この場合にこそおそらく、怒りや、懲らしめや、訓戒が向けられるであろう。不正も、不敬虔も、また一言にしていえば、すべて国家社会の一員としてもつべき徳性に反するところ

324

のものは、この種の悪のひとつなのである。この場合にあっては、まさしくすべての人がすべての人に対して怒ったり叱ったりするのであるが、このことは明らかに、そのような徳性が心がけと学習によって獲得できるという、人々の考えを示すものといわねばならぬ。

というのは、ソクラテス、不正な人々を懲らしめるということはそもそも何を意味するかを、君がもし考えてみる気になりさえすれば、世間では徳が人間の力で獲得できるものだと考えられているということが、おのずから君にわかるだろう。すなわち、何びとも不正をおかす者に対して、相手が不正をはたらいたという、ただそのことを念頭におき、そのことのために懲らしめるような者はいない。もっとも、けだもののように理不尽（りふじん）な復讐をしようとする者は別であるが――。道理をわきまえて懲らしめようとする者なら、過去になされた不正のゆえに報復するようなことはしない。一度なされたことは、取り返しがつかないだろうから。むしろその目的は未来にあり、懲らしめを受ける当人自身も、その懲罰を目にするほかの者も、二度とふたたび不正をくりかえさないようにするためなのである。そしてそう考えている以上、彼は徳というものを、教育可能のものと考えていることになる。とにかく、悪いことをやめさせようと思えばこそ、懲らしめをあたえるのであるから。

かくして個人的にせよ、公共の立場においてにせよ、いやしくもひとが報復を下すということをするかぎり、その人たちはすべて右のような見解をもっていることになる。しかるに、不正をはたらいたとみなされる者たちに報復を下し、懲らしめをあたえるということは、世に一般に行なわれているところであるし、君がその一員であるアテナイの人々のあいだではとくにそうである。したがって、以上の推論によれば、アテナイ人たちもまた、徳が人間の力で獲得できるものであり、教えられることのできるものであると考える人々に属することになる。

――君の国の人々が、国事に関しては、鍛冶屋の意見であろうが、靴屋の意見であろうが、これを聞き入れるのは当然であるということ、そして彼らが、徳を人に教えたり与えたりすることが可能であると考えているとD いうことについては、ソクラテス、これでぼくのつもりでは、充分に君に証明されたわけである。

一四

さて、ここにまだひとつの問題がのこっている。それは君が、すぐれた人物たちについて解釈に苦しんでいるところの難問であって、いったいぜんたいなぜすぐれた人物たちは、教師たちから習えるほかの事柄については、自分の息子に教育をあたえ、才能ある者にしながら、自分自身がすぐれた人物であるゆえんの、その肝心の徳性に関しては、息子たちをほかの者とくらべて何らすぐれた人間にしなかったのであろうか、という問題である。これについては、ソクラテス、もはや君に物語ではなく、まともな説明をあたえることにしよう。次のことを考えてみたまえ。――

いったい、いやしくも国家が成立するためには、必ずすべての国民が分けもたなければならないような、何かE 一つのものがあるだろうか、それともないだろうか？　君の行きあたっている先の問題の解決は、一にかかってほかならぬこの点にあるのである。すなわち、もしいま言ったような何か一つのものがあるとして、その一つのものとは、大工の技術でも、鍛冶屋の技術でも、陶工の技術でもなく、じつに正義と節制と敬虔であり、これを325 一言にしていえば、人間としてもつべき徳こそがそれであるとしよう。――もしこれこそが万人の分けもたなければならぬものであって、人間は誰でも、学んだり行なったりしようと思うことが何かある場合には、必ずこの

ものをもって行なわねばならず、それなしに行なってはならないようなものだとしよう。――そしてこの徳を分けもっていない者は、長幼男女を問わず、懲戒によって人間が改善されるまで、かつは教えかつは懲らしめ、もし懲らしめても教えても聞き入れぬ者があれば、癒しあたわざる病根とみなしてこれを国から追放するなり、死刑にするなりしなければならないとしよう。――もし事情がこのような条件のもとに考えられなければならぬものであるとするならば、そして、先に言った一つのものというのが、本来このような性格のものであるのに、もしすぐれた人物たちが、ほかの事柄については息子たちに教育をあたえながら、この肝心のものを教えないとするならば、考えてもみたまえ、すぐれた人物たちというのは、なんと不可解な人々ということになるだろうか。

B なぜならば、すでにわれわれが証明したように、一方において彼らは、個人としても公の立場でも、それを人に教えることが可能であると考えているのである。しかるに、それが教えられ育成されることのできるものであるにもかかわらず、いったい彼らは、それを知らなくても死をもって罰せられるはずのないようなほかの事柄については、息子たちにちゃんと教育をあたえておきながら、この重大事に関する教育をあたえないのであろうか。

C 後者の場合は、もし自分の子供たちが、それを学んで徳をそなえるように育成されていないようなことがあれば、子供たちが死刑や追放をもって罰せられるのみならず、死刑に加えて財産は没収され、いうなれば一挙に一家転覆の憂き目にあうのであるが、そのような事柄について、そもそも彼らは、息子たちに教育をあたえもしなければ、万全の配慮をはらおうともしないのであろうか？ ――いな、ソクラテス、彼らは当然それをしていると考えねばならぬ。

一五

すなわち、ごく幼少のころからはじめて、子供たちが生きているかぎり、彼らは実際に子供たちを教えたり訓戒をあたえたりしているのである。まず、ひとの言うことがわかるようになるとすぐに、乳母（うば）も、母親も、お守（も）D り役も、それに父親自身も、なんとかして子供ができるだけすぐれた者になるようにとつとめ、行ないについても言葉についても、そのひとつひとつに際して、これは正しくこれは正しくないとか、これは立派なことでこれはみっともないことだとか、これは敬虔なことでこれは不敬虔なことだとか、こういうことをしなさい、こういうことはしてはいけないとかいったようなことを、教えたり示したりしてやる。そして、すすんで言うことをきけばよし、そうでない場合には、ちょうどひねくれ曲っている木をまっすぐに直すように、おどかしたり叩（たた）いたりして矯正（きょうせい）するのである。

E つぎに彼らは、子供たちを先生のところにやるのであるが、その場合、読み書きや音楽よりは、むしろずっと子供たちの品行方正のほうをよく気をつけてみてくれるように、先生にたのむのである。先生たちのほうでも、よくこのことに気をつける。そして、ちょうど先にひとの言うことがわかるようになったと同じように、子供たちが今度はさらに読み書きができるようになり、書かれたものを理解しようとするころになると、彼らにすぐれ 326 た詩人たちの作品を教室であてがって読ませ、それらを暗記するようにいいつける。その中には数多くの訓戒がふくまれているし、むかしのすぐれた人物たちを描写し称揚し讃美した言葉が数多くある。こうして、子供たちがそれに讃嘆しながら見ならい、そのような人物になろうとあこがれるようにしむけるのである。

他方また、竪琴の先生たちも同じようなことをまた別のやり方で行ない、子供たちの克己心によく気をつけて、道をふみはずした人間にならないように心がける。そして、これらに加えて、子供たちが竪琴の弾奏をおぼえる B と、今度はまた別のすぐれた詩人——抒情詩人——の作品をとりあげ、これを竪琴の曲に乗せて教え、そのリズムと調べが子供たちの魂に同化するようにしむける。これすなわち、彼らが上品な人間となり、よきリズムとよき調べとを身につけて、言行ともにすぐれた者となるためにほかならない。なぜならば、すべて人間の生というものには、よきリズムとよき調べとが必要なのであるから。

さらに、これらの教育に加えて、人々は子供たちを体育の先生のもとにやる。それは、子供たちがよりすぐれ C た肉体をもつことによって、すぐれた精神に奉仕できるようになるためであり、そして戦争にのぞんでも、そのほかの行為においても、肉体が劣悪であるために、余儀なく怯懦(きょうだ)なふるまいをしなければならないというようなことのないためである。

こういったさまざまのかたちの教育は、最も能力のある人々がこれを最も熱心に行ない、そして最も能力のある人々とは、最も富める人々にほかならない。だからそういう人々の子息たちは、最も早い年齢のときから先生のもとにかよいはじめ、最も遅くその手からはなれるのである。

さて、子供たちが先生の手をはなれると、彼らが自分の好き勝手にでたらめなふるまいをしないように、今度 D は国家が、法律を学びその規範に従って生きることを要求する。それはちょうど文字を教える先生たちが、まだ字をうまく書けない子供たちのためにしてやることとまったく同じであって、先生はそういう子供たちのために、尖筆で文字の輪郭の線を下書きしてやり、そのうえで書き板をわたし、その線をたどって書くようにいいつける

E

のであるが、国家もまたこれと同じように、むかしのすぐれた立法者たちがつくり出した法律を、規範として下書きしてやり、支配するにも支配をうけるにも、これにのっとるように命じるのである。そして、この規範から道をふみはずす者があれば、懲らしめをあたえるのであるが、この懲らしめに対しては、君たちのところでも、ほかの多くの国においても、〈いましめ〉が道を正すという意味で、〝矯正(きょうせい)〟(1)という名前がつけられている。

かくして、人間の徳性については、個人的にも公共的にも、じつにこれだけ多くの配慮がなされているのであるが、それなのに君は、ソクラテス、徳が教えられることのできるものであるかどうかをいぶかり、それについて思い迷うのかね？　いや、不思議がる必要などすこしもないのだ。むしろ、もし徳が教えられることのできないものだとしたら、そのほうがよほど不思議だといわねばならないだろう。

一六

327

それなら、すぐれた人物を父親にもつ息子たちが、しばしばつまらぬ人間になる場合が多いのはなぜだろうか。その点を今度は理解したまえ。事実、それはいっこうに不思議なことではないのだから。すくなくとも、この私が先に述べたことが真実であって、国家が存立するためには、何びともこの徳という事柄に関して素人(しろうと)であってはならないとするならば、そうなのだ。なぜなら、もし事情が私の言うとおりのものだとすれば——じっさいこれ以上たしかなことはないのだが——、ひとが自分の仕事にしたり習ったりするいろいろなもののなかから、何でもいいから別の例をひとつ選んで考えてみたまえ。

たとえば、かりにわれわれのすべてが、それぞれの能力に応じて笛を吹く技術を身につけていなければ国家が

存立しえないとして、個人的にも公共的にも、万人が万人に笛を吹くことを教え、うまく吹けない者があればこれをとがめて、そうする労を惜しまないというような場合を考えてみよう――ちょうど実際にいま、正しいことや法にかなったことについては、ほかの専門的技術に関する場合とちがって、けちくさくかまえて他人にそれを教えなかったり、かくしたりする者は、ひとりもいないのと同じように。けだしこれは、お互いの正義や徳は結局われわれ自身の得になるからにほかならないのであって、そのゆえにこそ、すべての者が誰に対しても、正しい事柄や法にかなったことをすすんで熱心に語り、かつ教えるわけなのであるが。――さて、笛を吹くことにおいてもちょうどこれと同じように、われわれがお互いに教え合うことに心の底から熱心になり、これを惜しまないとしたならば、どうだね、ソクラテス、その場合、すぐれた笛吹きの息子はへたな笛吹きの息子よりも、いくらかでもいっそうすぐれた笛吹きになることが多いと君は思うかね？　私はそうは思わない。むしろ、誰の息子であろうと、笛を吹くための素質に最も恵まれているならば、そういう子供こそが長じてから名をあげ、素質がなければ名もない者となるというのが実際であろう。そして、すぐれた笛吹きの子が結局へたな笛吹きになるということも、へたな笛吹きの子がすぐれた笛吹きになるということも、ともにしばしば起ることであろう。しかしとにかく、笛吹きであるという点にかけては、彼らはすべて、笛を吹くことについて全然何も知らない素人とくらべれば、有能な笛吹きであることにまちがいないのだ。

1　この言葉（エウテューナ）は、特殊な意味としては、任期を終えた執政官（アルコーン）に対して行なわれた、在任中の仕事の是非を公に吟味する制度を意味する。

いまわれわれが当面している問題についても、これと同じように君は考えなければならない。すなわち、法律の支配する人間社会の中で育てられた者たちのうちで、最も不正な者だと君に見えるような人間であっても、もしその人を、教育も法廷も法律もなく、徳をつねに心がけるようにしむけるいかなる強制力もあたえられていない一種の野蛮人たちとくらべて、判定しなければならないとすれば、なお正義の人であり、この事柄の専門家であるといわねばならぬ。ちょうどそのような野蛮人を、作家のペレクラテス[1]が去年、レーナイオン[2]において舞台に上演してみせたわけだが、まことにもし君が、あの劇のコロスの中の人間ぎらいの人々のように、そういう野蛮人たちのなかに身を置いていたとしたら、さぞかし君は、エウリュバトスやプリュノンダス[3]に出会っても大歓迎するだろうし、われわれのこの社会の人々がもつ〝悪徳〟をあこがれ慕って、号泣することだろう。それなのに君はいま、ぜいたくを言っているのだ、ソクラテス。ほかでもない、あらゆる人々が事実上、それぞれの能力に応じて徳を教えているので、とくに誰かが徳の教師であるようには君に見えないからなのだ。それはちょうど君が、ギリシア語をしゃべることを教えるのは誰なのかをさがしてみても、誰ひとりそういう特定の教師はみつからないのと同じことだ。同様にしてまた、私は思うのだが、われわれのところの手職人の息子たちにその当の専門の技術を教えることのできる者は誰か、そういう教師を君がさがし求めるとしてみたまえ。むろんこの息子たちは専門の技術について、父親やその同業の友人たちから学びうるかぎりのものは、すでに父親からすっかり学んでしまっているわけであるが、そういう息子たちに対して、さらにそれ以上のことを教えうる者は誰かをさがし求めるとしたならば、思うに、ソクラテス、容易なことでは彼らの先生となる者はみつからないであろう。ずぶの素人相手の教師がすぐにみつかるのとは、わけがちがうのだ。徳やそのほかすべての事柄を教える者につ

B いても、これと同じことであって、もしひとを徳へみちびくことにかけて、たとえすこしでもわれわれ一般よりすぐれた者があれば、それで満足すべきなのである。

かくいう私も、みずから信ずるところでは、そういう者のひとりなのであって、ひとがすぐれて立派な人間になるのを助けることにかけては、他の人々の及ぶところではなく、私の要求する報酬の値うちだけのもの、否むしろそれ以上のものをあたえているつもりである。これは、私から学んだ者自身も認めるところなのだ。だからまた、報酬をとりたてる方法についても、私は次のように決めている。すなわち、誰かが私の授業をうけたならば、もしその人が望むなら、私の請求分だけの金額をそのままそっくり支払ってもよいし、またもしその気にな C れないなら、その人は神社に参って、ちょうどそれが自分の学んだものの値うちであると、神明に誓ってその人が決めただけの額を納めればよいのである。

以上私は、ソクラテス、物語のかたちでも議論のかたちでも、徳が教えられうるものであり、また事実アテナイ人たちはまさしくそのように考えているということ、そして、すぐれた人物を父親にもつ息子たちがつまらぬ人間になったり、つまらぬ人間の息子たちがすぐれた人物になったりするのは、いっこうに不思議なことではないということを、君に説明した。じっさい、あのポリュクレイトス(4)の息子たちにしても、ここにいるパラロスや

1 アテナイの喜劇作家。前四三八年に初優勝した。

2 アテナイのアクロポリス東南斜面にあるディオニュソスに捧げられた聖地。一月末ころに行なわれたその祭りには劇の競演がなされた。

3 両者とも悪者の代表名としてしばしば他の文献の中に語られている。

4 有名な彫刻家(311C参照)。

(328)

クサンティッポス(1)と同じ年ごろにあたるわけだが、彼らとてもその父親にくらべてはやはり不肖の子ではないか。D またそのほかの職人たちの子で同様の例は、ほかにもいろいろとあるのだ。しかしこのパラロスとクサンティッポスに対しては、まだそういう非難は当らない。この人たちにはまだ期待できるのだ。若いのだから」

一七

プロタゴラスは、質量ともにこれだけの堂々たる弁説をふるってみせたうえで、話すのをやめた。ぼくはといえば、かなりしばらくの間は、なおすっかり魅せられたまま、彼がまだ何か話すのかと思って、それを聞こうと熱心になりながら、じっと彼をみつめていた。が、やがて彼の話はほんとうにもう終っているのだと気がついたので、やっとのことでいわば自分自身をかき集めるようにして気をとり直したのち、ヒッポクラテスをふりかえって言った。

「アポロドロスの子息よ、君がぼくをここに来るようにさそってくれたことに、ぼくはどれほど感謝している E ことだろう。プロタゴラスからいまのような話を聞くことができて、ほんとうによかったと思うよ。なぜかというと、ぼくはこれまで、すぐれた人物たちのもつ徳性というものは、人間がいくら心がけてもだめなものだと考えていたけれども、いまはしかし、それが可能だと確信するにいたったからだ。ただぼくには、ほんのちょっとしたことがひっかかるのだが、むろんプロタゴラスは、そんなことはやすやすと説明を補ってくれることだろう。なにしろこれだけたくさんのことを、よく教えてくれたことでもあるしね。じっさい、もしひとが同じこういっ 329 た問題について、誰か政治演説家のひとりに教えを乞うならば、おそらくはいまと同じような話も、ペリクレス

からなり、誰かほかの雄弁家からなり、聞くことができるかもしれない。けれども、そういった誰かにさらに何か質問をしてみると、彼らはちょうど書物と同じように、何も答えることもできなければ、自分のほうから問をかけることもできない。もし誰かが、言われたことについて何かちょっとした質問でもするならば、まるで銅の器が、一度たたかれると長いあいだ鳴りひびいて、ひとが手で押えないかぎり鳴りつづけているように、弁論家たちも、ちょっと質問を受けると、たちまち一瀉千里の長広舌をくりひろげるものだ。だがこのプロタゴラスはちがう。この人は、げんに事実そのものが証明しているように、長い立派な演説をすることもできるが、他方ではまた、質問を受けて手みじかに答えたり、問をかけてから相手の答えるのを待って、それを聞き入れることもできる人だ。こういう能力をそなえた人は、そうざらにいるものではない。

B

──さて、プロタゴラス、あるちょっとした疑問さえみたされれば、私はすっかり了解できるのですが、どうかそのために次の質問に答えてください。あなたは、徳が教えられうるものであると主張されます。そして実際、いやしくもこの世に、私がその言葉を信じることのできるような人がいるとすれば、あなたこそそのような人でしょう。ただ、お話を聞いて私が不思議に思ったことがありますので、私の心にのこるこの空隙をみたしていただければと思うのです。

C

それは何かといいますと、あなたは、ゼウスが人間たちに〈正義〉(いましめ)と〈つつしみ〉をおくったとおっしゃいましたが、他方ではまた、しばしばお話の中で、正義や節制(分別)や敬虔やすべてこれらのものは、一括し

1 ペリクレスの子。315A を見よ。

て徳というある一つのものであるということが言われました。そこで、私が厳密な理論的説明をしていただきたいのはちょうどその点なのですが、いったい、徳というものはある一つのものでありながら、他方しかし、それを構成するさまざまの部分として、正義とか節制(分別)とか敬虔とかいったものが、別々に分れているのでしょ

D

うか、それとも、私がいまあげたこれらすべてのものは、全く同一のものにつけられたさまざまの名前にすぎないのでしょうか？　この点を私は、もっと知りたいと思うのです」

一八

プロタゴラスは言った、

「いや、ソクラテス、そんなことなら、答えるのはわけはない。徳とは一つのものであって、君がたずねているものは、それの部分をなすものなのだ」

「その部分というのは、どちらの意味なのでしょうか」とぼくはたずねた、「たとえば、口とか鼻とか目とか耳とかいった顔の部分が部分であるという意味なのでしょうか。それとも、金塊の部分のように、大きいか小さいかという違いのほかは、部分どうしをくらべても、部分と全体をくらべても、互いにすこしも異ならないようなものなのでしょうか」

E

「それは前者のような意味だと私には思えるね、ソクラテス。ちょうど顔のいろいろな部分と顔全体との関係と同じようなぐあいなのだ」

「では」とぼくは言った、「人間がこれらの徳の部分を分けもつ場合にも、ある人々はこれを、ある人々はこれ

をというように、それぞれ別のものをもつのでしょうか。それとも、ひとがその一つを身につければ、それにともなって必ず全部をいっしょにもつことになるのでしょうか」
「いや、けっしてそんなことはない」と彼は答えた、「勇気はあるが不正な人間だという者もたくさんいるし、他方また、正義の人ではあるが知恵がないという者もたくさんいるのだから」

330

「すると、それらもまた徳の部分をなすものだというわけですね」とぼくは言った、「知恵と勇気も」
「むろんそうだとも」と彼は言った、「とくに知恵は、数ある徳の部分のなかでも最も重要なものだ」
「それらの部分のひとつひとつは」とぼくはたずねた、「それぞれ互いに別のものなのですね?」
「そう」
「するとそれらの部分のひとつひとつは、その機能においても、はたしてそれぞれに固有のものをもっているのでしょうか。たとえば顔の諸部分を考えてみると、目は耳と同じような性格のものではなく、それがもっている機能も同じではない。さらにほかのどの部分をとってみても、その機能においてもその他の点においても、けっして他の部分と同じような性格のものとは言えないわけなのですが、徳の部分もやはりこれと同様に、それ自体としても、それがもっている機能も、それぞれの部分は互いに他と通じるところがないようなものなのでしょうか。――あげられた例にどこまでも即して考えるとすれば、あらためておたずねするまでもなく、それはそのとおりだということになるでしょうか」

B

「そのとおりだとも、ソクラテス」と彼は答えた。
そこでぼくは言った、

「そうすると、徳の部分をなすものがいろいろあるなかで、知恵と同じような性格のものは知恵以外にはないということになりますね。さらに、正義と同じような性格のものも、勇気と同じような性格のものも、節制(分別)と同じような性格のものも、敬虔と同じような性格のものも、それぞれその当のもの以外にはないということになります」

「そうだ」

C 「さあそれなら」とぼくはつづけた、「それらの徳のひとつひとつの部分が、それぞれどのような性格のものであるかを、いっしょに考えてみることにしましょう。まず手はじめに、こういうことを考えてみることにしましょう。――正義というものは、あるひとつの何ものかでしょうか、それとも、何ものでもないようなものなのでしょうか。私には何ものかであると思えるのですが、あなたはいかがですか?」

「私もそう思う」

「ではどうでしょう、もし誰かが、私とあなたにこうたずねたとしたら? 『プロタゴラスとソクラテス、ひとつ君たちに答えてもらいたいのだが、君たちがいま名をあげたこの正義というひとつのものは、それ自体正しいものなのかね、それとも不正なものなのかね』とね。――私なら、正しいものだとその男に答えるでしょうが、あなたの判定はいかがですか。私と同じですか、違いますか?」

「同じだ」と彼は答えた。

D 「だから、正義とは正しい性格のものだと、私はその質問者に答えて言うでしょう。あなたもですか?」

「そう」と彼。

「ではつぎに、その人が私たちに向かって、『では敬虔というものも、君たちは認めるかね』とたずねたとしたら、私たちは肯定するだろうと思いますが」

「そう」と彼。

「『それがあるひとつの何ものかであることも認めるかね』ときかれたら、肯定するでしょうね？」

これにもまた彼は賛成した。

「『では君たちは、その敬虔というものそれ自体を、本来敬虔な性格のものだと主張するかね、それとも、不敬虔な性格のものだと主張するかね』――こうたずねられたとしたら、私としては、この質問に憤慨してこう言うでしょう。『言葉をつつしみたまえ、君、もしも敬虔そのものが敬虔なものでないとしたら、何かほかのものが敬

E

虔でありうるわけがないではないか』とね。あなたはいかがですか。このように答えませんか？」

「たしかにそう答えるだろう」と彼は言った。

一九

「ではその人がつぎに、こう私たちにたずねたとします、『いったい君たちは、すこし前に何と言っていた？ぼくは、君たちの言葉を聞き違えたのだろうか。ぼくのつもりでは、君たちは徳の部分相互の関係を説明して、そのひとつの部分は他の部分と同じような性格のものではないと、こう主張していたように思えたのだが』――私としては、こう答えるでしょう、『ほかの点については、たしかに君の聞いたとおりで間違いないけれども、ただ、このぼくもまたそういう説に加担したと君が思っているのは、君の聞き違いだね。そのように答えたのはこ

のプロタゴラスなのであって、ぼくはただそれについて質問していただけなのだから』

そこで彼がこう言ったとします、『ほんとうですか、この男の言うことは、プロタゴラス？ 徳の部分をなすひとつひとつのものが、互いに同じような性格のものではないと主張しているのは、あなたなのですか。これはあなたの説なのですか？』――この人にあなたは何と答えますか」

「そうだと言わないわけにはいくまい、ソクラテス」と彼は言った。

「では、プロタゴラス、いまのことを承認したとすると、さらに次のようにたずねられたときに、何と私たちは答えたものでしょう。『そうすると、敬虔とは、正しい性格のものではないということになるのだね。また正義とは、敬虔な性格のものではなくて、敬虔ではないような性格のものなのだね。そして、敬虔とは正しくない B ような性格のもの、不正な性格のものであり、逆に正義は不敬虔な性格のものなのだね』――何と私たちは答えたものでしょう？

私自身としては、もし私自身のために答えるとすれば、正義が敬虔な性格のものであることと、敬虔が正しい性格のものであることとを、ともに私の説として主張するでしょう。そしてあなたのためにも、もしゆるしていただけるなら、同じくそう答えたいところです。なぜなら、正しさと敬虔とは同じものであるか、もしくは最も相似たものだからであり、また何よりも、正義は敬虔と、敬虔は正義と、ともに同じような性格のものだからです。さあ、こう答えることにさしつかえがあるか、それともあなたもやはり同じ意見か、考えてみてください」

C 「私にはどうも、ソクラテス」と彼は答えた、「正義は敬虔なものであり、敬虔は正しいものであるということをそのまま承認できるほど、事柄が単純なものとはけっして思えないね。そこにはやはり、何らかの差異があ

るように思われる。しかし」と彼は言った、「そんなことはどちらでもよいではないか。もし君がそうしたいのなら、正義は敬虔なものであり、かつはまた、敬虔は正しいものであるということにしておこう」

「いや、それはいけません」とぼくは言った、「私が求めているのは、そんな、『もし君がそうしたいのなら』とか、『もし君にそう思われるなら』とか言ったことが吟味されることではなく、私とあなた自身が吟味されることなのです。私がとくにこのように『私とあなたが』と言うのは、そうやって『もし』という言い方が議論から排除されるならば、議論は最もよく吟味されるだろうと思うからにほかなりません」

D

「よろしい、それならいかにも」と彼は言った、「正義は敬虔と似た点がないでもない。なぜなら、およそどのようなものをどのようなものとくらべてみても、とにかく何らかの点では、似ているところがあるのだから。事実、ある観点をもってすれば、白は黒と似ているし、硬いものは軟らかいものに似ているし、そのほか、互いに最も正反対と思われているもののすべてがそうだ。そして、さっきわれわれが、別個の機能をもち、互いに同じ性格のものではないと主張していた顔の諸部分にしても、類似点や性格の共通点がまったく何もないというわけのものではないのだ。だから、その意味でなら、これら顔の部分が全部互いに似ているということだって、もし君がそうしようと思えば、証明できるだろう。しかしながら、すこしでも似たところのあるものを、その類似点がほんの小さなものである場合でも、ただちにこれを『似ている』と呼ぶことは、すこしでも似ていないところのあるものを『似ていない』と呼ぶのと同様、けっして正当ではないのである」

E

ぼくは驚いて、彼に向かって言った、

「いったいあなたには、正しいものと敬虔なものとの相互の関係が、互いにほんの小さな類似点をもつという

ような、そんな程度のものだと思えるのですか？」
「必ずしも全面的にそうだとは思わないが」と彼は言った、「そうかといって他方、君がそう思っているらしいような関係のものとも思えないね」
「結構です」とぼくは言った、「どうやらあなたは、この議論をうるさがっていらっしゃる様子ですから、この問題はこれで打ち切って、あなたのおっしゃったことのなかから、別に次のような点をとりあげて考察することにしましょう。

二〇

あなたは、無分別と呼ばれるものを認めますか」
彼は肯定した。
「この無分別というものに対して、知恵はちょうど正反対のものではありませんか」
「たしかにそうだろう」と彼。
「ところで、人間が道をあやまらずに、かつ身のためになるようにふるまうとき、そういう人々は、そのような身の処し方において、分別(節制)をわきまえているとお考えですか、それとも逆でしょうか」
「分別をわきまえていると思う」と彼。
「彼らが分別(節制)をわきまえているのは、分別心(節制)によるのではありませんか」
「それは必然のことだ」

「では、道をあやまったふるまいをする人々は、そのような身の処し方において、無分別なふるまいをするのであり、分別（節制）をわきまえていないのではありませんか」

「私もそう思う」と彼。

「したがって、無分別なふるまいは、分別（節制）をわきまえたふるまいの反対ですね」

彼は肯定した。

「無分別なふるまいは無分別によって行なわれ、分別（節制）あるふるまいは分別（節制）によって行なわれるのではありませんか」

彼は同意した。

「では、強さによって何かが行なわれるならば、その行為は強いふるまい方となり、弱さによる行為は弱々しいふるまい方となるのではありませんか」

彼も同意見だった。

「また、何かが速さとともに行なわれれば速く行なわれ、遅さとともに行なわれれば遅くなるのですね」

c

彼は肯定した。

「また、同じような行為を行なわしめるのは同じものであり、行なわれ方が反対なら、反対のものによって行なわれるのですね」

彼は賛成した。

「さあそれでは」とぼくは言った、「美というものがありますね」

彼は認めた。

「それに対しては、醜以外に何か反対のものがありますか」

「ない」

「ではさらに、善というものがありますね」

「ある」

「それに対しては、悪以外に何か反対のものがありますか」

「ない」

「ではさらに、声の高さというものがありますね」

彼は肯定した。

「それに対しては、声の低さ以外に何か反対のものがありますか」

彼はないと言った。

「このようにして」とぼくは言った、「いろいろの相反するものにおいては、一つのものに対応する反対物はそれぞれ一つあるだけであって、たくさんはないのではありませんか」

彼は同意した。

D 「さあ、それではここで」とぼくは言った、「以上私たちによって同意された事柄を、ふりかえって考えてみましょう。——私たちは、一つのものには一つしか反対のものがなく、たくさんはないということに同意しましたね」

「同意した」

「他方、反対の仕方で行なわれる行為は、反対のものによって行なわれるのでしたね」

彼は肯定した。

「しかるに私たちは、無分別な行為は分別(節制)ある行為と反対の仕方で行なわれるのだということに、同意しましたね」

彼は肯定した。

「そして、分別(節制)あるふるまいをなさしめるものは分別(節制)であり、無分別なふるまい方をなさしめるものは無分別だということも」

彼は認めた。

E

「では、この二つの行為のあり方は反対のものである以上、それをなさしめるものは互いに反対のものだということになるのではありませんか」

「そうだ」

「しかるに、一方の行為をなさしめるものは分別(節制)であり、他方の場合は無分別ですね」

「そうだ」

「それは反対の仕方ですね」

「たしかに」

「それぞれの行為をなさしめるものは、互いに反対のものですね」

「そう」

「してみると、無分別は分別(節制)と反対のものですね」

「そうだろう」

「ところで、覚えていらっしゃいますか、無分別は知恵と反対のものだということが、先に私たちによって同意されましたね」

彼はそれをみとめた。

「しかるに、一つのものにはただ一つしか反対のものがないのでしたね」

「そのとおりだ」

333

「そうすると、プロタゴラス、私たちはどちらの主張を取り消したらよいのでしょうか。一つのものにはただ一つしか反対のものがないという説のほうでしょうか。それとも、もうひとつの説、知恵と分別(節制)とはいずれも徳の部分をなすものでありながら、別個のものであり、そしてただ別個のものというだけでなく、ちょうどいろいろの顔の部分と同じように、それ自体としてみても、その機能からいっても、互いに似ても似つかぬものだという説のほうでしょうか。さあ、どちらを取り消したものでしょう? なにしろ、この二つの説がいっしょにとなえられるということになると、音楽としてみてもあまりほめられたものではありませんからね。互いに声も合わないし調べも合わないのですから。実際、どうしてこの二つの説の声が合うはずがありましょうか——い B やしくも一方では、一つのものには必ず一つしか反対のものがなく、それ以上あってはならないということなのに、片方では、無分別という一つのものに対して、知恵とならんで、さらに分別(節制)もまた反対のものである

ことが明らかにされているような始末ではね。そうでしょう、プロタゴラス？」とぼくは言った、「それとも、もっと違ったふうに考えるべきなのでしょうか？」
彼はたいへん不承不承に、私の言うことに同意した。
「そうすると、分別（節制）と知恵とは一つのものだということになるのではないでしょうか。そして、さっきはさっきでまた、正義と敬虔とが、ほとんど一つのものといってもよいようなものであることが、私たちに明らかになったのでした。
さあそれでは」とぼくはつづけた、「プロタゴラス、勇気をくじくことなく、残された問題に対しても、徹底的C考察を加えようではありませんか。――あなたは、不正なことをする人間が、不正を行なうというその点において、分別（節制）があると思いますか」
「私としては、ソクラテス」と彼は言った、「それに同意することを恥じるね。もっとも、世間にはそういう主張をする者がたくさんいるけれども」
「では、私はどちらに向かって語りかけるべきでしょうか」とぼくは言った、「そういう説をなす者たちですか、それともあなたですか？」
「君にその気があるなら」と彼は言った、「まずこの多くの人々の説を相手に論じたらよいだろう」
「しかしまあ、それはどちらでも私にとっては同じことです。あなたさえちゃんと答えてくださるなら、それがあなたの御見解だろうとそうでなかろうともですね。私が吟味するのは、何よりも言説そのものですけれども、しかしそうすることによって、おそらく、質問するほうのこの私も、答えるほうのあなたも、ともに吟味を受け

る結果になることでしょうから」

二二

D

はじめプロタゴラスは、われわれに対して上品ぶった様子を見せていた。つまり彼の申し立てるところでは、われわれが取りあげようとしている説が不愉快なものだというわけなのだ。しかしやがて、私の問に答えることを承諾した。

「さあそれでは」とぼくは言った、「最初のところから私に答えてくださいませんか。——あなたは、不正を行ないながら分別(節制)のあるような人々がいると思われますか」

「いることにしておこう」と彼。

「分別(節制)があるというのは、よく思慮をめぐらすという意味ですね」

彼は肯定した。

「そして、よく思慮をめぐらすというのは、不正を行なうことにおいて、よく身のためをはかるという意味ですね」

「そうだとしておこう」と彼。

「それは」とぼくは言った、「不正行為がうまくいく場合のことでしょうか、まずいことになる場合でしょうか」

「うまくいく場合だ」

「あなたが『善い』と呼ぶところのものが、いろいろありますね」
「ある」
「そもそも」とぼくは言った、「人間にとって有益なものが、善いものなのではありませんか」

E

「そうだとも、ゼウスに誓って」と彼は答えた、「のみならずこの私は、たとえ人間にとって有益でなくても、善いものと呼ぶのだ」
ぼくは、プロタゴラスがもうだいぶ気を荒立てて闘争心をおこし、喧嘩腰になって答えようとしているのを感じた。そういう彼の様子を見てとったので、ぼくは気をつけて、おだやかにたずねることにした。

334

「あなたがそうおっしゃるのは、プロタゴラス」とぼくは言った、「人間の誰にとっても有益でないようなもの、という意味ですか。それとも、全然有益という性格すらないようなもの、という意味ですか。後者のようなものでも、あなたは『善いもの』と呼ばれるのでしょうか?」
「いや、けっしてそうではない」と彼は答えた、「しかしながら、この私の知悉(ちしつ)するところによれば、人間にとっては有害な〔しかし人間以外のものには有益な〕ものは数多い。食物しかり、飲物しかり、薬もまたしかり、そのほか枚挙にいとまがないが、他方しかし、有益なものもあるのである。さらに、人間にとっては益でも害でもいずれでもないが、馬にとってはそうであるものもあり、ただ牛にとってのみ、また犬にとってのみそうであるものもある。さらには、これらのいずれにとってもそうではないが、樹木にとってはそうだというものもある。

B

さらに樹木といっても、その根には善いが芽には悪いというものもある。たとえば肥料なども、およそいかなる植物にせよ、その根に施すときは善きものとなるが、若芽や若枝にふりかけるならば、すっかり枯らしてしまう

であろう。またオリーブ油にしても、すべての植物に大害あり、人間以外の他の動物の毛をいためることこれにすぎるものはないのであるが、しかし人間の毛髪にも身体の他の部分に対しても有益な効果をもつ。善というものの複雑にして多種多様なること、かくのごときであるから、この最後の例においても、身体の外面に対しては、

C 油は人間にとって善きものであるが、身体の内部に対しては、同じこのものが大害をおよぼすといったぐあいなのである。このゆえにすべての医者は、身体の虚弱な人々に対して、摂取しようとする食物の中に能うるかぎり少量——食物と料理の嗅覚的なむかつきを消す程度だけ用いることをゆるす以外には、オリーブ油の使用を禁止するのである」

二三

彼がこのように語り終えると、居合わせた面々は、見事な弁舌とばかりにどよめきの声をあげた。そこでぼくは言った、

「プロタゴラス、どうも私は、あまりもの覚えのよくない人間でして、ひとに長い話をされると、何の話だっ

D たか忘れてしまうのです。ですから、かりに私が耳の遠い男だったとしたら、きっとあなたは、私と話し合うためには、ほかの人に話しかけるときよりも大きな声を出さなければならないとお考えでしょうが、まあちょうどそれと同じように、いまの場合も、あなたの相手は忘れっぽい人間なのですから、もし私があなたについて行くべきだとしたら、私のために答を切りつめて、もっと短くしていただけませんか」

「君が私に短く答えてくれというのは、どういう意味でなのかね。どうしても必要な長さよりも、もっと短く

答えなければいけないのかね？」

「いいえ、けっして」とぼくは言った。

「必要なだけ答えればよいのだね」と彼。

「ええ」とぼく。

E

「そうすると、これだけは答えなければならぬと私に思われる程度を答えるべきなのかね、それとも、君にそう思われるだけ答えるべきなのかね？」

「とにかく私の聞くところによりますと」とぼくは言った、「あなたという方は、同じ事柄を扱いながら、その気になれば、けっして言葉の尽きるときを知らないほど長い弁論を展開することもできるし、また他方では、誰もあなたより短く話せないくらいに短い話をすることもできる、それもあなた自身がそうするだけでなく、他人にその能力を授けることもできる、という話です。それでしたら、もしこの私を相手に話し合うおつもりなら、

335

あとのほうのやり方、短い話し方を私に対して適用していただきたいのです」

「ソクラテス」と彼は言った、「私はすでにこれまで、多くの人々と言論をたたかわしてきたものだが、もし君がいま命じているようなことをして、討論相手から言われるがままのやり方で言論のやりとりをしていたとしたら、私は誰に対しても優位に立つことはできなかっただろうし、プロタゴラスの名がギリシア人の間にひろまることもなかっただろう」

B

そこでぼくは——彼が自分でも自分の先のいろいろの答が気に入っていないこと、できれば答え手となって対話するのを避けようとしていることがわかったので——もはやこの場にとどまってつきあいをつづけるのはわが

事にあらずと考えて、こう言った。

「いや、プロタゴラス、私としましても、あなたの意に反してまで私たちの話し合いをつづけようと、しつこくのぞんでいるわけではありません。あなたが私にもついて行けるような対話の仕方をする気になってくださったならば、そのときに私は、あなたと対話することにしましょう。なぜなら、あなたは、あなたについて一般に言われているように、またあなた自身も主張されるように、長い話し方でも短い話し方でも、どちらのやり方でも話し合いをすることができるのですが——知者のあなたのことですからね——、私のほうは、この長い話し方

C

というものには無能力なのですから。もっとも、その能力をもちたいのはやまやまですが。——いや、話し合いが成立するためには、両方の能力を身につけていらっしゃるあなたのほうが、譲歩してくださるべきだったのです。しかし、現にあなたはその気がないのですし、私にもちょっと用事があって、このままおそばで長いお話をうかがっているわけにはいかないでしょうから——私はあるところへ行かなければならないので——、これでおいとまいたしましょう。この長いお話のほうもあなたから聞くことができたら、きっと楽しかったことでしょうけれども」

D

こう言いながらぼくは、出て行くつもりで立ちあがりかけた。するとカリアスが、立ちあがろうとするぼくの手を右手でおさえ、左手でぼくのこの上着をつかまえて言った。

「行かせてなるものか、ソクラテス。君が行ってしまえば、ぼくたちはこういう談論をこのままつづけることができなくなるではないか。お願いだから、ぼくたちのところにいてくれたまえ。ぼくとしては、君とプロタゴラスが談論をとりかわしているのを聞くくらい楽しいことは、誰からも聞くことができないだろうからね。さあ、

ぼくたちみんなを満足させてくれたまえ」

そこでぼくは次のように言った。そのときにはもう、出て行くつもりですっかり立ちあがっていた。

「ヒッポニコスの息子よ、ぼくはつねづねから君の知識欲に感心している者だが、いまもまたそれをたたえ、かつ愛することに変りはない。だから、もし君のたのみがぼくにできることだったら、君を満足させてあげたいのはやまやまなのだ。しかし実際問題として、君のたのみというのは、言ってみればまあ、あのヒメラの競走選手クリソン(1)が全盛期のときに、彼について走れとぼくに要求したり、あるいは、長距離選手や一日がかりの競走の選手の誰かと競走して、おくれぬようについて行けとたのむようなものだ。ぼくとしては、こう君に言いたいね——君にたのまれるよりも前に、ずっとぼく自身のほうが、そういう人たちが走るのについて行くことを自分自身に要求しているのだよ、と。だがそれもせんかたないのぞみ、ぼくにはその能力がないのだから。そして、もし君が、ぼくとクリソンがいっしょに走るのを少しでも見たいというのなら、彼のほうに歩調をおとしてくれるようにたのみたまえ、とね。なぜなら、ぼくのほうは速く走ることができないけれども、彼は遅く走ることもできるのだから。だから、もし君が、このぼくとプロタゴラスの話し合いを聞きたいのなら、彼のほうにこうたのんだらいいだろう——彼が最初短い言葉で、そして問われたことだけを答えていた、あのやり方をいまもそのまま変えずに答えてやってくださいとね。そうでなければ、談論をとりかわすといっても、いったいどんな方法

1 第八三、八四、八五回オリュンピア競技(それぞれ前四四八、四四四、四四〇年)で連続優勝し、競走選手として名をはせた。なお『法律』VIII. 840A 参照。

があるだろうか？　ぼくとしては、互いに対話しながらつきあうことと、演説をぶつこととは、別のことだと思っていたのだからね」

「でも、わからないのかね、ソクラテス」とカリアスは答えた、「プロタゴラスが、自分は自分ののぞむようなやり方で、君は君でまた自分ののぞむようなやり方で話し合う自由を要求しているのは、正当な言い分だと思うのだがね」

二三

するとアルキビアデスが、それをうけて言った、

「あなたのおっしゃることは正しくありません、カリアス。このソクラテスは、自分には長い話し方は苦手だということをちゃんと認めて、プロタゴラスに一歩をゆずっていらっしゃるのです。しかし、問答による対話の

C 能力をもち、言葉をやりとりするすべを心得ているという点にかけて、もしこの人が世の誰かに一歩をゆずるようなことがあったら、私は驚くでしょう。ですから、もしプロタゴラスのほうでも、問答することではソクラテスに負けるということを認めれば、ソクラテスはそれ以上何も言わないでしょう。しかし、プロタゴラスがもしこの点でも張り合おうとなさるのでしたら、ちゃんと一問一答の方式に従って対話していただかなくてはなりま

D せん。ひとつ問をかけられるたびごとに話をひきのばして長広舌を行ない、討論をそらして答をあたえようとせず、聞いている大部分の者がもともと何の話だったか忘れてしまうまで、話を長くするというやり方はいけません。もっとも、ソクラテスに関するかぎり、私が保証しますが、忘れっぽいなどと冗談に言ってはいますけれど

も、なかなか忘れるような人ではありませんがね。とにかくこの私には、ソクラテスの言われることのほうがもっともだと思えるのです。――各人は自分の意見を表明すべきでしょうから」

アルキビアデスの次に発言したのは、たしかクリティアスだったと思う。

E 「プロディコスにヒッピアス、どうもカリアスは、だいぶプロタゴラスの肩をもっているようだし、アルキビアデスのほうは、自分が熱をあげるもののためにいつも負けん気を出す男です。しかしわれわれは、ソクラテスにもプロタゴラスにも味方すべきではなく、両人に対して同じように、話し合いを中途でやめてしまわないように要求しなければいけません」

クリティアスがこう言うと、プロディコスが答えた。

337 「君の言うことは正しいと思う、クリティアス。このような言論の場に立ち合う者は、対話を行なう両者に対して、公平な聞き手でなければならないけれども、平等な聞き手であってはならないのだ――というのは、この二つのことは同じではないからだ。なぜなら、ひとは両方の言うことに公平に耳をかたむけなければならないけれども、しかしどちらにも平等の価値をおいてはならないのであって、賢い者のほうにより多くの価値を、無知な者のほうにはより少ない価値をおかなければならないのであるから。私自身としても、プロタゴラスにソクラテス、あなた方に譲歩してもらうことを要求したいし、あなた方が論題について互いに討論し合っても口論し合

B うべきではないと思う。――なぜなら、討論なら、親しい者どうしが好意をもちながらでも行なうけれども、しかし口論は、仲の悪い敵どうしがすることなのであるから。――そして、この私の言うようにしてこそ、われわれにとって、話し合いは最もうまく行くであろう。すなわち、あなた方語り手のほうもそうすることによって最

もよく、われわれ聞き手のあいだに賞讃ではなく名望をかちうるであろう。――というのは、名望は、聞く者の魂に偽りなしに生ずるものであるが、賞讃はしばしば、実際の考えに反して嘘を言う人々の口先だけのものであ C るから。――さらにわれわれ聞き手のほうもまた、そうすることによって最もよく、楽しみではなく歓びを感じるであろう。――というのは、歓びとは、何かを学んで知恵を身につけるときに、純粋に精神だけによって感ずるものであるが、楽しみとは、ものを食うとか、あるいはその他何らかの快楽を身に受けるときに、純粋に肉体だけによって感じるものなのであるから」

二四

プロディコスがこのように述べると、その場の多くの者がこれをたたえ迎えた。プロディコスのつぎに、知者ヒッピアスが語った。

「満場の諸君、私は諸君のすべてが同族の間柄であり、近親であり、同市民であると考える――ただし法にお D いてではなく、自然において。なぜならば、相似たる者は自然において互いに同族の間柄にあるのであるが、これに対して法は、人の世を支配する専制君主であって、多くの反自然的なことを強制するからである。――さればわれわれが、事物の本性を知りながら、そしてギリシア人ちゅう最高の知者として、まさにそのゆえにいま、ほかならぬギリシアの知恵の殿堂たるこの国に集まり、さらにこの国そのものの中でも最も大きく、最も祝福さ E れたこの家に相会しながら、そのような尊厳にふさわしいことを何ら示すことなく、あたかも世の最も卑小な者どものように、互いに相争うがごときは、けだし恥辱というべきであろう。

338
かくて私はあなた方に向かって、プロタゴラスとソクラテスよ、かつは懇願しかつは忠告したいのだが、あなた方は、いわば調停者であるわれわれの仲裁に従って、中間へ歩みよりたまえ。そして一方において君は、短く区切って言葉をやりとりするというあの厳格な対話方式を、それがプロタゴラスにとって快いものでないかぎりは、あまり過度に求めることをやめ、言論の手綱を解きゆるめて、言論がもっと堂々として優美な姿をわれわれにあらわすことができるようにしたまえ。またプロタゴラスのほうも、帆綱をすっかり伸ばしきって順風に満帆をゆだね、言論の海原遠くのがれて陸地を見失うことなかれ。ねがわくは両人ともに、中庸の道をすすまれんことを。——これが私のあなた方にしてもらいたいことであって、そのために次のような私の提案に従ってもらいたい。B すなわちそれは、審判官なり監督役なり議長なりを選んで、あなた方のために、あなた方がそれぞれ発言するにあたって、適切な長さをまもるように監視してもらおうということである」

二五

その場にいた人々はこの言葉に賛成し、こぞってほめたたえた。そしてカリアスはぼくを行かせないと言い張るし、人々は監督役を選ぶことを求めた。そこでぼくはこう言った。

「言論の裁定者を選ぶということは、みっともないことだろう。なぜなら、選ばれた者がもしわれわれより劣った人間だとしたら、劣った者がすぐれた者を監督するというのは、正しくないことだし、またもしそれが似たような者だとしても、やはり正しくないことになるだろうから。つまり、われわれと似たような者なら、やはり C 似たようなことしかしないだろうし、結局、わざわざ選ばれただけ余計だということになるだろうからね。それ

ならわれわれよりすぐれた者を選べばよいと言うかもしれないが、しかし実際には、ぼくの思うに、このプロタゴラス以上の知者を誰か選ぶなどということは、諸君にとって不可能な相談だろう。またもし諸君が、実際にはそうでないのに、われわれよりすぐれた者を選んだのだと主張するとしたら、それもまたこのプロタゴラスを侮辱するものだ。まるでこの人がつまらぬ人間であるかのように、監督役を選んでつけるというのだからね。もっとも、ぼくに関するかぎりは、そうしてもらってもいっこうにさしつかえないけれども。

D いやそれよりも、諸君が熱心にのぞんでいるように、われわれが交わりと話し合いをつづけて行こうというのなら、ぼくはこういうふうにしたらどうかと思う。つまり、もしプロタゴラスが答えたくないのなら、この人のほうから質問してもらうことにしよう。そしてぼくは答えるほうにまわり、そうすることによって同時に、答え手となる者はぼくの主張によるとどういうふうに答えるべきかを、彼にわかってもらうようにつとめよう。そして、この人が質問したいと思うだけのことに、全部ぼくが答えてしまったら、今度は交替に、この人がぼくに対して、同じやり方で答を提供してもらうことにしよう。その場合、もしこの人が、質問されたことだけに答えるというやり方に熱心でないように思えたら、ぼくも諸君もいっしょになって、ちょうど諸君がぼくにたのんだように、話し合いをだめにしてしまわないでくださいと、彼にたのむことにしよう。この目的のためには、とくに

E 一人の者が監督役になる必要はすこしもない。君たち全部がいっしょに監督してくれればよいのだ」

満場一致でそうすべきだということになった。プロタゴラスは、たいへん気がすすまないながらも、自分が質問すること、そして充分に質問してしまったら、逆に短い答によって答弁することを、やむをえず承認させられた。

二六

こうして彼は、だいたい次のようなことから問をはじめたのだった。

339 「私の考えでは、ソクラテス、人間にとって教育の最も重要な部分をなすのは、詩の言葉について有能であるということである。すなわち、詩人たちの語ることについて、正しく詩作されているものとそうでないものとを理解する能力をもち、そして両者を区別して、質問された場合に説明することができるということである。かくてまたいまも、私の質問は、私と君が現に論じ合っているその同じ問題、すなわち徳の問題に関するものではあるが、しかしそれは詩の領域に移されることになるであろう。その点だけが違うわけである。シモニデスは、(1) テッタリアの人クレオンの子スコパス(2)に献じた詩において、こう言っている——

B まことにすぐれた人になることこそはむずかしい

手足　心が完全で　非の打ちどころのない人になることは

君はこの歌を知っているかね。それとも、全部言ってきかせようか?」

1　ケオス島のイウリスに出た古代ギリシアの代表的抒情詩人のひとり(前五五六—四六八年ころ)。プラトンの著作のなかでは、『国家』I. 331Dsqq. においても彼の言葉が取り上げられている。本対話篇の以下において引用されている彼の詩については、他からは知られずプラトンのこの箇所が唯一の典拠である。この詩に対するソクラテスの解釈については「解説」二五七—二五九ページを参照。

2　スコパス家は、テッタリア(テッサリア)のクラノンとパラロスにおける支配的な家柄であり、シモニデスは前五一四年ころ、テッタリアを訪れてその客となった。

そこでぼくは言った、

「それには及びません。知っていますから。それにその歌なら、よく研究したことがあります」

「それはちょうどよい」と彼は言った、「では君には、これが立派に正しく作られていると思えるかね。それともそうではないかね」

「たいへん立派に正しく作られていると思います」とぼくは答えた。

「だが、もし詩人が自分で自分の言葉に矛盾することを言っているとしたら、君はそれを立派な創作だと思うかね」

「いいえ」とぼくは答えた。

「では」と彼は言った、「もっとよくしらべてみたまえ」

「でも、あなた、私はもう充分に考察ずみなのです」

「では君は知っているかね」と彼は言った、「この歌の先のほうで、彼がこう言っているのを——

ピッタコス(1)の言も正しいとは思えない

賢者の言った言葉だが。彼は言う

すぐれた人であることはむずかしいと

この文句も、先の文句も、同じこの詩人の言ったものであることに、君は気がついているかね」

「知っています」とぼく。

「それで君には」と彼は言った、「これが先に言ったことと一致していると思えるのかね？」

C

「私にはそうみえますが。(こう言いながらしかし、一本やられたかなと心配だった。)——しかし、あなたにはそのようにはみえないのですか？」

D

「いまあげたことを両方口にする者が、首尾一貫した主張をしているようにみえてたまるものか。なにしろ、最初は、真にすぐれた人になることはむずかしいということをみずから前提しておきながら、作品のすこし先へすすむと、それを忘れてしまって、自分と同じように『すぐれた人であることはむずかしい』と言っているピッタコスをつかまえて非難し、自分と同じことを言っている彼に賛成できないなどと主張しているのだからね。しかし、自分と同じことを言う者を非難するとすれば、明らかに自分自身をも非難していることになるのであって、したがって、前の言葉か後の言葉か、どちらか一方は正しくないということになるのだ」

E

このように彼が言うと、聞いていた多くの者は、はやしたてたり賞讃したりした。最初ぼくは、ちょうど拳闘の名人に一撃をくらったような気がした。彼がこういうことを語りおえて、ほかの者がそれにやんやと歓声をあげたとき、くらくらと目がくらみ、目まいを感じたのだ。それから——君だからほんとうのことを白状するが、それは詩人の言葉の意味を考えてみるのに時をかせぐためだったのだが——プロディコスのほうをふりむき、彼の名を呼んで話しかけた。

340

「プロディコス」とぼくは言った、「シモニデスはあなたと同じ国の人ですよ。当然あなたには、あの人をまもってあげる義務があるというものです。ですから私としても、たすけを呼ぶのはあなたにかぎると思うのです。

1 レスボス島ミュティレネの支配者。ソロンやタレスとともに七賢人の一人(343A 注1参照)。

ちょうどホメロスの語るところによれば[1]、スカマンドロスがアキレウスに攻めたてられたとき、

愛する弟よ、われら二人してこの男の力を抑え止めよう

と言って、シモエイスをたすけに呼んだように、私もまた、プロタゴラスがわれわれのシモニデスを攻略するのをふせぐために、あなたのたすけを呼びましょう。実際また、シモニデスのために修正を行なうには、あなたのもっている芸術的才能が必要でもあるのです。あなたはその才能を駆使して、のぞむことと欲することとは同じではないとして区別したり、またさっきも、いろいろとたくさんの事柄を見事に区別されましたね。さあいまもまた、あなたの思うところが私と同じであるかどうか、考えてみてください。どうも私には、シモニデスの言っていることが彼自身の言葉と矛盾しているようにはみえないのです。なぜなら、プロディコス——ひとつあなたの御意見を表明していただきたいのですが——いったい、〈なる〉というのと〈ある〉というのとは、同じだと思われますか、それとも別の事柄でしょうか？」

B

「別の事柄だ。誓ってもいい」とプロディコスは答えた。

「それでは」とぼくは言った、「シモニデスははじめの詩句のほうでは、自分自身の意見をみずから表明したのではありませんか——真にすぐれた人になるのはむずかしいと」

C

「君の言うとおりだ」とプロディコスは答えた。

「ところが」とぼくは言った、「彼が非難しているピッタコスのほうは、けっしてプロタゴラスが考えていらっしゃるように、彼自身と同じことを言っているのではありません。別のことを言っているのです。なぜなら、ピッタコスが『むずかしい』と言ったのは、シモニデスが言ったようにすぐれた人になるということではなく、

すぐれた人であることがむずかしいと言ったのだからです。この両者、〈ある〉ということと〈なる〉ということとは、プロタゴラス、ここにいるプロディコスが主張されるように、同じではありません。そして、〈ある〉と〈なる〉とが同じではないとすると、シモニデスは、けっして自分で自分の言葉と矛盾したことを言っていることには

D

なりません。事実、おそらくはこのプロディコスにしても、ほかの多くの人たちにしても、ヘシオドスとともに、すぐれた者になることはむずかしいけれども――なぜなら『神々は徳の前に汗をおきたもうた』のであるから――、しかし『ひとたび徳の頂きに至りつくときは、さきには困難であったこの徳も、それからのちは、これを所有するのは容易であろう(2)』と主張することでしょう」

二七

プロディコスはこれを聞いてぼくを賞(ほ)めてくれた。しかしプロタゴラスのほうは、

「君の行なった修正は、ソクラテス、君が修正しようとするもとのものよりも、もっと大きな誤りをふくんでいる」

と言った。そこでぼくは言った、

E

「すると、プロタゴラス、どうやら私は、へたな細工をしたことになるらしいですね。そして藪医者(やぶいしゃ)としてわ

---

1 『イリアス』第二一巻三〇五行以下。スカマンドロスとシモエイスは河の名。

2 ヘシオドス『仕事と日々』二八九行以下。『国家』II. 364C、『法律』IV. 718E でも引用されている有名な詩句。

られなければなりませんね。病気を治(なお)そうとしながら、前よりいっそう重くしているのですから」

「まったくそのとおりなのだ」と彼。

「いったいどうしてなのですか」とぼくは言った。

「もしもこの詩人が」と彼は言った、「徳を所有するということを、何かそんなふうに取るにたらぬことだと主張しているとしたら、彼の無知たるやはなはだしいものだということになるだろう。そのことこそ万人の見るところ、何よりも最も困難なことなのに」

そこでぼくは、次のように言った。

「ゼウスに誓って、ここにプロディコスが、私たちの話の仲間に加わって居合わせているのは、ほんとうに好都合なことです。というのは、プロタゴラス、このプロディコスのもっている知恵なるものは、その淵源がシモニデスにあるにせよ、あるいはもっと古くさかのぼられるものにせよ、とにかく古来何か神にも似た力をもつものらしいのですからね。あなたは、ほかの多くのことには造詣(ぞうけい)が深いにもかかわらず、お見うけしたところ、私とちがって、このほうの知恵には門外漢のようですね、――私はこのプロディコスの弟子になっている(1)おかげで、それをかじっているのですが。

いまの場合、この『困難な』という言葉にしても、どうやらあなたにはおわかりにならないようですが、シモニデスはたぶんこの言葉を、あなたが解しているような意味に解していたのではないのです。それはちょうど『おそろしい』という言葉について、私があなたや誰かほかの人をたたえて『プロタゴラスは知恵のあるおそるべき人物だ』というようなことを口にすると、そのたびにいつもこのプロディコスが私を叱って、善いものを

B 『おそろしい』などと呼んで恥ずかしくないのかときく場合と同じことです。なぜなら、プロディコスの言うには、おそろしいというのは悪いもののことである。すくなくとも、誰もこの語を使うそれぞれのときに、『おそろしい富だ』とか、『おそろしい平和だ』とか、『おそろしい健康だ』とかいった言い方はしない。むしろ、『おそろしい病気だ』とか、『おそろしい戦争だ』とか、『おそろしい貧乏だ』とかいった使い方をするのであって、これは『おそろしい』といわれるものが悪いものであることを示していると、こういうのです。ですから、おそらくこの『困難な』という言葉にしても、ケオス島の人たちとシモニデスは、これを悪いものの意味に解しているか、あるいは何かほかに、あなたにはわからないような意味に解しているのではないでしょうか。

C ひとつプロディコスにたずねてみましょう。シモニデスの言葉の使い方のことなら、当然この人にたずねてしかるべきでしょうからね。――プロディコス、シモニデスはこの『困難な』という言葉で、何を意味したのでしょうか」

「悪いものだ」とプロディコスは答えた。

「なるほど、そうすると、プロディコス」とぼくは言った、「『すぐれた人であることはむずかしい』と言ったピッタコスを彼が非難するのも、そのためなのですね。それはいわば、ピッタコスが『すぐれた人であるのは悪いことだ』と言うのを、彼が聞いたのと同じなのでしょうね」

「シモニデスの言葉の意味をほかに解しようがあると思うかね、ソクラテス」と彼は言った、「むろん彼は、

---

1 『クラテュロス』384B、『メノン』96D、『カルミデス』163Dにおいても同じことが言われている。

ピッタコスがレスボス島の人で、正統のギリシア語でないような方言の中で育ったために、いろいろな言葉を正しく区別することを知らなかったというので、ピッタコスを非難しているのだ」

「さあ、お聞きになったでしょう、プロタゴラス」とぼくは言った、「このプロディコスの言ったことを。あ

D なたはこれに対して、何かおっしゃることができますか」

プロタゴラスは言った。

「そんな、君の言うようなことがあってたまるものか、プロディコス。私はよく知っているが、シモニデスだってやはり、この『困難な』という言葉を、われわれほかの者と全く同じように、悪いものの意味にではなく、およそ容易でないようなもの、多くの労苦によって得られるようなものの意味に使っているのだ」

「いや、プロタゴラス」とぼくは言った、「ほんとうは私も、それがシモニデスの言葉の意味だと思っているのですよ。このプロディコスにしたってそれを承知のうえで、ただたわむれに、あなたが自分の説を弁護することができるかどうか、あなたをためしてみようと思ったのでしょう。なぜなら、シモニデスが『困難な』という

E 言葉を悪いものの意味に使っているのではないということでしたら、すぐ次の詩句がその動かぬ証拠になりますからね。彼はこう言っています――

ただ神だけがこの特典にあずかる

疑いもなく彼は、すぐれた人であるのは悪いことだという意味のことを言いながら、しかも神だけにそれができると主張したり、それを神だけの特典だと言ったりするはずはありません。もしそうなら、きっとプロディコスは、シモニデスを不埒者と呼んで、けっして真のケオス人ではないと言うことでしょう。

342

——しかしそれよりも、この歌におけるシモニデスの意図はどこにあるか、これについて私の解釈をあなたにお話してもよいですよ。もしあなたが、あなたのいわゆる詩の文句に関する才能を、私についてためしてみたいと思うのでしたらね。もっとも、おのぞみ次第では、あなたからそれをうかがっても結構ですが」

ぼくがこう言うのを聞いて、プロタゴラスは、

「君がその気ならやりたまえ、ソクラテス」

と言った。他方、プロディコスとヒッピアスは、ぜひやるようにすすめた。ほかの連中も同じだった。

二八

「それでは」とぼくははじめた、「及ばずながらこの私が、この問題の歌について私の解するところを、諸君に説明してみることにいたします。

そもそも、知を愛し求める哲学の営みは、ギリシア人たちのなかにあっても、クレタとラケダイモン(スパルタ)において最も古くから、また最も盛んに行なわれているのでありまして、ソフィストの数も、かの地において最も多くを数えるのであります。しかるにかの地の人々は、この事実を否認して無知をよそおっているのですが、

B

これは、先ほどプロタゴラスの指摘したかのソフィストたちと同様の意図によるものでありまして、これらの国民が他のギリシア人にたちまさっているのは知恵の力によるものだということが、ばれないためであり、彼らの優位は戦いと勇気のしからしめるところであると、思わせておくためにほかなりません。つまり彼らは、もし自分たちの優位のよってきたるゆえんのものを知られたならば、全世界の人々がそれ——すなわち知恵——を身に

つけようとつとめるだろうと考えたのです。実際この秘密はうまく守られたので、あちこちの国々にいるスパルタ礼讃者たちは、完全に策略にひっかかり、彼らのまねをして、〔拳闘によって〕耳をつぶしてみたり、拳闘用の革ひもをこぶしに巻きつけたり、体育に熱をあげたり、短いマントをひっかけたりしているありさまであります。まるで、スパルタ人が他のギリシア人たちに対して支配的な地位にあるのは、そういったことをしているおかげであるかのように！　一方スパルタ人たちは、自国のソフィストたちと気ままに交わりたいと思い、その交際を秘密にしておくことはもういやになってきたので、これらのスパルタ主義者たちをはじめ、一般に自国に滞在しているよその国の者に対して、外国人追放令をもうけ、それによって、よその国の者たちに気づかれないようにソフィストと交わるようにしております。また自分たちのほうからも、青年たちが誰ひとりとして他国へ出て行くことを許していない——この点クレタ人たちも同様です——のですが、これは、せっかく自分たちだけで教えるところのものを、青年たちが忘れてしまっては困るからです。これらの国々にあっては、教育に関して高い誇りをいだいているのは、ただ男子だけではありません。婦人たちもまたそうなのであります。

C

D

諸君は、私の申しあげているこれらの事柄が真実であって、スパルタ人たちが哲学と言論にかけては最高の教育を受けているということを、次のような事実から知ることができるでしょう。すなわち、諸君の誰でも、スパルタ人のなかで最も取るにたらぬ人物を選んで、その人とつき合おうとしてごらんなさい。ひとはその人物が、はじめは一般に、言論において、ある凡庸な資質しか示さないのを見出すでしょう。しかしやがて、論議のすすむうちに機会がくると、彼はあたかも投槍の達人のように、突如はっとするような、短く圧縮された言葉を投ずるのでありまして、ために対話の相手がたは、童児と何ら異なるところのないような観を呈するにいたるのであ

E

ります。

かくして、まさにこのことに気づいて、スパルタ主義とは本来、体育の愛好よりは、むしろはるかに知恵の愛好にあるのだという事実を看破した人々は、いまの世にもむかしの世にも、けっしていないわけではありません。そういう人々は、如上(じょじょう)のごとき寸言を発することができるということは、完全なる教育を身につけた人間にしてはじめて可能なのだということを知っているからであります。これらの人々のなかには、ミレトスの人タレスがあり、ミュティレネの人ピッタコスがあり、プリエネの人ビアスがあり、われわれと国を同じくするソロンがあり、リンドスの人クレオブゥロスがあり、ケナイの人ミュソンがあり、そして彼らのうちにあって第七番目に、スパルタの人キロンの名があげられていたわけであります。(1) 彼らはいずれもそろってスパルタ人の教養の崇拝者であり、熱愛者であり、かつその弟子だったのです。ひとは、彼らの知恵というのがほかならぬ上述のごとき性格のもの、つまり、それぞれによって語られた短い、肝(きも)に銘じるような寸言であることを、よく知ることができるでしょう。すなわちこれらの人たちはまた、ともに相会してデルポイの神殿におもむき、かの万人の口に膾炙(かいしゃ)している『汝みずからを知れ』『分を超えるなかれ』という句を書きしるし、もってこれを彼らの知恵の初物(はつもの)としてアポロンに奉納しているのであります。

343 B

さてそれでは、何のために私はこれらのことを申し述べているのでしょうか。それは、むかしの人たちの行な

1 この七人は「七賢人」と呼ばれる。七賢人のメンバーにが全部あげられているリストとして最古のものであろう。は伝承によって僅かの異同があるが、この箇所は七人の名一人一人についての資料は、Diog. L. I. 22–122 に詳しい。

った愛知の営みは、このようなあり方、すなわち、スパルタふうの一種の寸言法のかたちをとっていたということを、申しあげたかったからにほかなりません。かのピッタコスの文句、『すぐれた人であることは難し』という言葉が、知者たちの賞讃をはくしつつ、ひとりひとりの口から口へと伝えられたのも、じつはかかる事情によるものであります。そこで、シモニデスが、彼は知恵のうえで名声を得んものと野望をいだいていたので、

C あたかも有名な闘技者を打倒するように、もしこのピッタコスの格言をうち負かし、これを凌駕(りょうが)したならば、自分が当時の人々のあいだに名声をかちうるにちがいないと気づいたのでした。かくしてこのピッタコスの文句に狙いを定め、そしてこの目的のために、この句に対してけちを付けようという策謀をいだきつつ、彼は彼の全詩歌を創作したのであると、このように私には見うけられるのであります。

二九

さあそれでは、私の申していることがほんとうであるかどうか、みなでいっしょに彼の歌を検討してみることにいたしましょう。

そもそもこの歌の冒頭からしてすでに、もし、すぐれた人物になるのはむずかしいというだけのことを言いたいのに、

D わざわざそこに『こそは』という語を入れたとすれば、何か尋常でない感じを受けるでしょう。何のためにこんな語を挿入したかということは、シモニデスがピッタコスの文句を相手に、いわば論争をいどむかのごとくに語りかけているのだと解釈しないかぎり、まったく合点(がてん)の行かぬことのように見えるのであります。すなわち真相は、ピッタコスが、『すぐれた人であることは難し』と言ったのに対して、シモニデスが異議をとなえ、

いな、すぐれた人に『なることこそむずかしい』のだ、ピッタコスよ、まことにむずかしいのだ、と言ったのです E ——まことにすぐれた人、とつづくのではありません。作者はけっして、『まこと』という言葉をこの『すぐれた』にかけて使っているのではありません。それではまるで、世には真にすぐれた人々と、他方すぐれた人ではあるが、しかし真にすぐれているのではない人々がいるかのようですが、これはばかげた考え方であって、シモニデスらしくもないように思えるからです。そうではなく、この『まことに』という語は、歌の中で転置されたものと解し、何か次のようなふうに、ピッタコスの文句を前に置いて考えなければなりません。つまり、あたかもピッタコス自身が語り、シモニデスがそれに答えて言っているかのように解すればよいわけです。——『世の 344 人々よ、すぐれた人であることはむずかしい』とピッタコスが言うと、他方がこれに答えて、『ピッタコスよ、あなたの言うことは真実ではない。なぜなら、すぐれた人であることではなく、なることこそがむずかしいのだから、手も足も心も完全な、非のうちどころのない人となることこそは、まことにむずかしいのだから』と言っているわけなのです。

このように解すれば、『こそは』という語が挿入されているわけも、『まことに』という語が正しくは最後に置かれることも、はっきりと合点が行きます。そして、これにつづくところのすべての詩句は、彼の言葉がこのよ B うな仕方で語られたものであることを立証しています。じっさい、この歌の中で語られるひとつひとつの点について、彼の詩作の巧みさを証明することのできる材料は数多くありますが——まったくそれは魅力に富んだ、入念な作品ですから——、しかしそれらをこのようなやり方で説明して行くと長くなってしまうでしょう。われわれはただ、それの全体的な輪郭と意図とを説明することにとどめなければなりません。その意図とはすなわち、

この歌の全体を通じて徹頭徹尾、何よりもピッタコスの言葉を反駁(はんばく)することなのであります。

三〇

C

すなわち彼は、ただいまの句の後で、すこし先へ行ってから、普通の文章にするとこういう意味のことを言っています。――すぐれた人物になることこそは、まことにむずかしいのだ。もっとも、ある期間だけのことなら、それもできるけれども。しかしながら、すぐれた人になってしまってから、その状態を持続して、あなたの言うようにすぐれた人であるということは、ピッタコスよ、不可能であり、人間にできるところではないのであって、ただ神のみがそのことを特典としてもつのである、

されど人の身は　悪しき者であることをまぬかれえない
防ぐすべなきわざわいに打ちたおされるから

――ところで、船の操縦において、『防ぐすべなきわざわい』は、いかなる人を『打ちたおす』のでしょうか。明らかにそれは、素人(しろうと)の者ではありません、なぜなら素人の者は、つねに打ちたおされている状態にあるからです。それはちょうどひとが、横になっている者を投げたおすことができないのと同じようなものです。立っている者なら、ひとはいつかこれを投げたおして、横にならせることもできるでしょうが、はじめから横になってい

D

る者を投げたおすわけにはいかない、それと同じようにまた、防ぐすべを心得ている者なら、いつかは、防ぐすべなきわざわいがこれを打ちたおすということもありうるでしょうが、はじめからつねに防ぐすべを心得ていない者を打ちたおすことはできません。船の操縦の心得ある者は、大嵐におそわれて万策つきた状態になることが

E

ありうるし、農夫は、苛酷な季節の襲来をうけて策を失うことがあり、医者についても同じことが言えます。つまり、善き者には悪い者になる余地がのこされているわけなのであって、このことは、また別の詩人[1]の次のような言葉によっても、立証されるところであります。

すぐれた人物は　あるときは善き人　あるときは悪しき人

これに反して、悪しき者には悪化の余地がなく、つねに悪しき者であることが必然なのです。したがって、防ぐすべを心得、知恵をもち、すぐれた者こそが、ひとたび防ぐすべなきわざわいにおそわれるとき、『悪しき者であることはまぬかれえない』ということになる。――しかるにあなたは、ピッタコスよ、『すぐれた人であることはむずかしい』と主張する。だが実際には、すぐれた者になることならば、むずかしいけれども、可能なのであるが、すぐれた者であるということは不可能なのだ。なぜなら、

345

幸福のときは　誰でも善き人
不幸のときは　悪しき人

と、こういうわけなのであります。では、『善き行為[2]』とは、たとえば文字を書くということの場合では、何がそれにあたるのでしょうか。文字に関して人をすぐれた者にするのは、何でしょうか？　いうまでもなく、文字を学ぶということです。人をすぐれた医者にする『善き行為』とは、何でしょうか。いうまでもなく、病人の看

1　テオグニスと推定されるが、正確には不明。

2　ギリシア語では、右の引用法における「幸福」と同じ意味にもなる。ソクラテスはこの二重の意味を利用して論を進める。

護法を学ぶことであります。『不幸のときは悪しき人となる』――では、たとえば悪しき医者となる可能性のあるのは、いかなる人でしょうか。いうまでもなくその人は、まず第一に医者であること、つぎにすぐれた医者であること、これだけの条件をそなえていなければなりません。なぜなら、そのような人にしてはじめて、また悪しき医者になることもありうるでしょうから。これに対して、われわれ医術の素人は、いくら不幸に際しても(行ないを失しても)、医者にも、大工にも、その他そういった何者にもなれないでしょうし、不幸に出会って医者になれないとすれば、むろん悪しき医者にもなれるはずがありません。このようにして、一般にすぐれた人物も、

B　時の経過とか、労苦とか、病いとか、あるいはその他何らかの災難によって、悪しき者となるときもありうるわけですが――というのは、不幸とはただひとつ、知識をうばわれること、これあるのみなのですから――、しかし悪しき人が悪しき人になるということは、けっしてありえないでしょう。なぜなら、つねに悪しき人であるのですから。いやしくも悪しき者となるためには、その人はまずその前に、すぐれた者とならなければならないのです。

したがって、この歌のこの部分もまた、次のようなことを言おうとしていることになります。――すぐれた人であることは、すなわち、一貫してすぐれた人でありつづけるということは、不可能なことなのだ。これに対し

C　て、すぐれた者になることならば可能であり、この同じ人はまた悪しき者になることもできる。そして、神の寵愛をうける者は、最も長い期間、最もすぐれた者であるのだ、と。

三一

かくして、以上すべての言葉はピッタコスに向けられたものなのですが、このことは、これにつづく歌の部分によって、さらにいっそう明らかになります。すなわち、彼の言うには、

されば われは　なりあたわざることを求めて
みたされぬ望みに　与えられたこのいのちをむなしくそそぐまい
広き大地の実りを享(う)けるわれらのなかに
一点の咎(とが)もなき人間を求めまい　そんな人をみつけたら
誓って君らに告げてあげよう

D

かくもはげしく、またこの歌の全体にわたって、彼はピッタコスの言葉を攻撃しているのであります。

誰でも私はたたえ愛する
みずからすすんで　醜い所行をしない者なら
されど運命(さだめ)には神々も抗しえない

この詩句の言葉もまた、同じピッタコスの言葉に向けられたものであります。というのは、シモニデスは、みずからすすんでいかなる悪をもなさない者をたたえる、というようなことを主張するほど、無教育な人間ではなかったからです。それではまるで、世にはみずからすすんで悪をなす人々がいるとでも、彼が考えているようです。なぜ私がこう言うかというと、これはほとんど私の確信なのですが、およそ知者ならば誰ひとりとして、世

E

にみずからすすんで過(あやま)ちをおかしたり、みずからすすんで醜く悪しき所行をなしたりする者がいるとは、けっして考えないはずですし、醜い行為や悪しき行為をする者たちはすべて、みずからの意に反してそうするのだとい

うことを、よく知っているはずだからです。かくてシモニデスにしても、彼はけっして、みずからすすんで悪をなさないような者がいるならば、自分はそのような人々の讃美者であると言っているわけではありません。彼はじつは、この『みずからすすんで』という語を、彼自身に関連させて言っているのです。

すなわち彼は、ひとかどの立派な人物ともなれば、しばしば自分自身を強制して、やむをえずに誰かと親しくしたり、賞讃したりしなければならないことがあると、このように考えていました。たとえば、ある人物にとって、たまたまその母や、父や、祖国や、その他そういったものが、自分の性に合わぬというようなことは、しばしばあるものです。彼の考えによると、悪い人たちならば、何かそういった事情が身に起こるとき、親たちなり祖国なりのもっている欠点に対して、あたかもそうすることが楽しいかのように、その欠点を目にし、非難しながら指摘し、咎めだてするものである。これは、自分たちが親や祖国をなおざりにしているといって、世間から責められたりののしられたりしないようにという意図によるものなのであるが、このゆえに彼らはますます相手を非難し、相手に対してもともと避けられぬ憎しみの上に、さらにみずからすすんでつくり出した憎しみを加える結果となる。これに反して、すぐれた人々は——と彼は考えたのですが——非をかくして相手を賞めるようにうながされる。そして、不正な仕打ちをうけて、親たちなり祖国なりに対して腹を立てるようなことがあれば、彼らは自分で自分をなだめ、和解しようとする。身内の者たちを愛し賞讃するように自分自身を強制しながら——。

思うに、シモニデス自身もまた、しばしば僭主とか、あるいはほかの誰かそういったたぐいの者に対して、自発的にではなく、強制に迫られて、心ならずも賞めたり讃えたりしなければならなかったのを、みずから意識したことでありましょう。まさにこのゆえに、彼はピッタコスに向かって言うのです——私があなたを非難するの

C は、ピッタコスよ、私が人を非難するのを好むためではない。なぜなら、

悪人でなく　あまりに無法者でさえないならば
国をささえる正義（いましめ）を知った健（すこ）やかな人でさえあれば
私はそれで満足だ　その人を咎めはしない
私は好んで人を咎める者ではない
愚か者の群れは数しれぬのだから

——したがって、非難するのを好む者なら、その人は、そのような愚か者たちを咎めて満足を得るだろうが、しかし、

醜をまじえぬものはすべて美しい

D ——この彼の言葉は、いわば黒のまじらぬものはすべて白い、というような意味ではありません。そんな考えは、多くの点でおかしなものでしょうから。彼の言おうとする意味は、彼自身は、中間的な性格のものでもこれを非難せずに受けいれるということなのです。そして、『広き大地の実りを享（う）けるわれらのなかに、一点の咎（とが）もなき人間を求めまい、そんな人をみつけたら、誓って君らに告げてあげよう』と言うわけなのです。したがって——と彼のいわく——そのような人間を待っていたら、私は誰をも賞めることがなくなるだろう。いや、私には、人が中間的な性格をもち、何も悪いことさえしなければ、それで満足なのだ。なぜなら、『誰でも私は愛し讃え

E る』のだから。——と、ここで彼がミュティレネの方言をつかっているのは、ピッタコスに向かって話しかけているからなのです。次のように。——『誰でも私は愛し讃える、みずからすすんで。（ここの『みずからすすん

(346) で』のところで句読を切らなければなりません。）醜い所行をしない者なら』。ただし、私が不本意ながら、やむをえずに賞めたり愛したりする人々も、いることはいるのだが。だから、あなたに対しても、もしあなたが至当 347 にして真実な事柄を、中庸をまもって語っているのであったなら、ピッタコスよ、私はけっしてあなたを非難したりはしなかったであろう。だが実際には、あなたは最も重大事に関して、しかも重大な誤りをおかしながら、真実を語っているかのように思われている。だからこそ、私はあなたを非難するのである。……

三二

以上のような意図のもとに、プロディコスにプロタゴラス」とぼくは結んだ、「シモニデスはこの歌をつくったのであると私には思われます」

ここでヒッピアスが言った、

「なるほど、ソクラテス、君もなかなかうまくこの歌について説明したようだね。しかし、この歌については、B ぼくにもうまい説があるのだ。もしよければ、それを諸君に披露することにしようか」

するとアルキビデアスが答えた、

「ええ、ヒッピアス、しかしまたの機会にね。さしあたっていま、しなければならないのは、プロタゴラスとソクラテスがお互いに同意し合ったことを、実行することです。つまり、もしプロタゴラスがまだ質問したいのなら、ソクラテスがそれに答え、またもし自分がソクラテスに答えるほうをのぞむのなら、ソクラテスのほうが質問するということです」

そこでぼくは言った、

「ぼくとしては、どちらでも好きなほうをするように、プロタゴラスにおまかせするよ。ただ、この人さえよければ、歌や詩の文句のことはこれで打ち切りにしようではないか。そして——私はね、プロタゴラス、そもそも最初に私がおたずねしていた問題にかえって、あなたといっしょに考察しながら、それに結着をつけることができたらと思うのです。と言いますのは、詩のことを話題にして談論をかわすということは、どうも私には、凡庸で俗な人々の行なう酒宴とそっくりのような気がしてならないのです。なぜなら、そういう連中もやはり、酒を飲むときに、教養の貧しさのため、自己自身のもっているものだけを頼りに、自己自身の声と自己自身の言葉によって互いに交わるということができないので、自分のものならぬ笛の声を高い金でやとって、もって笛吹き女の市価を高からしめ、その声を肴（さかな）にお互いのつきあいをするではありませんか。これに反して、教養ある立派な人々が酒宴に集まる場合には、そこに笛吹き女も、舞妓（まいこ）も、琴をひく女も見出すことはできないでしょう。彼らは、そういうたわいもない慰みものなどなくても、自己自身の声によって、自分たちだけで互いに交わるにこと足りるものをもっており、たとえ非常にたくさんの酒を飲んでも、自分たちのあいだで順番に秩序正しく話したり聞いたりするのです。

同様に、いまの私たちの場合のような交わりにしても、もしそこに集まる人間が、私たちの大多数がみずから任じているような人物であるならば、自己自身以外の声を何ひとつ必要としないでしょう。それが詩人たちの声であろうと、同じことです。私たちは詩人たちに向かって、その語るところについて質問することもできません。そして、多くの者が彼らを話の中に引き合いに出して、ある者は詩人の言葉の意味はこうであると言い、ある者

348

は、いやこうなのだと主張しながら、はっきり確証できない事柄について、がやがやと論じ合うだけなのです。すぐれた人々なら、そんなつきあいはまっぴらだと言うでしょう。そして、自分自身の言葉のなかでお互いの力量をためしためされつつ、自己自身のもっているものだけを頼りに、互いに直接相手とふれあうのです。このような人々をこそ、私とあなたは見ならうべきだと思われます。すなわち、詩人たちに引っこんでもらって、私たち自身だけを頼りに、直接お互いに向かって語りかけながら、真理と私たち自身とをためさなければなりません。そこで、もしあなたがまだ質問の側にまわりたいのでしたら、私はいくらでも、答え手となってあなたの質問に応じましょう。しかし、もしよければ、あなたのほうで私に答えていただいて、私たちが中途で論議を中止した問題、あの問題に結着をつけましょう」

B

このほかにもぼくは、まだいろいろと同じようなことを言ったが、プロタゴラスは、どちらをするとも確答をあたえなかった。するとアルキビアデスが、カリアスのほうを見てこう言った。

「カリアス、あなたにはいまでも、プロタゴラスの態度が立派だと思えますか。この方は、答えるのか答えないのか、ちっとも明言しようとなさいませんが――。私には立派とは思えませんね。ちゃんと問答をかわすか、さもなければ、問答をかわすのはいやだと言明していただかなければ。それならそれで私たちは、この方についてそういう事実を心にとめておくでしょうし、他方、ソクラテスも誰か相手を変えて問答するなり、ほかの希望者がほかの誰かとそうするなり、できるでしょうからね」

C

プロタゴラスは、察するところ、どうやら恥ずかしくなったらしい。なにしろ、アルキビアデスがこんなことを言うし、それにカリアスをはじめ、その場にいたほかの者も、ほとんど口をそろえて彼にたのんだのだからね。

やっと彼は不承不承、問答をかわすことに心をきめ、自分が答え手になるから質問するようにと言った。

三三

そこでぼくは、こんなふうに切り出した。

「どうかプロタゴラス、私があなたと問答をかわすのは、私自身がいつも行きづまっている問題をくわしく考察しようとすること以外に、何か他意があるとは思わないでください。私は、

D 二人してともに道行けば、一人が先に気づくもの(1)

というホメロスの言葉は、大いにもっともだと思うのです。じっさい、そうしてこそ、われわれ人間のすべては、あらゆる行為、言葉、考えなどがうまくいくのですから。これに反して、『一人なれば、よし気づこうとも』、すぐにひとは、その考えを示してともに確かめるべき相手を求めて、そのような相手がみつかるまでは歩きまわらなければなりません。私にしても全くそのとおりなのでして、ほかの誰よりもとくにあなたと問答したいというのは、ほかでもありません、立派な人が考察するにふさわしい、ほかのいろいろな事柄についてもさることながら、

E なかんずく徳についてては、あなたほど立派に考察できる人は他にないと私は思っているからなのです。じっさい、あなたを措(お)いてほかに誰がいましょうか。あなたという方は、ほかのある人々のように、自分自身がひとかどの立派な人物であると任じているだけではないのですからね。ほかの人々は、本人自身は立派な人物では

---

1 『イリアス』第一〇巻二二四行。

あっても、自分以外の人々をすぐれた者にすることができません。これに反してあなたは、あなた自身がすぐれた人物であるとともに、ほかの人々をそうすることもできるのです。しかも、あなたの自信のすばらしさたるやどうでしょう。ほかの人たちはこの技術をかくしているというのに、あなただけは、あまねくギリシアの人々に公公然と自分を宣伝して、ソフィストとして名乗りをあげ、自分が教育をうけもち徳を教える教師であることを標榜したうえで、そのための報酬を受けとることを要求した最初の人なのですからね。それなのに、こうした事柄を考察するにあたって、どうしてあなたのお力ぞえを求め、質問したり相談したりしないわけにいきましょうか？　いいえ、何としてもそうしないわけにはいきません。そこでいま私は、こうした問題について最初におたずねしていた事柄を、もう一度はじめから、あるいはあなたのお力ぞえを得て思い出したり、あるいはいっしょに考察をすすめたりしたいと思うのです。問題になっていたのは、たしか次のようなことでした。

349 [1]

B

——知恵と節制（分別）と勇気と正義と敬虔と、これらのものは、名前は五つあるけれども、さし示すものは一つなのであるか。それとも、これらひとつひとつの名前のもとには、それぞれ独自のあり方をもった何かが実際に対応していて、それぞれ自己自身の機能をもち、そのひとつは他と同じ性格のものではないのであるか——。

これについて、あなたの主張されるところはこうでした。

C

——これらはけっして一つのものにつけられた名前ではない、これらの名前のひとつひとつは、それぞれ独自のものに対応してつけられているものである。ただし、これらはいずれも徳の部分をなすものであって、その部分という意味は、たとえば金塊の部分のように、部分相互、および部分と全体とが類似しているというものではなく、むしろ顔の諸部分のように、部分と全体、および部分相互が似てはいなくて、それぞれが固有の機能をも

つものである——。

こういった見解をいまでも、先ほどと同じようにもっていらっしゃるのでしたら、そう言ってください。また もし何らかのかたちで見解が変っているのでしたら、その新しい見解をはっきり述べてください。いまあなたが、何らかの点で違ったことを主張されても、別に私は、それをどうこう言うようなことはいたしませんから。さっ D きは私をためしてああおっしゃったのだということも、充分に考えられますからね」

三四

「よろしい、ソクラテス」とプロタゴラスは答えた、「私は君にこう言おう。——それら五つは徳の部分をなすものであり、そして、そのうちの四つは互いにかなり近しいものであるが、ただ勇気だけはそのどれとも非常に異なっている。私の言うとおりだということは、次のことから君にわかるだろう。すなわち、世には、並はずれて不正、不敬虔、放埒（ほうらつ）、無知な人間でありながら、ただ勇気だけはとくに衆をぬきんでているというような者がたくさんいることを、君は見出すだろうから」

E 「ちょっと待ってください」とぼくは言った、「あなたのおっしゃることは、たしかに考えてみるだけの値うちがありますね。——勇気のある人々と言われるのは、ものをこわがらない人々という意味ですか。それとも、ちがいますか」

1　349A2 におけるコンマの打ち方はアダム、クロワゼ、ラムなどのテクストに従う。

「そのとおりだ」と彼は答えた、「さらには、多くの者が恐れておもむかないような事柄に向かって、猛進する人でもある」

「さあそれでは、あなたは徳が立派なものだと主張されますね。そして、あなた自身が徳の教師となっているのは、徳が立派なものであるとみなしているからなのですね」

「これ以上立派なものはないと主張するね」と彼は言った、「私が気でもふれているのでないかぎりは」

「では」とぼくは言った、「その一部は醜く、一部は立派だというようなものでしょうか。それとも全体が立派なのでしょうか」

「全体がこれ以上ありえないほど立派なのだ」

「では、貯水池の中にこわがらずにとびこむのは、どういう人たちかご存知ですね」

「むろん。――潜水夫たちだ」

「彼らは、知識があるからこわがらないのでしょうか。それとも、何かほかの理由によるのでしょうか」

「知識があるからだ」

「騎馬で戦うのをこわがらないのは、どういう人たちでしょうか。馬術の心得ある人々ですか、その心得のない人々ですか」

「馬術の心得ある人々だ」

「小盾（こだて）を持って戦う場合には、どういう人たちがそうでしょうか。盾兵ですか、それとも、盾兵以外の人々ですか」

「盾兵だ。そして、そういうことをききたいのなら、他の万事すべてがそのとおりだと言っておこう」と彼は言った、「つまり、知識ある人々は知識のない者よりこわがらず、またそれぞれの当人においても、ものを学べば、学ばない前の自分とくらべて、その事柄をこわがらなくなるのである」

B

「しかし、あなたはこれまでに」とぼくは言った、「すべてそういった事柄の知識をもっていないのに、それらひとつひとつの事柄に対してこわがらないような人々を、しばしばごらんになったでしょう？」

「うむ、たしかに」と彼は言った、「しかも、あまりにも無鉄砲な連中をね」

「すると、そういう無鉄砲な連中は、また勇気のある者でもあるのでしょうか」

「それでは勇気というものが、みっともないものということになってしまうだろう」と彼は言った、「とにかくそういう連中は、正気ではないのだから」

「そうするといったい」とぼくは言った、「あなたの言われる勇気ある人々とは、どのような意味なのでしょうか。ものをこわがらない人々のことではありませんか」

「その考えに変りはない」と彼。

C

「でも」とぼくは言った、「そのような、いま言った仕方でものをこわがらない人々は、明らかに、勇気があるというのではなく、正気を失っている者たちではありませんか？　他方、さっきの話では、かの最も知をそなえた人々が、また最ものをこわがらない人々でもあり、そして最ものをこわがらないからには、最も勇気のある人々なのでしょう？　こう論じてくると、知恵こそが勇気であるということになりますね？」

彼はこれに対して、次のように答えた。

(350)

「ソクラテス、君はさっき私の言った答を正しく覚えていないね。いかにも私は、勇気のある人々はものをこわがらないかと君からたずねられたからこそ、そうだと答えた。けれども、逆にまた、ものをこわがらない人々は勇気のある人々であるかとは、私はきかれはしなかった。あのとき君がそうたずねたのだったら、私は『必ず D しもすべてそうではない』と答えただろうからね、勇気のある人々はものをこわがらないということを否定して、私のあたえた同意が正しくなかったことを示すということは、君はどこでもしてはいないのだ。

それから、君は、知識をもっている人々が、知識をもたない前の自分よりも、また知識をもたないほかの人々よりも、いっそうものをこわがらないということを示し、それだけのことで、勇気と知恵とが同じものであると思っている。しかしこの論法で行くと、君は、強壮さとは知恵であると思うこともできるだろう。すなわち、君 E がいまのと同じ論のすすめ方で、強壮な人々は有能であるかと私にたずねる。私は、そうだと答えるだろう。つぎに、相撲（すもう）のとり方を知っている人たちは、その知識のない人たちとくらべて、また当人自身もそれを学んでからは学ばない前とくらべて、より有能であるかと、こうくる。私は、そうだと答えるだろう。そして、私がこれらの点に同意をあたえると、君はこの同じ証明法を使って、私の同意したところに従えば知恵こそが強壮さであると、こう言うことができるわけだろう。しかしながら、この場合においても、私は有能な人々は強壮な人々であるとは、どこでも同意していない。私が認めるのは、強壮な人々は有能であるということなのだ。なぜか。能 351 力一般と強壮さとは、ただちに同じものではないからである。能力のほうは、知識から生じることもあるが、また狂気や激情からも生まれるのに対して、強壮さとなると、生まれつきの体質と身体のよき養育をまたなければならないからである。

これと同じように、先の場合においても、こわがらないことと勇気とは、ただちに同じではない。だから、勇気のある人々はものをこわがらないということなら、たしかに言えるけれども、逆にものをこわがらない人々がすべて勇気のある人々であるとは、言えないことになる。なぜなら、こわがらないというだけなら、ちょうど能力一般の場合と同じように、人間は技術を身につけているからこわがらないこともあるが、それはまた狂気や激情に由来することもある。これに対して勇気のほうは、もって生まれた精神的素質と、精神のよき養育をまたなければならないものだからである」

B

三五

ぼくは言った、

「ところで、プロタゴラス、あなたは、人間たちのなかには善き生を送る者と、悪しき生を送る者とがあることを認めますか」

彼は肯定した。

「では、悩みと苦しみのうちに生を送るとき、人間は善き生を送ると思われますか」

彼は否定した。

「では楽しく一生を送って生涯を終える場合はどうでしょう。そうして送った生涯は、善き生であったことになると思えませんか」

「たしかにそう思う」と彼は言った。

(351)
C
「してみると、楽しく生きることは善いこと(善)、不快な生を送ることは悪いこと(悪)なのです」
「そう。ただし」と彼は言った、「立派な事柄を楽しみながら生きるならば、だがね」
「何ですって、プロタゴラス? まさかあなたまでが、多くの人々と同じように、ある種の楽しみは悪であり、ある種の苦しみは善であると呼ぶのではないでしょうね。私の言うのは、楽しいものは、それが楽しいものであるということだけに観点を置くかぎりは、善なのではないかという意味であって、そこから何かほかのことが結果するかどうかは、問題にしないのですよ? 苦痛についてもまた同じように、苦しいということだけに観点をおくかぎりは、悪なのではないかというのですよ?」
D
「さあね、ソクラテス」と彼は言った、「はたして君がきいているような単純な仕方で、楽しいものは何もかも善いもの、苦しいものは何もかも悪いものだと答えてよいものかどうか——。いや私としては、いま私のあたえるべき答のことだけでなく、私の残りの全生涯のことを考慮してみても、こう答えておくほうが無難なように思える。すなわち、楽しいもののなかには善でないものがあり、他方、苦しいもののなかにも、悪でないものもあれば、悪であるものもあり、第三番目に、善悪どちらでもないようなものもある、とね」
E
「で、楽しいものとあなたが呼ぶのは」とぼくは言った、「快楽を分けもっているものか、もしくは快楽を生み出すもののことではありませんか?」
「それはそうさ」と彼。
「ですから、楽しいものは、楽しいということだけに観点を置くかぎり、善なのではないかと私が言うのは、つまり快楽それ自体は善なのではないか、とおたずねしているわけなのです」

「君がいつも言うように、ソクラテス」と彼は言った、「それを考察してみることにしよう。そして、考察されるそのことが理にかなっているように思われ、快楽と善とが同じであると明らかになれば、われわれはそれを承認すべきだし、そうでなければ、そのときこそは異論をとなえるべきだ」

「では」とぼくは言った、「あなたがこの考察の先導役をひきうけていただけますか、それとも私がそうすべきでしょうか」

「君が先導するのが当然だろう」と彼は答えた、「この議論のきっかけをつくったのも君のほうなのだから」

352

そこでぼくははじめた、

「それでは、問題をはっきりさせるためには、こんなふうに考えてみてはどうでしょうか。たとえば人間の健康状態や、そのほか身体の働きぐあいなどを外診する場合、顔や手の先を見たあとで、よくひとは言いますね、『さあ、どうか胸も背中も出して見せてください。もっとはっきり診察できるように』と——。私がこの考察のためにお願いしたいのも、まあこれと同じようなことで、あなたの善と快楽に対する立場が、いま主張されたようなものであることを観察したわけですから、いま私は次のように言う必要があるのです。

B

——さあどうか、プロタゴラス、あなたのお考えのこの点も、出して見せてください。すなわち、知識というものに対するあなたの立場は、いかがなのでしょうか。これについてもあなたは、世の多くの人々と同様の見解なのでしょうか、それとも別でしょうか？　多くの人々は知識というものを、何か、強さも指導力も支配力もないようなものと見ています。知識について考える場合、彼らはけっしてそれをそういった性格のものとはみなしていない。たとえ人間が知識をもっているとしても、いざ実際に人間を支配するものは、しばしば知識ではなく

て何かほかのもの——あるときには激情、ときには快楽、ときには苦痛、ときには恋の情熱、またしばしば恐怖などであると、こう考えているわけです。つまり何のことはない、彼らの考えている知識というものは、いわば奴隷のように、他のすべてのものによって引っぱりまわされるものなのですね。はたしてあなたもまた、知識をこんなふうに見ていらっしゃるのでしょうか？　それとも、知識は立派なものであって、人間を支配する力をもち、いやしくもひとが善いことと悪いこととを知ったならば、何かほかのものに屈服して、知識の命ずる以外の行為をするようなことはけっしてなく、知恵こそは人間をたすけるだけの確固とした力をもっていると、このようにお考えでしょうか」

C

「いかにもそれが」と彼は言った、「私の見解であるというだけでなく、ソクラテス、同時にまた、およそ人間にかかわりのあるすべてのもののなかで、知恵と知識にまさるものはないと主張しないとしたら、余人はしらず、この私にとっては恥ずべきことだ」

D

「立派で正しいお言葉です」とぼくは言った、「ところでしかし、御承知のとおり、世人の多くは私とあなたの言うことに承服しないで、こんなことを主張しています。つまり、最善の事柄を知りながら、しかもそれを行なうことができるのに、そうしようとせずにほかのことをする人たちがたくさんいるというのです。そして私が、いったい何が原因でそんなことになるのかをたずねると、彼らがきまって言うことは、そのようにする人たちは快楽や苦痛に負けるからだとか、さっき私があげたような何かの力に屈服してそうするのだとかいうことです」

E

「そう、私も思うのだが」と彼は言った、「ソクラテス、世人というものは、ほかにもいろいろと間違ったことをよく言うからね」

353 「さあそれでは、この私といっしょに世人を説得して、よく教えてやるようにつとめてください——彼らの経験するこの状態、すなわち彼らの言うところによると、快楽に負け、そのために何が最善かを知りながら行なわないというこの状態は、そもそも何を意味するかを。なぜなら、たぶん彼らは、私たちが『諸君、君たちの言うことは正しくない、間違っている』と言うと、次のようにたずねてくるでしょうからね。『プロタゴラスにソクラテス、もしこの状態が快楽に負けるということではないとすれば、それならそれはいったい何なのですか。あなた方はそれを何であると主張なさるのですか？　どうか私たちに言ってください』と」

「何だってわれわれは、ソクラテス、世人大衆の意見などをしらべなければならないのかね。彼らの言うことなんか、口から出まかせのものにすぎないのに」

B 「私の見込みでは」とぼくは言った、「それをしらべれば、私たちが勇気について、その他の徳の部分とそれがいかなる関係にあるかを知るうえに、まんざら役に立たないこともないと思うのです。ですから、たったいま私たちが決めたように、この私が問題の解明に最善と信じる方向へ先導するということ、このことを忠実にまもったほうがよいと思われるなら、どうか私の先導に従ってください。もしその気がないのでしたら、あなたの意のままに、私はこれで打ち切りにします」

「いや、君の言うことはもっともだ」と彼は言った、「やりはじめたことを最後までつづけたまえ」

三六

C そこでぼくは言った、

「ではもう一度話をもとにもどして、私たちが彼らから『快楽への敗北とわれわれが言っていた事態、これをあなた方は何であると主張なさるのですか』とたずねられたとします。私なら彼らに向かってこう言うでしょう。

『ではよく聞きたまえ。君たちのために、この私とプロタゴラスが説明をこころみるから。いいかね、諸君、君たちの主張では、そういう事態を君たちが経験するのは、次のような場合なのではないかね。たとえば、よくあることだが、食べたり、飲んだり、肉欲にふけったりすることが楽しくて、その力に屈服し、悪いと知りつつ、なおそういったことを行なうというような場合なのではないかね』。——そうだ、と彼らは答えるでしょう。そこで私とあなたは、もう一度彼らにこうたずねることになるでしょう。

D 『君たちがそれらの行為を悪いことだと言うのは、どういう意味なのかね。それらの行為のひとつひとつが、その瞬間においてそういった快楽を提供し、快いものであるという理由によるのかね。それとも、あとになってから、病気や貧乏をもたらしたり、そのほか多くのよからぬことの原因になったりするからなのかね？　それとも、あとになってからそういったよからぬことを何ひとつもたらさずに、ただもっぱら楽しませるだけだとしても、それでもなお悪いものでありえただろうか——たとえいかなる仕方にせよ、とにかく楽しみを与えることがけしからんのだという理由で』

——はたして、プロタゴラス、私たちが彼らから期待できる答としては、それらのものが悪であるのは、快楽

E そのものをその瞬間においてつくり出すからではなく、あとになって生じる病気その他のいろいろの事態のゆえに悪なのだ、という以外に考えられるでしょうか？」

「たしかに私は」とプロタゴラスは言った、「世人の多くはそう答えるだろうと思う」

「『では、それらのものが病気をもたらすということも、貧乏をもたらすということも、結局は苦痛をもたらすということなのではないか』。——彼らはこれに同意するだろうと思うのですが」

プロタゴラスも賛成した。

「『それなら、諸君、君たちにもはっきりわかるのではないかね、まさに私とプロタゴラスが主張するとおりだということが。すなわち、それらの快的な事柄が悪であるのはほかでもなく、ただ結果として苦痛に終るからであり、ほかのいろいろな快楽をうばうという理由によるのではないかね』。——彼らはこれに同意するでしょうね？」

354

ぼくたちの考えは二人とも同じであった。

「では、もう一度こんどは反対のことを、彼らにたずねるとします。『諸君、君たちはまた、善い事柄が苦しいとも言っているが、それは次のようなもののことを言っているのではないかね。たとえば、体育とか、従軍とか、また医者が焼いたり、切開したり、投薬したり、絶食療法をしたりして行なう治療のようなもの。——こういった事柄をさして、それらは善いことではあるが苦しいことだと言うのではないか』。——そうだ、と彼らは言うでしょうね？」

プロタゴラスも賛成した。

B

「『では、君たちがそういった事柄を善と呼ぶのは、次のどちらの理由によるのだろうか。それらの事柄が、その瞬間において極端な苦痛や苦悩をあたえるからなのか。それとも、それらの事柄から後になって、健康とか、

いろいろの肉体的好条件とか、国の安全とか、他に対する支配とか、富とかいったものが結果するからなのであろうか』。——後者に彼らは同意するだろうと思いますが」

プロタゴラスも賛成した。

C 「『そしてそれらの事柄が善であるのは、ほかでもなく、ただ結果として快楽に終るからであり、さまざまの苦痛から解放され、苦痛を防止することになるからではないか。それとも君たちは、君たちがそれらの事柄を善と呼ぶ場合に目を向ける窮極の理由として、快楽と苦痛以外に何かあげることができるかね』。——できない、と彼らは答えるだろうと思うのですが」

「私もそれはできないと思う」とプロタゴラスは言った。

「『すると君たちは、快楽を善きものとみなして追いかけ、苦痛を悪しきものとみなして避けるのではないか』」

彼も賛成した。

「『してみると、君たちが悪と考えているのは結局、ほかならぬ苦痛のことであり、善と考えているのは快楽のことなのだ。なぜなら、楽しむことそれ自体までも君たちが悪と呼ぶことがあるのは、いかなる場合かというと、それは、その行為自身が直接もっている快楽よりもさらに大きな快楽が、それによってうばわれるような場合、あるいは、それ自身の内にある快楽よりもさらに大きな苦痛が、それによってもたらされるような場合なのD だから。事実、もし君たちがこれ以外の根拠にもとづき、窮極の理由としてこれ以外の何かに目を向けながら、楽しむことそれ自体を悪と呼んでいるのであれば、君たちはそれをわれわれにも言えるはずだが、しかしそうすることはできないだろう』」

「私にも、彼らがそれを言えるとは思えない」とプロタゴラスは言った。

「『では逆に、苦しむことそれ自体についても事情は同じではないか。苦しむことそれ自体を君たちが善と呼ぶのは、そこに直接ふくまれる苦痛よりもさらに大きな苦痛が、それによって取り除かれる場合か、あるいは、直接の苦痛よりもさらに大きな快楽が、それによってもたらされる場合か、そのどちらかではないかね。なぜなら、苦しむことそれ自体を善と呼ぶとき、もし君たちが窮極の理由として、ぼくの言う以外のことに注目しているのであれば、君たちはそれをわれわれに言うことができるわけだが、しかしそれはできないだろう』」

E

「君の言うとおりだ」とプロタゴラスは言った。

〔ぼくは世人に対する語りかけをつづけていった。次のように――〕

「では、もう一度もとにもどって、諸君、かりに君たちがぼくにこうたずねたとしよう。

『いったいぜんたい何のためにあなたは、そんなことについて、いろいろとたくさんのことをああだこうだとおっしゃるのですか？』

355

大目にみてくれたまえ、とぼくは答えるでしょう。なぜなら、まず第一に、君たちが快楽に負けると呼んでいる事態が、そもそも何であるかを示すのは容易なことではないのだし、さらには、その証明のすべては、いま述べているこの点にかかっているのだからね。しかし、もし君たちが何らかのかたちで、善とは快楽のことではなく、何かほかのものであり、悪とは苦痛のことではなく、何かほかのものであると主張することができるなら、いまでもまだ遅くはない、前の主張を撤回してもらってかまわないのだよ。それとも君たちは、諸君の人生を苦痛なしに、楽しく生きおおせることで満足するかね？　もしそれで満足ならば、そして何かほかに、窮極においい

てこれら快と苦につながらないようなものを、善もしくは悪として主張することができないならば、この先をよく聞きたまえ。

いいかね、ぼくが諸君に言いたいのは、もし以上のことが事実だとすれば、君たちの次のような説はおかしなことになるということなのだ。つまりそれは、君たちが、『ひとはしばしば、悪を悪と知りながら、しかもなお、

B

それをしないでいることができるのに、快楽にいざなわれ快楽に目がくらんで、それらの悪いことを行なう場合がある』と言うときのことだ。さらに他方、君たちは、『人間は善い事柄を知っていながら、その瞬間の快楽に打ち負かされて、それを行なおうとしないものだ』とも言うようだね。

三七

こういった説がどんなにおかしなものかということは、次のようにすればはっきりとわかるだろう。すなわち、『快い』『苦しい』『善い』『悪い』というたくさんの名称を同時に使うことをやめて、これらが結局二つのものに帰着することが明らかになったのだから、名称のほうもまた二つに限定して、最初は『善』と『悪』という言

C

葉だけを使い、つぎに今度は『快』と『苦』だけを使ってみればよいのだ。さあ、こういうふうに決めたうえで、『人間は悪を悪と知りながら、にもかかわらず、それを行なう』と言うことにしよう。かりに誰かがわれわれに、

『なぜそんなことになるのか?』

とたずねたとしたら、『打ち負かされて』とわれわれは言うだろう。

『何によって?』

とその人はたずねるだろう。だがこの場合、『快楽によって』と答えることは、もはやわれわれには許されないわけだ。なぜなら、それは名前をとりかえて、『快楽』の代りに善という他の名称をあたえられているからだ。だからわれわれは、こう答えて言うことにしよう、『打ち負かされて――』と。

『何によって？』

と相手は言うだろうが、これに対しては『善によって』というのが、ゼウスに誓って、われわれの答とならざるをえないだろう。そこでもし、われわれに対するこの質問者が、たまたま口の悪い男だとしたら、きっと嘲(わら)ってこう言うことだろう。

D

『これはなんと、おかしなことを君たちは言うね。悪を悪と知りながら、する必要もないのに、善に打ち負かされて悪を為す者がいるって？――いったいそれは、その善というのが君たちの心の中で、悪に打ち克(か)つだけの価値をもっていないからなのかね。それとも、もっているからなのかね？』

疑いもなく、われわれはこれに答えて、『悪に打ち克つだけの価値をもっていないからだ』と言うべきだろう。なぜなら、もしそうでないなら、われわれの言う『快楽に負けた人』は、過ちをおかさなかっただろうからね。

『しかし』とおそらく相手は言うだろう、『善が悪に匹敵するだけの価値がないとか、悪が善に匹敵しないと

E

かいうのは、どのような観点から言うことなのだろうか。その観点としては、一方がより大きく他方がより小さいという場合、あるいは一方がより多く他方がより少ないという場合以外に何か考えられるかね？』

われわれは、それ以外にほかの観点をあげることはできないだろう。

『してみると明らかに』と相手は言うだろう、『君たちが負けると言っていることの実際の意味は、より少な

い善の代りに、より多くの悪をとる、ということなのだ』

たしかにそういう結論になってしまうわけだ。では、もう一度名前をとりかえて、同じこれらのものに対して、今度は『快』と『苦』という名をあたえることにしよう。そのうえで次のように言うことにしよう。

『人間は――悪を、とさっきは言っていたわけだが、今度は苦という言い方をすることにして――苦しい事柄を、それが苦しいことであると知りながらも、快い事柄に負けて、それも明らかにほんとうは勝つだけの価値のない快に負けて、その苦しい事柄を行なうものだ』

356 そして、快と苦をくらべて『……だけの価値がない』ということは、両者相互間の超過と不足ということ以外に、どんな意味がありうるだろうか。しかるにこのことは、両者が互いに相手より大きくなったり小さくなったり、多くなったり少なくなったり、強くなったり弱くなったりする場合のことにほかならないのである。事実、もし誰かが、

『しかし、ソクラテス、その瞬間における快楽は、後になって起る快や苦とくらべて、たいへんな差異があるではないか』

と言うならば、ぼくはこう主張するだろうからね。――差異といっても、よもや快楽と苦痛以外の何らかの点 B で差異があるというのではあるまい？　他に差異のある点はないはずだから。いな、君は、ちょうど目方を計るのが上手な人のするように、快と苦とをそれぞれまとめて秤(はかり)にかけ、さらにこの秤のさおに、近さと遠さの分銅を乗せて、そのうえでどちらの側が重いかを言うことにしたまえ。つまりそのようにして、快と快との目方をくらべる場合なら、目方のより大きくより多いほうをつねにとるべきだし、苦と苦をくらべる場合なら、より少な

くより小さいほうをとるべきだ。また快と苦との目方をくらべる場合なら、快の重さが苦の重さを超過すれば、近い苦痛が遠い快楽に負けるにせよ、遠い苦痛が近い快楽に負けるにせよ、それにはかかわりなく、その重いほうの快楽をもつ行為を行なうべきだし、逆に苦の重さが快の重さを超過すれば、行なうべきではないのだ。

C ……こういった事柄について、いったいこれ以外のことが考えられるかね、諸君？——と私は言うでしょう。彼らが異論をとなえることができないのはよくわかっています」

プロタゴラスもまたそう思うと言った。

「『では、これがこのとおりだとすれば、次のことをぼくに答えてくれたまえ』と私は言うでしょう、『君たちは、同じ大きさのものが肉眼には、近くから見ればより大きく、遠くから見ればより小さく見えるということを経験しはしないかね？』

彼らは肯定するでしょう。

『厚さや数量についても同じだね？　また、同じ大きさの声が、近くで聞けば大きく、遠くで聞けばより小さく聞えるだろうね？』

そうだ、と彼らは言うでしょう。

D 『では、もしかりにわれわれの幸福が、長いものを選んで行ない、短いものを避けて行なわないということに依存するとしたならば、われわれは、生活を安全に保つものを何に見出しただろうか。計量の技術だろうか、それとも、目に見えるがままの現象が人にうったえる力だろうか？——後者はわれわれを惑わし、同じものをしばしばあべこべに取り違わせ、行為においても大小の選択においても、しまったことをした、と思わせる因となりもと

E

るものではなかったかね。これに対して、計量の術は、もしそれを用いたならば、このような目に見えるがままの現象から権威をうばうとともに、他方、事物の真相を明らかにすることによって、魂がこの真相のもとに落着いて安定するようにさせ、もって生活を保全しえたところのものではないかね』

はたして世人たちは、こういったことを考慮したうえで、われわれを保全するのは計量の技術であることに同意するでしょうか。それとも、ほかの技術だと言うでしょうか?」

「計量の技術であると答えるだろう」と、プロタゴラスはぼくの言うことに同意した。

「『では、かりにわれわれの生活の安全が、奇数と偶数の選択に依存すると仮定して、同類の数どうしをくらべ、あるいは奇数と偶数とをくらべて、それが近くにある数にせよ遠くにある数にせよ、とにかくどのようなときにより多いほうを、どのようなときにより少ないほうを正しく選ぶべきかによって、生活が左右されるとしたらどうだろう。その場合、われわれの生活を安全に保つのは何であろうか。知識ではないだろうか。それも、計

357

量術の一種としての知識ではないだろうか――この技術は、超過と不足をとり扱うものなのだからね。そしてこの場合は、奇数と偶数を扱わなければならないのだから、それは算数にほかならないのではないか』――人々は私たちに同意するでしょうか。どうでしょう?」

プロタゴラスもまた、人々がこれに同意するだろうということに賛成した。

「『よろしい、諸君。ところで実際には、われわれにとって生活を安全に保つ途は、快楽と苦痛を正しく選ぶ

B

こと、その多少、大小、遠近を誤たずに評価して選ぶことにあることが明らかになったのであるから、そこに要求されるものは、まず第一に、計量の技術であることは明らかではないだろうか。それは、相互のあいだの超過

と不足と等しさとをしらべるものなのだから』
むろん、そうでなければならないでしょう。
『そして、計量術である以上、それは必然的にひとつの技術であり知識でなければならないだろう』
彼らはこれを認めるでしょう。
『では、これがどのような技術であり、どのような知識であるかということは、あらためてまた考察すること

C

になるだろう。しかし私とプロタゴラスとが諸君の質問に関連して行なわなければならない証明のためには、それがとにかくひとつの知識であるということだけわかれば充分なのだ。諸君の質問というのは——おぼえているかね——次のようなものであった。すなわちわれわれが、知識より強いものは何もなく、知識のあるところ、いかなる場合であろうと、快楽に対してもほかの何に対してもつねに打ち克つということを、お互いに同意した際であったが、君たちはこれに対して、知識をもった人でもしばしば快楽に負けることがあると主張したのだった。そしてわれわれが君たちに同意しなかったので、諸君はつぎにわれわれに向かってこうたずねたのだ。プロタゴラスにソクラテス、もしこの状態が快楽に打ち負かされることではないとするなら、いったいそれは何であり、あなたがたはそれを何だとおっしゃるのですか。どうか私たちに教えてください、とね。

D

——さて、もしあのときに、諸君に向かってわれわれがただちに、それは無知である、と答えたとしたら、きっと諸君はわれわれをわらったことだろう。しかしいまは、諸君がわれわれをわらうとしたら、それは君たち自身をわらうことにほかならないだろう。なぜなら、君たちもまた、快苦——とはすなわち善悪なのだが——の選択について過ちをおかす人々があるとすれば、それは知識を欠いているから過つのだということに、ちゃんと同

意したのだからね。おまけに、ただ知識の欠如というだけでなく、その場合に欠けている知識とは計量術にほかならないということまで、先に同意してくれたのだ。しかるに、知識を欠いておかされた過ちの行為なら、それは無知によって為されるのだということぐらい、君たち自身でもわかるだろう。

したがって、快楽に負けるとは何を意味するかというと、それは結局最大の無知にほかならないことになるのである。ここにいるプロタゴラスやプロディコスやヒッピアスは、自分こそはこの無知を癒す医者であると主張しているわけだ。それなのに君たちは、それが無知ではなくて何かほかのものであると思っているものだから、教えられることのできないものだと決めこんで、そうした事柄の先生であるこれらソフィストたちのところへ自分でも行こうとしないし、諸君の子供たちをやろうともしない。金のことばかりけちけちと心配して、この人たちに支払うのをいやがっているが、それこそ個人的にも公共的にも間違ったふるまいというものだ』

三八

まずこういったところで、世の多くの人々に対する私たちの答は尽くされたことでしょう。さて今度は、ヒッピアスにプロディコス、あなたがたに向かって私はプロタゴラスとともにおたずねしたいのですが――これからの議論にあなた方もいっしょに答えていただきたいので――、あなた方には、私の言っていることが真実であると思えますか、間違っていると思えますか」

彼らはみな、これまでぼくの言ったことが非常に真実であると賛成してくれた。

「ではあなた方は、快が善であり、苦が悪であることに同意してくださるのですね。――ただし、ここにおい

でのプロディコスがするような、いろいろの名称を区別して使うことは、どうぞかんべんしてください。あなたのお使いになる言葉が『快』であれ、『楽』であれ、『悦』であれ、あるいはこういった事柄をどこからどんなふうに呼ぶのがお気に召すにせよ、どうかすぐれたプロディコス、ただ私の意図だけをくんで答えてくださいませんか」

B

するとプロディコスは破顔一笑、ぼくの言ったことを承知してくれた。そしてほかの人々も。

「ではみなさん」とぼくは言った、「この点はいかがでしょう。——苦しみなしに快く生きること、こういう結果に導くようなすべての行為は、立派な行為ではないでしょうか。そして、立派な仕事は、善にして有益な仕事ではありませんか」

彼らは賛成した。

「だとすると」とぼくは言った、「もし快が善であるなら、何びとも、自分がしていること以外にもっと善いことがあって、しかもそれが自分にできることであると知りながら、あるいはそう思いながら、しかもなお、もっと善いことが可能であるのに、依然もとの行為をつづけるというようなことはしないでしょう。そしてこの『自己自身に負ける』ということは、まさしく無知にほかならず、『自己自身に打ち克つ』とはまさしく知にほかならないでしょう」

C

みんなこれに賛成した。

「では無知とは何でしょう。それは、重大な事柄について間違った考えをもち、誤りをおかすことを言うのではありませんか」

これにもみんな賛成した。

「そうすると」とぼくは言った、「悪――ないしは悪と思う事柄――のほうへ自分からすすんでおもむくような者は、誰もいないのではありませんか。また思うにそのようなことは――もともと人間の本性の中にはないのではありませんか。そして、二つの悪のうちどちらかを選ばなければならないときに、小さい悪を選ぶことができるにもかかわらず、より大きいほうの悪をとるような者は、誰もいないのではありませんか」

D

これらのことは全部、われわれすべての賛同をえた。

「ところで、どんなものでしょう」とぼくは言った、「あなたがたが『おそれ』とか『こわさ』とか呼ぶところのものがありますね？　そしてそれは、この私がそう呼んでいるものと同じでしょうか。これはとくに、プロディコス、あなたにおききしたいことなのですがね。私は、悪い事柄に対する一種の予期のことを言っているのです。それをあなたがたが『こわさ』と呼ぶか『おそれ』と呼ぶかは別として」

プロタゴラスとヒッピアスは、ぼくの言っているのが『おそれ』であり『こわさ』であることをみとめたが、

E

プロディコスは、それは『おそれ』ではあるが『こわさ』ではないと言った。

「いや、プロディコス」とぼくは言った、「その点はどちらでもかまいません。肝心なのは、これからおたずねすることです。――もし以上に言われたことに間違いなければ、世にはたして、自分がおそれない事柄へおもむくことができるのに、あえておそれる事柄へ向かおうとする者が誰かいるでしょうか。それとも、以上に同意されたことから考えて、それはありえないことというべきでしょうか。なぜなら、ひとは自分がおそれる事柄を

悪とみなしていること、しかるに、悪とみなす事柄へおもむいたり、自分からすすんでそれを選んだりする者は誰もいないこと、これだけのことがすでに同意されているのですから」

これにもみんな賛成した。

359

三九

「さあそれでは、プロディコスにヒッピアス」とぼくはつづけた、「以上の事柄をこうして前提として認めたうえで、プロタゴラスが最初に答えたことがいかにして正当であるかを、この人に弁明してもらうことにしましょう。といっても、この人がそもそものいちばん最初に答えたことではありません。あのときには[1]、彼は、徳の部分をなすものが五つあるなかで、そのどれひとつとして他の部分と同じような性格のものはなく、それぞれが独自の機能をもっていると、このように主張していました。しかし、私の言うのはそれではなく、もっとあとで[2]プロタゴラスが言ったことです。すなわち、もっとあとで彼はこう言いました、――徳の部分のうち四つは互いにかなり近しいものであるが、ただ、一つだけほかのものと非常に違ったのがある。それは勇気だ、と。そして、次のような証拠によってその点が私にわかるだろうと言われたのです。

B

『すなわち、ソクラテス、世には、並はずれて不敬虔、不正、放埒、無知な人間でありながら、ただ勇気だけはとくに衆にぬきんでているというような人々がいることを、君は見出すだろうから。この事実こそは、勇気が

1 330 A sqq.　2 349 D sqq.

他の徳の部分とは大いに異なったものだということを君に教えるだろう』
私はそのときすぐに、その答にたいへん驚きました。あなた方といっしょに以上の事柄をくわしく論じた今では、なおさらそうです。それはともかくとして、私はこのプロタゴラスに、勇気のある人々というのは、ものをこわがらない人々のことかとたずねました。『そうだ、猛進する人々でもある』というのが、この方の答でした。

C

――プロタゴラス、あなたはこのようにお答えになったのを、おぼえていらっしゃいますか？」
おぼえている、と彼は認めた。
「さあそれでは」とぼくは言った、「どうか私たちに言ってください。――勇気のある人々は、何に向かって猛進する人々だと言われるのですか。それは、臆病な人々が向かうところのものと同じでしょうか」
ちがう、と彼は言った。
「では別のものに向かうわけですね」
「そのとおり」と彼。
「臆病な人々はこわくないものへ向かい、勇気のある人々はおそろしいものへ向かうのではありませんか」
「たしかに、ソクラテス、世人はそう言っているね」

D

「おっしゃるとおりです」とぼくは言った、「しかし、私がおたずねしているのはそんなことではなく、あなたは勇気のある人々が何に向かうと主張されるのか、ということです。はたして、おそろしいものへ向かって行くのでしょうか――それがおそろしいものであると考えながら。それとも、おそろしくないものに向かうのでしょうか」

「いや、前者のようなことは」と彼は言った、「君が述べた所説の中で、不可能であると証明されたばかりだ」

「その点もおっしゃるとおりです」とぼくは言った、「ですから、その証明が正しかったとすれば、何びとも自分がおそろしいと考えるようなものへは、向かって行かないということになります。なぜなら、自己自身に負けるとは、無知にほかならないとわかったのですから」

プロタゴラスはこれに同意した。

「しかし、何もこわくないようなものへなら、臆病な人々であろうが勇気のある人々であろうが、誰でも同じ E ように向かって行きます。そしてこの点に関するかぎりでは、臆病な人々と勇気のある人々とは同じものに向かうわけです」

「しかしとにかく、ソクラテス」と彼は言った、「臆病な人々が向かうものと、勇気のある人々が向かうところのものとは、やはり全く正反対といわなければならぬ。早いはなしが、戦争を例にとっても、一方はすすんで戦争に行こうとするが、他方は行こうとしないではないか」

「いったいその場合」とぼくは言った、「戦争に行くということは、立派なことなのでしょうか、醜いことなのでしょうか」

「立派なことだ」と彼。

「立派なことである以上、また善いことでもあるとは、先の議論のなかで私たちが同意したところでしたね。立派な行為はすべて善き行為であると同意したのですから」

「君の言うとおりだし、またそれが、つねに変らぬこの私の見解なのだ」

360

「ごもっとも」とぼくは言った、「ところで、戦争へ行くのが立派で善いことであるのに、行くのをいやがるのは、あなたの主張では、どちらの種類の人々でしたかしら？」

「臆病な人々だ」と彼。

「では」とぼくは言った、「立派で善いことである以上、また快いことなのではありませんか」

「とにかく、すでにそのように同意されているからね」と彼は言った。

「では、はたして臆病な人々は、みずからそれと知りつつ、より立派でより善くより快いものへ向かって行こうとしないのでしょうか」

「いや、その点もやはり」と彼は言った、「われわれがいまそれを認めると、先に同意された事柄をぶちこわすことになるだろう」

「では、勇気のある人々のほうはどうでしょう。彼らは、より立派でより善くより快いものへ向かって行くのではありませんか」

「それはどうしても」と彼は言った、「同意しなければならないことだ」

B

「全般的に言って、勇気のある人々というものは、おそれをいだく場合があるとしても、醜いおそれ方をするようなことはなく、向こうみずになるときも、その向こうみずはけっして醜くはないのではありませんか」

「そのとおり」と彼。

「醜くないとすれば、立派なのではありませんか」

彼は同意した。

「立派だとすれば、また善いものでもあるのですね」
「そう」
「ではこれと反対に、臆病な人々にしても、蛮勇（ばんゆう）を発揮する人々にしても、気の違った人々にしても、そうした連中の恐怖や向こうみずは醜いものなのではありませんか」
彼は同意した。
「しかるに、醜悪な向こうみずさを発揮するというのは、ほかでもない、愚かさと無知のしからしめるところなのではありませんか」
「そのとおりだ」と彼。
C
「ところで、臆病な人々をまさに臆病な者たらしめているもの、それをあなたは何と名づけますか。臆病さですか、勇気ですか」
「むろん。臆病さと呼ぶよ」と彼は答えた。
「しかるに、臆病な人々が臆病であるのは、何がおそろしいものであるかということに関する無知によるのだとわかったのではありませんか」
「たしかに」と彼。
「とすると、この無知こそは、彼らを臆病にしているものなのですね」
彼は同意した。
「しかるに他方では、彼らを臆病な者たらしめているものは臆病さであると、あなたは同意しましたね」

そうだ、と彼は言った。

「すると結局、おそろしいものとおそろしくないものに関する無知こそが、臆病さにほかならないということになりませんか」

彼はうなずいた。

「しかるに」とぼくは言った、「勇気と臆病さとは反対のものですね」

D

そうだ、と彼は言った。

「さらに、おそろしいものとおそろしくないものに関する知恵は、それに関する無知と反対のものですね」

ここでもなお彼はうなずいた。

「そして、それに関する無知は臆病さなのですね」

今度はやっと不承不承、彼はうなずいた。

「してみると結局、おそろしいものとおそろしくないものに関する知恵こそが、勇気なのだということになりますね。それに関する無知と反対のものなのですから」

今度はもはや彼はうなずこうともせず、口をつぐんだままでいた。そこでぼくは言った、

「どうなさったのですか、プロタゴラス、私の問に対して、そうだともそうでないとも言ってくださらないのですか？」

E

「君が自分で片をつければいいではないか」と彼は答えた。

「ええ」とぼくは言った、「ただその前にもう一つだけ、あなたにおたずねしておきたいのですが、あなたはい

までもやはり、最初のときと同じように、世には最も無知な人間でありながら、勇気だけは誰にも負けないような者がいるとお思いですか？」

「いやにしつこく」と彼は言った、「この私に答え手の役を押しつけようとするようだね、ソクラテス。よし、それなら君をよろこばせてやろう。——すでに同意されたことから考えて、そのようなことはありえないと思うと、こう言っておくよ」

四〇

ぼくは言った、

「私がこういったすべてのことをおたずねするのは、けっして他意あってのことではありません。ただもっぱら、徳に関する諸問題を考察するとともに、徳それ自体がそもそも何であるかを考えてみたかったからなのです。というのは、私にはわかっているからです——それさえ明らかになれば、〔徳は教えられるかという〕さっきの問題も、最もよく解明されるにちがいないだろうと。私たちはその問題について、私のほうは徳が教えられることのできないものだと言い、あなたのほうは教えられるものだと言いながら、めいめいが長い議論をくりひろげたのでしたね。そしてどうも私には、私たちがたったいま到達したこの議論の結末が、何かまるで人間のような顔をして私たちをなじり、からかっているような気がしてなりません。もしそれがものを言うことができたら、さだめしこんなことを言うことでしょう——

『そろいもそろって変り者だね、君たちは、ソクラテスにプロタゴラス。君のほうは、はじめのうちは徳は教

361

えられないのだと言っていたくせに、いまではカンカンになって自分の言ったことに反対し、正義も節制（分別）

B も勇気も、いっさいがっさいが全部知識であることを証明しようとつとめている。そんなことを証明するのは、徳が教えられうるものだということを、何よりもいちばんよく明らかにすることにほかならないだろうに。なぜなら、もし徳というものが知識とは別のものだとしたら――ちょうどプロタゴラスが言おうとしていたようにね――、明らかにそれは、人に教えることのできるものではないということになるだろう。しかし、げんに君が力説してやまないように、ソクラテス、徳とは全体として知識だということが明らかになろうものなら、それを人

C に教えることができなければ不思議千万だろうよ。――他方プロタゴラスはプロタゴラスでまた、さっきは徳が教えられうるものだと決めてかかっていたのに、今では反対に、それが何でもいいから、とにかく知識以外のものであることが明らかになればよいと、懸命になっているように見うけられる。これもまた、もしそのとおりだとしたら、徳が教えられる可能性はほとんどなくなってしまうだろうにね』

私としては、プロタゴラス、すべてがこんなふうに上を下へとおそろしく混乱しているのを見ては、なんとかしてこれを明確にしたいと思わずにはいられません。そしてできうれば、私たちは以上の議論ののちに、さらに徳とは何であるかという問題にも向かって行って、そのうえであらためて、それが教えられうるか否かを考え直

D してみたらと思うのです。例のエピメテウスが、あなたのお話によると(1)、装備の分配にあたってわれわれ人間のことを忘れてしまったのと同じぐあいに、もしかしてこの考察においても、私たちを欺いて失敗させることがあっては一大事ですからね。あのあなたの物語のなかでも、エピメテウスよりもプロメテウスのほうが私の気に入りました。私がすべてこういった事柄の考察に一所懸命になっているのは、そのプロメテウス（予めの考察）に従

って、自分の全生涯のために予めの考慮をめぐらしているわけなのです。そして、はじめにも言いましたように、あなたさえその気になってくださるなら、私がこうした考察にあたっていっしょにお力ぞえをねがいたいのは、誰よりもまずあなたなのです」

E

プロタゴラスは言った、

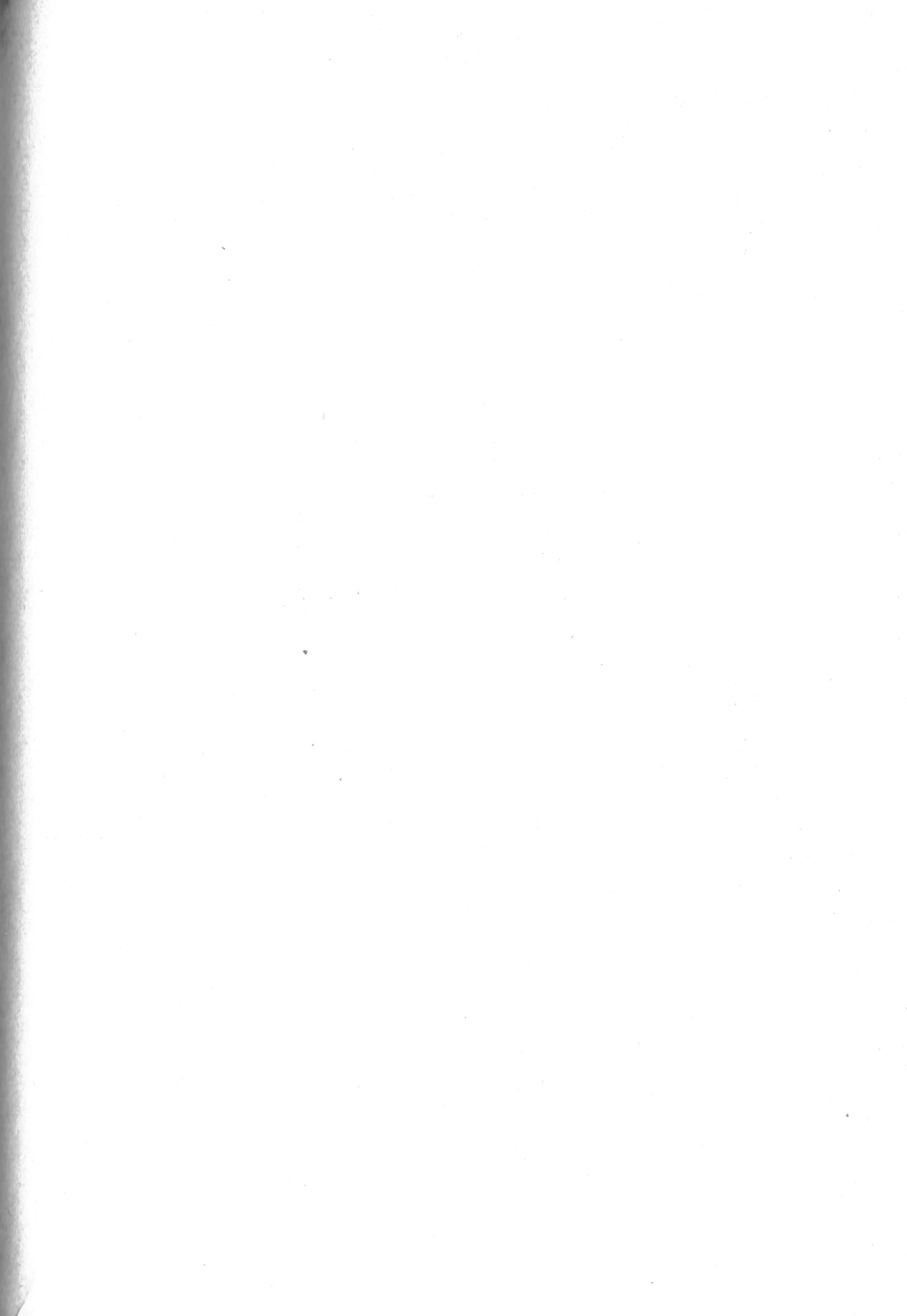
「私としては、ソクラテス、君のその熱意と議論のすすめ方を賞讃したい。私は自分がほかの点でもけっして悪い人間ではないつもりだが、とくに人を嫉(ねた)むという点では、世に私ほどそういう気持から縁遠い者はいないだろうからね。げんに君のことにしても、私の出会う人間のなかで私が誰よりもずっと感心するのは君だ、君と同年輩の者のなかではとくにそうだということを、すでにたくさんの人々に向かって話したものだよ。そして、言っておくけれども、君がいまに知恵にかけては有数の人物のひとりになったとしても、私はけっして驚かないだろう。ところで、いまとりあげていた問題だが、これはまたあらためて、君の都合のよい機会をみつけて論じることにしよう。いまはもう、ほかの用事にかからなければならない時間だ」

362

「ええ、そういたしましょう」とぼくは言った、「あなたがそう思われるのでしたら。それに私のほうも、もうだいぶ前から、さっき私が言っていたところへ行かなければならない時間が来ているのですから。私はただ、美しきカリアスの意を迎えてここにとどまっていたわけなのです」

——こういった言葉をとりかわしてから、ぼくたちはそこを立ち去った。

---

1 321C

『エウテュデモス』解説

山本光雄

一

この対話篇はかつてプラトンの真作であることを否定されたことがあるが、しかしアリストテレスの証言によってそれの真作であることは確かである。彼は『エウデモス倫理学』(1247b15)で、「ソクラテスが言ったように、あるいはまた知識もすべて仕合せであることになろう」という言葉で、この対話篇(279D)に疑いもなく言及しているし、また『詭弁論駁論』(166a13)でも同じように、この対話篇の争論術(特に300B〜C)に言及しているように思われる。それに用語と言い、思想と言い、芸術的表現と言い、どれ一つとしてプラトンの名にふさわしからぬものは見出されない。これは後で述べるように、いわば一種の喜劇である。一般に、プラトンの初期の対話篇は、多くが見方によっては、喜劇的要素を多少とも持っていると言えるが、この対話篇は特に喜劇的であって、プラトンはそのことをもともと意図していたと思われる。

この対話篇の執筆年代はいわゆる初期、それもその期の後の方に『メノン』などと一緒に属すると考えられる。

登場人物

クリトン(Criton)　ソクラテスと同年輩でまた同区に属し、彼の親友である。同名の対話篇では獄中のソクラテスに一身

の危険を顧みず脱獄をすすめている。また『ソクラテスの弁明』(38B)では、ソクラテスの裁判に出席して、彼に三〇ムナの罰金刑を申出ることをすすめた人々の一人に、『パイドン』では彼の死刑のさいに居合わせた人々のうちに数えられている。彼は富裕な地主で、農業に従事し、傍ら学問にも興味を有して相当の教養をつんだ紳士である。『ディオゲネス・ラエルティオス』第二巻一二章にはソクラテスの生活を保証し、また書物を著したことがその書名と共に伝えられているが、真偽のほどはわからない。

ソクラテス(Socrates)

ディオニュソドロス(Dionysodoros)、**エウテュデモス**(Euthydemos)　両人に関する主要な資料は本篇の外にはない。彼らの生死の年代は明瞭でないが、だいたいソクラテスと同年代の人と見てよかろうと思う(271B〜D)。生国はキオスであったが、後トゥリオイに移住した(271C)。この移住の年代は271C注6で見られるように、前四四三年であったようである。このトゥリオイにおいてはプロタゴラスもこの植民市のために法律などを作って活動しているようである(Diog. L. IX. 50)から、彼ら両人はこのソフィストと直接の関係を持ったものとも想像される。そして彼らが老年になって手に入れたと言われている争論術もプロタゴラスの説から、あるいは彼らが発展させたのかも知れない。彼らの争論術はプロタゴラス一派の説との関連において、本篇286Cでも、また『クラテュロス』386Dでも語られているのである。しかし、また彼ら以外にも争論術をもち、かつ教えた者もいるのであるから、またそういう人々から学んだのかも知れない。彼らの争論術そのものが如何なるものであるかは本篇が遺憾なく示してくれるであろう。しかしこの両人がここで描かれている通りのものであったかどうかについては、なお疑問が存し得る。おそらくそこには対話篇作成の技法や目的の上からなされた誇張が多分に含まれていることであろう。この両人のうち、ディオニュソドロスが兄であり、エウテュデモスが弟であることは、283Aに示されている。なお、ディオニュソドロスについては、クセノポンが『ソクラテスの思い出』第三巻(一)において、エウテュデモスについてはアリストテレスが『詭弁論駁論』(177b12)、『弁論術』(1401a27)において簡単に触れている。

クレイニアス(Cleinias)　有名な政治家アルキビアデスの兄弟アクシオコスの息子であった。この一門はペリクレスの親類筋に当り、貴族で富豪であった。本篇ではクレイニアスは内気で美しい悧口な少年として現われている。『プロタゴラス』

の320Aおよびその他において挙げられているクレイニアスとはおそらく別人であろう。

クテシッポス(Ctesippos)　ここではクレイニアスの愛人で、頭の鋭い怒りっぽい青年として描かれている。「若いということによって傲慢だが、その点を除くと、その他の性質はまことに立派で見上げたものだ」という批評が273Aでソクラテス自身によってされている。なお『リュシス』にも登場し、『パイドン』ではクリトンなどと一緒にソクラテスの臨終に居合わせた人々の一人になっている。

対話篇の構成は、ソクラテスが老友クリトンに昨日リュケイオンで新来の争論家エウテュデモスとディオニュソドロス兄弟およびクレイニアスとその愛人クテシッポスとした問答の模様を話して聞かせる形式になっているが、当のソクラテスとクリトンの間でもその問答に関連して、さらに問答をするという具合になっていて、巧みな面白い構成である。

設定された場景の年代については、正確なところは定め難い。問答の中で、ソクラテスはもう老人であることが示されている(272B~C, 285C, 293B参照)。テイラーは五〇歳前後と見ている(*Plato*, pp. 90-91)。これでは、先の括弧中の箇所から受ける印象に比べると、少々若すぎる感じがするが、ソクラテスのその箇所での言葉も一種の皮肉だとも解されるし、テイラーの説くところにも一理あるので、それに従っても差支えない。そのことによって、この対話篇を理解する上で別に大したことも生じてこないように思う。

二

本篇は言わば喜劇である。その構成の上から見ても、その人物描写の上から見ても、優れた喜劇である。序の一幕(第一―三章)と中間の一幕(第一八―一九章)と最終の一幕(第三〇―三二章)とには老ソクラテスとその老友クリ

トンが配されているが、この両人の隔意なき対話を通じて間接に本筋の芝居をうかがうと同時に、両者の劇評と感想をも聞くことのできる仕組になっている。

本筋の芝居は、その登場人物の相違によって五幕に分けることができよう。第一幕では徳の教師たることを自任する新来の老ソフィストであるエウテュデモス、ディオニュソドロス兄弟がソクラテスおよびその他の人々の乞いに応じて美少年クレイニアスを相手に、問答を試み、詭弁を以てこの少年を困惑に陥らしめ、その弟子たちに拍手喝采せられる(第四—六章)。第二幕では、ソクラテスが意気銷沈したクレイニアスを元気づけ、ソフィストの言動を以て、真面目なるものを準備する遊戯と解し、自らこの少年を相手に問答しながら、徳へ説き勧める言論(プロトレプティコス・ロゴス)をどのようなものと解しているかを示す。この問答において、人間は本来幸福であることを欲するものであるが、その幸福は善きものの正しき使用によって得られるということ、そしてその正しさを得さ せるものが知識であるということが確定される(第七—一〇章)。第三幕では、ソクラテスがかくのごとき言論を彼のごとく素人としてではなく、専門家として論じてくれるように希望したにも拘らず、両ソフィストはこれを無視して再び詭弁を展開する。その詭弁に怒を発してクレイニアスの愛人クテシッポスが発言し、ここに一方には両ソフィスト、他方にはソクラテスとクテシッポスの両人、それぞれ味方を助けつつ互いに言論を戦わせ、一進一退あるかの如くである(第七—一六章)。第四幕では、ソクラテスがクテシッポスの興奮を宥めつつ、両ソフィストの言動をなおも善意に解してみせ、再びクレイニアスを相手に、第二幕の言論で得られた結果の続きとして、知識のうち、如何なるものがこの正しき使用を得させるものであるかが静かに探究される。探究は迷路に入り、遂に結論に達せず、両人全く困惑して両ソフィストに援助を求める(第一七章)。ここに両ソフィストまたも詭弁を以てこれに応ずるが、ソクラテスもクテシッポスもすでに両ソフィストの論法を習得し、これを武器にして逆襲に転じ、これを破る。しかし表面は両人とも敗れたるかの如き体を装う。両ソフィストの弟子たちこれを知らず大いに拍手喝采

して、ためにリュケイオンの柱も揺らぐばかり(第一八―二九章)。

この五幕のうち、第二幕と第四幕とは老ソクラテスと少年クレイニアスとの静かで真面目な問答であるが、第一幕と第三幕と第五幕とは両ソフィストとソクラテスならびにクテシッポスとの烈しい滑稽な問答である。しかもこの三幕のうち、第三幕は最も烈しい場面であって、全篇はこれを山に前後に向かって起伏しているかのような感がある。すなわち構成の上から、まことに均斉を得ていると言えはすまいか。

また登場人物もそれぞれはっきりした性格を持っていて、その配合も巧みである。傲慢で自惚の強い両ソフィスト。そのうち兄のディオニュソドロスはややお人好しで、すでに耄碌気味である。弟エウテュデモスはなお気鋭く、機を見るに敏である。この対極に立って純情な両青年。そのうちクレイニアスは初心で無邪気で聡明である。クテシッポスはややこれより長じ、激情的で、機敏で、怜悧である。この両組の間にあって、思慮分別の優れたソクラテス。一方、青年たちをあるいは励まし、あるいは戒め、他方、両ソフィストをあるいは誘い、あるいは皮肉り、円転滑脱を極めて、いわば本篇の真の道化役者である。

実に、本篇は喜劇、しかも優れた喜劇である。この点においてはプラトンの多くの対話篇のうちで他に類がなく、芸術的にも彼の優れた作品の一つに属するであろう。しかし、この喜劇はただ単に人を笑わせるだけのものではない。この笑いを通じて真面目なことを考えさせるものである。その真面目なこととは何か。

両ソフィストは徳の教師であると広言する。しかも、その徳の教師である筈の彼らが実はそうでなくて、その弟子入りを願うソクラテスが却って徳の教師であることが、劇の進展につれて自ら理解される。そこに、いっそう深い笑いがある。しかしそれはまたどうしてであるか。両ソフィストがその教育の手段として用いたものは争論術であって、自分の語ることの真偽を少しも問題にせず、ただ議論の相手を困惑させ、その口を封じて、勝利を得ることを目的としたのである。しかし、それは相手ばかりではなく、自分自身の口をも封ずることになるのである。し

かるに、ソクラテスの用いた方法はたとい困惑させることはあったにしても、常にその相手を啓蒙して、徳を求め、知を愛することに向かわせたのである。して見れば、ソクラテスの方法は修徳愛知に関しては争論術に優ること数等と言わなければならぬ、否、それぱかりでなく、争論術は自己矛盾的なものとして存立することを得ず、無益有害なものと言わねばならない。しかも、この両者は同じ愛知の名の下に、多くの人々には混同されて、青年教育の任を引受けるものと思われていたのである。したがって、それは明らかに区別されるを要する。この両者と並んで同じく青年の教育を以て任じたものにいわゆる弁論術なるものがある。

この弁論術もソクラテス的方法に比して、その価値が問われなければならない。それは愛知の結果を適度に取入れ、それを以てまた政治的行動にも適度に参与すると称するものであるが、中途半端なものたるを免れず、青年を真に教育するの任によく堪え得るものではない。それ故、青年教育の方法としては、ソクラテス的方法こそ最も優れた真の方法であり、ソクラテスこそ真に徳の教師と言わなければならない。

プラトンが本篇の笑いを通じて、また特にソクラテスとクリトンとの問答を前後、中間に插入して読者に考えさせ、肝銘させようと企図したのは、右のことに他ならない。これが、すなわち真面目なことである。一言にして評すれば、本篇は真面目な喜劇とでも言い得るであろうか。

この翻訳にさいし参考にして、いろいろと教えられた文献は多いが、左に主なものをあげておく。

L. F. Heindorfius, *Platonis dialogi tres; Cratylus, Parmenides, Euthydemus*, emendavit et annotatione instruxit. Berolini, 1806.

G. Stallbaum, *Platonis Euthydemus*, (*Platonis opera omnia*, vol. VI. sect.i) resensuit et prolegomenis atque commentariis illustravit. Gothae et Erfordiae, 1836.

E. F. Gifford, *The Euthydemus of Plato*, with revised text, introduction, notes and indices. Oxford, 1905.

『プロタゴラス』解説

藤沢令夫

一　登場人物、対話設定年代、執筆の時期

登場人物

ソクラテスの友人

ソクラテス(Socrates)

ヒッポクラテス(Hippocrates)　アテナイの一青年。アポロドロスの息子でパソンの弟(310A)、家は富裕な大家(316B)と言われ、「国家有数の人物となる」ためにプロタゴラスの教えを受けることを熱望している青年として登場する。この対話篇だけにしか名前が出てこない人物である。

プロタゴラス(Protagoras)　トラキア地方南海岸の都市アブデラの出身。ソフィストの最長老で筆頭格の名士。約七〇年の生涯のうち四〇年間をソフィストとして活動し、その名声は死後においても少しも消えることがなかったと言われる(『メノン』91E)。

アポロドロス『年代記』(ap. Diog. L. IX. 56)によれば、彼の年代は前四八〇—四一一年ころということになるが、これは、南イタリアの植民都市トゥリオイの建設にあたってプロタゴラスが法律を起草した前四四四/一年を彼のアクメー(四〇歳)とみなして、計算された年代であろう。しかし、プロタゴラスの年代推定の根拠としては、同時代人に読まれることを当然

予想した本対話篇のなかでプラトンが、「このなかには年齢的にみて私がその父親になれないような者はひとりもいないだろう」(317C)ということを、ソクラテスやヒッピアスを含めた一同に向かってプロタゴラスに語らせている事実のほうが、はるかに有力である。これによると、彼はソクラテス(前三六九―三九九年)よりも少くとも二〇歳前後は年長でなければならないはずであるから、七〇歳ころまで生きたプロタゴラスの生没年代は結局、(ソクラテスとの年齢差を二五／一九年として)前四九四／四八八―四二四／四一八年と考えてよいであろう。

彼の足跡は広く地中海各地に及んだ。本篇は、彼の第二回目のアテナイ訪問(310E―第一回目は前四四三年)のときと設定されている。ペリクレス指導下のアテナイが国策によってその建設に助力した前述トゥリオイのために彼が法律起草の任に当ったこと(Diog. L. IX. 50)や、二人の息子を失ったときのペリクレスの自制と克己を述べた彼の言葉が伝えられていること(Plutarchos, *Consolatio ad Apollonium* 33. 118E～F)などから、プロタゴラスはこのアテナイの宰相とも近い関係にあったと想像することができる。このほか、晩年の彼はシケリア(シシリー)島にも滞在して、変らぬ盛名を持していた(『ヒッピアス(大)』282D～E)。

後世の伝説によれば、プロタゴラスは晩年にアテナイにおいて神への不敬罪に問われ、その書物は焚かれて追放され、旅路に死んだと言われているが(Diog. L. IX. 52, 54, 56)、これは全般的に上述のようなプラトンの記事と相容れないし、他に証拠もないので、あまり信じることができない。おそらくは後世の創作であろう。

そのような不敬罪伝説がつくられる因となったのは、「神々については、それが存在するとも存在しないとも知ることができない云々」(Fr. 4(DK)＝Diog. L. IX. 51)という、『神々について』と題する彼の著書の冒頭の言葉として伝わる有名な不可知論である。しかしプロタゴラスの言葉として最も有名なのは、「人間は万物の尺度である。あるものについてはあるということの、あらぬものについてはあらぬということの」(Fr. 1(DK))という命題であろう。『真理』という著書の中の言葉とされるこの命題の含意するところは、プラトン(『テアイテトス』152A sqq.;『クラテュロス』385E sqq.)によって詳細に考察検討されている。

このほか彼は、文章を希望文・疑問文・応答文・命令文の四つに分けた最初の人と言われ(Diog. L. IX. 53)、また名詞の

性別や一般に名辞の使用に厳格であったことが、プラトン(『クラテュロス』391C、『パイドロス』267C)やアリストテレス(『弁論術』第三巻1407^b6、『詭弁論駁論』173^b17、『詩学』1456^b15)によって伝えられている。

アルキビアデス(Alcibiades) 前四五〇—四〇四年。のちに政治上軍事上に華々しく活動し、前四一五年アテナイ軍のシケリア島遠征を画策して総帥の一人に任じられたほか、最後に亡命先の小アジアのプリュギアで殺されるまで、波瀾の一生を送ることになるが、この対話篇では、こうした前途を知らぬまだうら若い青年として登場する。本篇に関係するかぎりでは、その人物と生涯の詳細をここで見る必要はあまりないと思われるので、そうした点については『アルキビアデスI』や『饗宴』の「解説」を参照されたい。『饗宴』(212D sqq.)のなかでソクラテスとの関係が、アルキビアデス自身の口から如実に語られている。

カリアス(Callias) 遠くソロンの時代から富裕をもって聞こえた名家に生まれ、アテナイきっての富豪であった。本対話篇の舞台となっている邸宅のほかに、ペイライエウス(ピレウス)にも家を持ち、これがクセノポン『饗宴』の舞台となっている。ソフィストたちのパトロン的存在であり、「他の人々の全部を合わせたよりも多くの金をソフィストに支払った」(『ソクラテスの弁明』20A)と言われている(同じく『クラテュロス』391C参照)。父ヒッポニコスの死後、彼の母はペリクレスと再婚して、パラロスとクサンティッポスを生み(315A参照)、また彼の姉妹はアルキビアデスやテオドロス(イソクラテスの父)と結婚した(Plutarchos, *Alcibiades* 8, Isocrates, *De Bigis* XIII)。前三九〇年のコリントス戦に重甲兵の将として参加し、前三七一—三七〇年にスパルタへの外交使節となった(クセノポン『ギリシア史』四の五の一三、六の三の二参照)。喜劇作家アリストパネス(『鳥』二八四行)や、敵対関係にあったアンドキデス(*De Mysteriis* 110–113)は、カリアスを浪費家として伝え、晩年には財産を蕩尽して貧困となったとも言われている(Athenaios XII. 537C)。

クリティアス(Critias) 前四六〇ころ—四〇三年。プラトンの母の従兄に当る。のちに政界で活動して悪名を残し、アルキビアデスとともに、ソクラテスが前三九九年に告発される因となったとみなされている。

前四一一年の四〇〇人革命にはそれほど大きな役割を果さなかったとみられるが、その崩壊後、亡命中のアルキビアデスの召喚を提議し、そして民主制が完全に回復されてから、追放されてテッサリア(テッタリア)に亡命した。前四〇四年、ア

テナイの無条件降伏とペロポネソス戦争の終結とともに帰国し、三〇人政権を樹立してその首領格となった。この政権は、スパルタの勢力と結んで事実上の独裁恐怖政治を現出し、反対派の多くの人々を死刑や国外追放に処して、プラトンの嫌悪をまねいた。前四〇三年、亡命中の民主派トラシュブロスの率いる武力抵抗団(ソクラテスの告発者アニュトスもその一人)と交戦し、ペイライエウスの丘で戦死した。――本篇ではしかし、アルキビアデスについてもそうであったように、こうした波瀾の将来は全く伏せられている。

社会や法や神観念の起源を説いた詩(Fr. 25(DK))が残っている。

プロディコス(Prodicos)　アッティカの東南海上にあるケオス島のイウリス出身、ゴルギアスやヒッピアスと同年代のソフィスト。同郷人に有名な詩人シモニデスがいる(339E sqq. 参照)。ケオス島の外交使節としてアテナイのほかギリシア各地を訪れ、公的な演説によって好評を博し、かたわら私的な講義によって多額の金をかせいだ(『ヒッピアス(大)』282C)。本対話篇で描かれるところによれば、彼は病弱で声も低かったようである(315C～316A)。有名な説話『青年ヘラクレス』(『ホーライ』＝Fr. 1(DK))の作者である。

ソフィストとしての特色は、本対話篇のなかで最も典型的に描かれているように(337A～C, 340B, 358A～B, D～E)、類語の厳格な使い分けによる言葉の正しい使用ということの強調にあり、彼の名はこの関連でしばしばプラトンの他の対話篇のなかにも出てくる(『ラケス』197D、『カルミデス』163D、『エウテュデモス』277E、『メノン』75Eなど)。そしてプラトンの対話篇のなかのソクラテスは、自分がプロディコスの弟子で崇拝者であるということを、いつもやや皮肉な口調で語っている(315E, 341A、『メノン』96Dなどのほか、とくに『クラテュロス』384Bを参照)。

ヒッピアス(Hippias)　同じく当時の高名のソフィストで、ペロポネソス半島の北西部、有名なオリュンピアの聖地をもつエリスの出身。エリスの外交使節としてシケリア(シシリー)島その他の各国、とくにしばしばスパルタを訪れた。数学、天文学、文法、詩、音楽、歴史などの学芸の万般に通じていた多才万能型のソフィストである(318D～Eを参照)。『ヒッピアス(大)』『ヒッピアス(小)』の主要登場人物であり、彼の人物や性格はそこで生き生きと描かれている。詳しくはこれらの対話篇の解説を参照されたい。

対話設定年代

この対話篇のなかでは、ペリクレス(前四九五—四二九年)とその息子たち(同じく前四二九年に死去)がまだ存命中であること(315Aその他)、アルキビアデス(前四五〇—四〇四年)が若者であること(309Bその他)、アガトン(前四四八年ころの生まれ)がまだ少年であると言われていること(315D～E)などから、対話の行なわれている時代は、ほぼ間違いなく、前四三三年か四三二年ころに設定されているといえる。高齢(五六—六〇歳くらい)のプロタゴラスに対して、ソクラテスは三六歳ころということになる。またアルキビアデスは一八歳くらい、クリティアスは二七、八歳、アガトンは一五、六歳である。ペロポネソス戦争(前四三一—四〇四年)はまだ始まらず、ペリクレス指導下のアテナイはなお国力の最盛期にあって、「ギリシアの知恵の殿堂」(337D)と呼ばれるような文化の中心地でもあり、新たな思想的潮流と教育活動の担い手であるソフィストたちが、さかんにこの地を訪れていたころである。

前四二〇年の作と伝えられる(Athenaios V. 218B)ペレクラテス『野蕃人』が、本篇では「去年」上演された(327D)と言われていることと、カリアスの父ヒッポニコスが前四二一年近くまで生きたと伝えられるのに(Athenaios XI. 505F)、本篇ではすでに故人とされていること(315D)とは、右に見た前四三三—四三二年という年代設定と相容れないけれども、これらは大局にかかわりのない些末な点であり、その年代上の食い違いをプラトンはとくに意識して避けようとしなかったものであろう。

執筆の時期

外的な証拠はないけれども、後に(三において)やや詳しく検討されるこの対話篇の内容と性格からみて、本篇がプラトンの初期の著作であること、それも最も初期の著作グループに属することは、ほぼ間違いない。ソクラテスの死(前三九九年)よりも以前に書かれたと見る学者もいるほどである(たとえばヴィラモヴィッツは内容的観点から、リッターは文体統計学にもとづいて、そのような見解を表明した)。しかしこれはやはり極論であって、プラトンが対話篇の執筆を始めたのは、

ソクラテスの死後のある時期からであると考えるべきであろう。

初期の思想や見解を示すと思われる個々の点を、ここで列挙する必要はないであろう。また執筆の絶対年代をこれ以上明確に限定することもできないが、われわれにとっては、この対話篇がプラトンの執筆活動における最も初期に書かれた著作の一つであることを知れば充分である。

二　対話篇展開のあらすじ

（1）導入部（309A～310A）。――ソクラテス、友人からプロタゴラスとの談論の一部始終を話すよう求められ、応じる。本篇の残り全部は、このソクラテスの報告から成る。

（2）プロタゴラスと会うまで（310A～316A）。――ヒッポクラテスが早朝ソクラテスを訪ね、アテナイ滞在中のプロタゴラスに引き合わせてくれるよう懇願する。ソクラテスは興奮するヒッポクラテスに、ソフィストについて学ぶということが何を意味するかを質問して、反省を求めたのち、二人はプロタゴラスが滞在するカリアスの家へ行く。プロタゴラスのほかプロディコスやヒッピアスらのソフィストと、彼らを取り巻く人々がたむろするカリアス家の情景。

（3）プロタゴラスとの会見、ソクラテスの質問（316A～320C）。――プロタゴラスは「ソフィスト」としての自分の立場を説明し、国家社会（ポリス）の一員としてすぐれた人間をつくることが自分の仕事であることを告げる。ソクラテスはしかし、そのような意味での人間の卓越性――徳――が、はたして特定の教育によって人に授けることができるものなのかどうか、この点について疑問点を述べて説明を求める。

（4）プロタゴラスの演説――物語（ミュートス）と理論（ロゴス）（320C～328D）。――プロタゴラスは生物創造にかかわるプロメテウス神話を物語り、それを補足しつつ、なぜ徳が万人の分けもつところであるとともに、しか

も徳を教える専門家がいなければならないかを説明する。

（5）ソクラテスとプロタゴラスとの一問一答（328D〜334C）。——ソクラテスは正義、節制（分別）、敬虔など、さまざまの徳目の間の関係についてプロタゴラスの考えをただしつつ、一問一答により対話を進める。それらさまざまの徳の「部分」は、互いに性格と機能を全く異にするものなのか、それとも、相似た性格のものであり、徳は全体として一つのものなのか。プロタゴラスは形勢の不利を察して問答に苛立ち、「有益」（善）について演説をぶって議論は中断する。

（6）幕合劇（334C〜338E）。——ソクラテスは一問一答方式を守ることを懇望し、プロタゴラスがこれに難色を示すので、議論を打ち切って立ち去ろうとするが、引き止められる。カリアス、アルキビアデス、クリティアス、プロディコス、ヒッピアスがつぎつぎと発言し、それぞれ自分の所感と意見を表明する。最後にプロタゴラスは、自分が問い手となって問答による対話を継続することを、承知させられる。

（7）シモニデスの詩をめぐって（338E〜347A）。——プロタゴラスは議論の主題としてシモニデスの詩を取り上げ、その内容的な矛盾を指摘してソクラテスをやりこめようとする。ソクラテスは、プロディコスの援けを求めながら、シモニデスの言葉の首尾一貫性を救おうとする。つづいてソクラテスは、この詩の意図がそもそもどこにあるかについて、彼の解するところを演説のかたちで披露する。

（8）徳についての討論の継続（347A〜360E）。——ソクラテスの提案によって、詩を話題とすることは打ち切られ、知恵・節制（分別）・勇気・正義・敬虔のそれぞれの性格と相互関係についての、先に中断された討論が問答方式によって再開される。この五つの徳目のうち、勇気だけは他の四つと異なった特別の性格のものであることを主張するプロタゴラスに対して、ソクラテスは勇気とは知恵にほかならないことを論証しようとするが、推論の仕方に対するプロタゴラスからの異議申立てに出会って、成功しない。

ソクラテスは論を立て直し、「快いこと」(快)と「善いこと」(善)、「苦しいこと」(苦)と「悪いこと」(悪)との本来的な一致を示すことから再出発する。世人が言う「善を善と知りつつ快楽に負けてそれを行なわず、悪を選ぶ」ということは、「より大きな善を捨ててより小さな善を選ぶ」という背理を意味し、本来ありえないことである。それは結局、善の大小についての計量を誤る無知にほかならない。このことにもとづいて、臆病とは、おそろしいことおそろしくないことに関する無知にほかならず、逆に勇気とは同じ点に関する知恵にほかならないことが示されて、プロタゴラスの立場は最終的に論駁される。

(9) 結び(360E〜362A)。——ソクラテスは議論の皮肉な結末を注意する。すなわち、ソクラテスはいま徳が知に帰着することを証明したが、それならば徳は教えられうるはずであり、これは、彼が最初表明していた徳の教育可能性についての否定的な見解と矛盾する。他方プロタゴラスも会話の当初には、徳が教えられうるものであることを力説していたのに、いまは徳が知であることの同意に極力抵抗し、かくていつのまにか最初の自分と反対の主張をするに至っている。ソクラテスはあらためて徳とは何かの問題を、プロタゴラスと協力して考察することを希望し、プロタゴラスもソクラテスの資質を讃えて対話は終る。

三 『プロタゴラス』の内容について

(1) 全般的な特色と意図

古来文学作品としても定評のあるプラトンの対話篇のなかでも、『プロタゴラス』はとくに、そのすぐれた劇的描写力ともいうべきものが、充分に、のびのびと発揮されている作品である。かつてプラトンの著作の真偽問題ということがやかましく論じられた頃の、最も懐疑的な立場の学者によってさえ、この対話篇がプラトンの真作であることを疑われたことは一度もなかったのであるが、これも主として、余人をもってはなしえない人物・情景の生

き生きとした描写と、その活気ある文体の魅力それ自体が、真作の証拠として有無を言わせぬ説得力をもったからにほかならない。

では、そのような劇的描写力というべきものによって、『プロタゴラス』では全体として何が「描写」されているか。この対話篇には、ローマのトラシュロス以来、「ソピスタイ」(ソフィストたち)という副題がつけられている。われわれはすでに、この対話篇にどのような人物たちが登場し、その対話がどのような時代と場所に設定され、そして全篇がどのようなあらすじで展開されているかを見た(上述一と二)。ここに描き出されているのは、直接的には、紀元前五世紀の後半——前四三三/二年ころ——のアテナイにおける、ソフィストたちをめぐる時代の一般的な空気であり、そしてそこにソクラテスが関わり合うことによってつくり出される、ある意味ぶかい状況である。

「ソフィスト」という名称が一種いかがわしい響きをもっていたことはたしかとしても(312A, 314D, 316C〜317C,『メノン』91C, 92A〜C)、しかし彼らソフィストたちは、一部人士によるそうした反感をいわば実力によってはね返して、アテナイの青年たちの間に絶大な人気を博し、徳を授ける教師としての地歩を事実上確保していたといえる。その代表格であるプロタゴラスは、「当代随一の知者」(309D)と呼ばれ、彼が目下アテナイに来ているという報せだけで、人々の耳をそばだたしめ、青年ヒッポクラテスを熱狂させる一大ニュースとなるような、特別の名士であった。

われわれはプラトンの筆によって、ソクラテス、ヒッポクラテスとともにカリアスの家へ案内され、このプロタゴラスのほかヒッピアス、プロディコスといった高名のソフィストたちと彼らをとりまく若い知識人たちが集まってつくり出している、ひとつの華やかな知的世界の情景をつぶさに目にする機会を与えられる。ソフィストたちはそれぞれ個性的に振舞い、それぞれ特徴的な発言をし、それを描くプラトンの筆致に見られる諷刺と戯画化にも適度の抑制がきいていて、ソフィストたちのベル・エポックの全体的雰囲気がこれほど明るく生き生きと描かれた作

品はないであろう。そしてわれわれはそのなかで、もう一人の最も個性的な人物ソクラテスがプロタゴラスととり交す、波瀾にみちた議論の現場に立ち合うことになるのである。

ソフィストたちに対する、ソクラテスの態度と立場はどのようなものであったか。『ソクラテスの弁明』(18A sqq.)のなかで、ソクラテスはまず、自分が告発者アニュトスや喜劇作家アリストパネスのような人々によって、ソフィストと同じ種類の人間とみなされていて、このことが告発の根ぶかい動機をかたちづくっていることを指摘する。そして、事実はしかしこれと異なることを、いくつかの点にわたって説明するという仕方で、その弁明演説を進める。謝礼金をとって人間の教育を受けもつということもその一つであって、この点をめぐって、本篇においてその邸宅が舞台となるカリアスと交した問答のことが、引き合いに出されている。ソクラテスの主張はこうであった。——

そもそも馬や牛の教育ならいざしらず、「人間として国家社会の一員としてもつべき徳」(ἡ ἀνθρωπίνη τε καὶ πολιτικὴ ἀρετή)を、ソフィストが約束しているように、手頃な値段で人に教えるというようなことができるものであろうか。自分にはとうてい、そのような知恵と才能の持ち合わせはない。総じて、自分がもっている知恵は「人間なみの知恵」にすぎず、これに対して彼らソフィストたちの知恵は、たぶん「何か人間なみ以上の知恵」なのだろう(『ソクラテスの弁明』20A～E)……。

『プロタゴラス』の内容の全体は、『ソクラテスの弁明』のなかでこのようにして提示された視点の、直接的な延長上に位置づけられるものであり、弁明演説のなかで一論点として挙げられたソクラテスとソフィストたちとの違いを、もう少し拡大したかたちで、詳しく描き出したものといえる。話題はここでも同じく、人間として国家社会の一員としてもつべき徳が、はたして人に教え授けることができるものであるかどうか、ということであり、この点についてソクラテスが、徳の教師を公然と名乗るソフィストの代表格プロタゴラスに直接相対して、素朴な疑

問をぶつけるところから、カリアス家における共同討論ははじまるのである。『プロタゴラス』はこのような意味での、青年の「教育者」ソフィストに対する批判の書である。

ただその批判のあり方と様相については、同じく徳の問題を論じた『ゴルギアス』や『メノン』、あるいは同じプロタゴラスの所説を扱った『テアイテトス』などとくらべてみても、ある明白な差異を印象づけられる。つまり『プロタゴラス』では、ソクラテスとソフィストとの違いの内に内包される哲学的問題を、問題それ自体として追求し徹底させることに重点が置かれるというよりは、むしろ、両者の出会いと対置によって現出する状況を、そのままさに〈状況〉としてリアルに描写する、という手法をとっているように思われる。

このことがどのような意味をもっているかを、われわれは後にもう少し具体的に詳しく見とどけなければならない。さしあたってしかし、確認を要することは、『プロタゴラス』にくりひろげられるこのような手法のソフィスト批判においても、その全体が拠って立つ根本的な立場そのものは、きわめて明確に打ち出されているということである。それは、まさにそのような根本的な立場を提示するにふさわしい全篇の導入部――ソクラテスがソフィストたちの集まるカリアス家の本場面に臨むに先立って、興奮しているヒッポクラテスを相手に交す対話においてである。

ソクラテスは言う。――君はいま、ほかならぬ自分の魂の世話を、君の言うところによればソフィストであるところのひとりの男にゆだねようとしている。では、そのソフィストとはそもそも何ものなのか。その点を君がもし知らないでいるとすれば、君は、自分が魂をゆだねる相手がいかなる人かということも、知らないでいるということになるのだ(312B～C)……。

魂(プシューケー)とは、人間の「すべての幸不幸がすべてそこにかかり、それが善くなるか悪くなるかによって左右されるところのもの」(313A)であり、したがって「魂の世話」ということは、人間にとって、他の何にもまし

て重大事でなければならぬ。とすれば、なぜ人は、自分の身体の世話をゆだねる医者の選択にあたって通常みせるあの慎重な配慮と同じだけの配慮を、魂の世話をゆだねるべき教育者の選択にあたって払わないのか。――これは、『ソクラテスの弁明』(29E)における、何よりも魂ができるだけすぐれたものとなるように心がけよ、という強い訴えをまっすぐに承けるソクラテスの思想の根本的立場であり、あるいはむしろ彼の思想そのものである。問題の〈徳〉(アレテー)ということも、ソクラテスにあっては、この「魂がすぐれてあること」「魂の善さ」と端的に同義語にほかならなかった(『弁明』同箇所)。

そして『プロタゴラス』では、魂の世話ということへのちょうどこのような切実な関心のもとに、ソフィストは「魂の糧食となるものを商品として卸売りしたり、小売りしたりする者」(313C、『ソピステス』223D参照)と規定されるのであって、ここに本篇におけるソフィスト批判全体の基盤がある。彼らが売る「魂の糧食」が有益なものか有害なものかは、以後この対話篇のどこにも、結論的なかたちであからさまに断定を下されてはいない。しかし、著者プラトンがその点をどう見ているかは、この導入部の箇所にきわめて雄弁に語られているといえよう。人間の最重大事に対する右のような切実な基本的把握は、だんじてソフィストのものではない。そうでなければ、どうして「魂の糧食」をかくも手軽に売り歩くことができようか。

カリアス家における本場面に入ってから、ソクラテスが論戦を交す当面の相手はプロタゴラスである。しかしむろん、ヒッピアスやプロディコスも同じ職業的ソフィストとして、右の根本的規定と批判を免れるものではない。彼らはしかしそのことに全く気づかず、同業者としての一種のライバル意識から、プロタゴラスが打ち負かされるのをよろこぶ気配さえみえることは、皮肉な情景というべきであろう。

(2) プロタゴラスの立場――ミュートスとロゴス

しかしながら、全篇を支える視点そのもののこのようなきびしさにかかわらず、本篇ではソフィスト側の立場もまた、その第一人者プロタゴラスを登場させることによって、彼に対する充分な敬意のもとに、できるだけ好意的に扱われているといえる。事実、『ソクラテスの弁明』において、「人間として国家社会の一員としてもつべき徳」を頃合いの値段で人に教えることができるとはけっこうなことだと、ソクラテスから皮肉られたままに終っているソフィストの主張と約束は、ここではプロタゴラス自身の口から、これを説明し正当化するための充分な機会が与えられる。すなわち、徳の教育の可能性についてソクラテスの提出した疑問に答えてプロタゴラスが展開する、物語(ミュートス)と説明(ロゴス)を合わせた長大な演説(320D～328D)が、それである。

国家社会の一員としてのすぐれた徳性を授けることを約束するプロタゴラスに対して、ソクラテスが提出した疑問とは、次の二点にわたるものであった。――(1)議会において国事の処理が問題となる場合には、建築や造船のような専門的技術に関する場合とは異なって、誰でもが発言して意見を述べることが許されている。この事実は、プロタゴラスが教授を約束する国家社会の政治にかかわる事柄が、実は建築や造船などのように、特別の知識として人から学んだり人に教えたりすることのできない性格のものであると、考えられていることを示すのではないか。(2)もしも国家社会の一員としての徳が、人に教え授けることのできるものならば、ペリクレスその他のすぐれた政治家たちは、自分のもつその徳性をまっ先に息子たちに教え授けるはずである。ところが実情としては、そうしたすぐれた人物たちの子供はしばしば凡庸な人間である。これは不可解ではないか(この(2)の論点は『メノン』93A～94Eにも現われる)。

このソクラテスの疑問に対してプロタゴラスは、物語(ミュートス)のかたちで答えようか、理論的説明(ロゴス)のかたちで答えようかとたずねたうえで、まず物語を話すのであるが、このことは、プロタゴラスのこの物語がはじめからはっきりと寓話として意図されていること、つまり、その内容は理論的説明(ロゴス)のかたちでも同様に

語ることのできるものであることを告げている。事実、この物語から神話的な道具立てを取り去ってみるならば、これは同時代までの学問的文書のうちに類例を見出すことのできるような、動物と人類の起源から文明と社会の発展を説明したひとつの論説なのである(たとえば、デモクリトスの著作からとられたと推定されているディオドロス(一の七—八)の論述と比較せよ)。プロタゴラスがこれを神話の衣で包んだのは、ただ「そのほうがおもしろい」(χαριέστερον, 320C6)からというだけのことである。もともとプロタゴラスは、神々の存在についての懐疑論者であった(登場人物の項を参照)。

ただし、基本的にはそのような性格のものではあるが、「そのほうがおもしろい」というプロタゴラスの自信のとおり、この物語は、物語そのものとしてもかなり出色の出来栄えであるといえる。それは古くから伝わるプロメテウス伝説を題材としたものであるが、内容的にも文体の上でもかなり目立った特色をもっていて、プロタゴラス自身の著作からそのまま引用されたものとみる学者たちもあり(ツェラー、アダムなど)、ディオゲネス・ラエルティオスが伝える彼の著作目録のなかの『国制について』『原初における状態について』などが、それではないかと推定されている。少なくとも、プロタゴラスの書物に入念に準拠しながら書かれた物語であることは、たしかであろう。

プロメテウス伝説を扱った主要な先例としては、周知のように、ヘシオドス(『神統記』五二一—六一六、『仕事と日々』四七以下)とアイスキュロス(『縛られたプロメテウス』)があるが、これらとくらべてプロタゴラスの物語は、ゼウスが人間を罰するきびしい神ではなくて人間の味方であることや、プロメテウスもゼウスへの反抗者ではなく、神々を助けて人間の創造そのものに最初から参加していることなど、一見して目につく違いをもっている。

しかしプロタゴラスによるこの新プロメテウス説話の最大の眼目とするところは、いうまでもなく、(i)「技術的な知恵」(321D1)、「火を使う技術」(321E1)、「ものを作る技術」(322B3)等と呼ばれているものと、(ii)「国家社

会をなすための(政治的)知恵、技術」(321D4, 322B5)と呼ばれているところの、〈いましめ〉と〈つつしみ〉によって成立する知恵・技術と、人間がもつこの二種類の知恵ないし技術の区別であろう。前者(i)はプロメテウスによって、アテナとヘパイストスの仕事場から火とともに盗み出されて、一人の専門家がこれをもてば多くの素人のために事足りる、という仕方で人間に分配され、後者(ii)は直接ゼウスの指令によって、すべての人間がこれを分けもつように与えられる。この最後の点、人間は誰でもが〈いましめ〉と〈つつしみ〉を現に分ち与えられているとする点は、ヘシオドス(『仕事と日々』一九二―三)がちょうどこの同じ言葉(δίκη, αἰδώς)を使って、人間は現在、〈いましめ〉も〈つつしみ〉もないような、「黄金」時代から遠く隔った「鉄」の時代に生きていると嘆くペシミズムと対照的であり、あるいはむしろ、ヘシオドスに対する「啓蒙思想家」プロタゴラスの意識的な反対主張であるとも解しうるであろう。

いずれにせよ、人間の知恵と技術のこのような区別によれば、ものを作る技術(i)=建築や造船などが動物たちの翼や毛皮や蹄に対応するような、最も原初的に人間にそなわる能力であるのに対して、〈いましめ〉と〈つつしみ〉に支えられる社会生活の技術と知恵(ii)=プロタゴラスがその教授を約束するところのもの)は、一段階後で付加的に人間に与えられたものであり、そのようなものでありながらしかし、ものを作る技術の場合は少数の専門家で多くの素人のために事足りるのとは異なって、人間がそもそも国家社会をなして生きて行けるための前提条件として、万人に分け与えられているところの必然的・普遍的な資質であることになる。さらにまた万人が分けもつものでありながら、しかしその分けもち方は必ずしも一様無差別ではなくて程度の差があり(327D)、それが(i)と同じく「技術」(テクネー)と呼ばれていることからも示唆されるように、専門家の存在を含意するものである。プロタゴラスの物語はこのように、ふつうには互いに相反するはずの二つの立場を共に同時に主張することを可能にするような、巧妙な論理を提供するものであった。

先に見られたソクラテスの質問が、この巧妙な論理の射程のなかにしっかりととらえられていることは、いうまでもないであろう。事実われわれは、この物語を語り終えたプロタゴラスが、以下それにもとづいてソクラテスの提出した二つの疑問点に巧みに答え、指摘された事実を雄弁に説明して行くのを見るのである。それはしかしまた、畢竟するに、民主制下のアテナイにおけるしきたりの現状と人々の漠然とした考えに合わせて作られた、そしてそのなかにおける自分の職業を正当化するための、苦肉の事後論理的説明であるともいえるであろう。

(3) ソクラテスの反応

このようにして、『ソクラテスの弁明』(20E)で「何か人間なみ以上の知恵」の持主と言われたソフィストの代表者、プロタゴラスは、「質量ともにこれだけの堂々とした弁説」(328D)をふるって満座の人々を感心させた。つぎは、「人間なみの知恵」のもち主であるソクラテスの出番であり、彼はこの長大な弁説が保有する内実の正味を吟味検討しなければならない。そのためにソクラテスは、巧みに相手を持ち上げながら、いつものように(たとえば『ゴルギアス』449B～C参照)、長い演説はやめにして問われたことだけに手短に答えるという、一問一答方式のルールを提案する(329A～B)。これはいうまでもなく、後々までプラトンにとって大切なモチーフであった弁論術(レートリケー)と問答法(ディアレクティケー)の対立、そして「ロゴスの技術」(『パイドロス』)としての後者の優位ということを指し示すものである。『プロタゴラス』においては、ソクラテスによるこの一問一答方式への固執は、やがてこのルールに反撥するプロタゴラスとの間に応酬と波瀾を呼び起こし(334C～335C)、それがさらに並みいる人々のそれぞれ特徴のある見解表明をつぎつぎと呼ぶ(335C～338A)というようにして、対話篇の劇的展開のための大きな軸となっている。

しかしながら、このようにして始まる以下の議論全体の内容そのものは、その劇的な面白さの反面、ひとつの明

確な輪郭をもった何らかの哲学的教説をそこから引き出そうとする者を、当惑させるような性格を多分にもっている。そもそもここでは、プラトンの他の対話篇にみられるように、主役のソクラテスが対話の相手を完全にリードしつつ、その協力のもとにひとつの問題の思想的帰結をまっすぐに追求して行くということはない。そのためには対話の相手が、従順で先入見のない青年であるといった条件設定が必要であろうが、ここでの相手プロタゴラスは、独立の思想家としてすでに考えの固まった長老の名士なのである。さりとてまた、対話者どうしの見解と立場が——たとえば『ゴルギアス』におけるソクラテスとカリクレスのように——真向から鋭く対立し合って、そうした対立そのものがひとつの明確な意味を与えるということもない。プロタゴラスに対する礼儀と丁重さが、そうなることをソクラテスにむしろ回避させるからである。

さらにまたこのような、哲学的問題の追求のためには全体としてどっちつかずの様相を示しているといえる議論の進行のなかで、明らかに脱線的な遊びの要素や、他の対話篇にみられるソクラテスないしプラトンの思想との食い違いのようなものも、いろいろと目につく。

たとえば、シモニデスの詩をめぐってなされる議論がある。プロディコスを引き入れてプロタゴラスに反論する部分がすでに「たわむれ」(παίζειν, 341D17)なのであるが、その上さらにソクラテスは、あろうことか、あれほどつよく固執した一問一答方式をみずからやぶって、シモニデスの詩についてソフィストも顔まけの大演説(342A～347A)をしてみせる。そしてその内容は、そもそもこのシモニデスの詩の全体的意図がピッタコスへの反論にあるということ自体をはじめとして、どうみてもこじつけとしかいえないような気ままな解釈をふんだんに織りこんでいる(「まことに」を「すぐれた」から切り離して「むずかしい」にかけること、「こそは」の解釈、「みずからすすんで」の解釈、等々)。ソフィストのやり方のパロディとして、またひとつの知的な遊びとしては、たしかに秀逸であり面白い読みものであるが、しかしこの演説の内容が何らかの哲学的思想の表明をまじめに意図しているとは、

とうてい言えないであろう。

あるいはまた、学者たちの論議を呼んだいわゆる「快楽主義」(hedonism)の問題がある。すなわち、ソクラテスは議論の後半部分(351 B sqq.)において、「快楽と善とは同じである」という主張を行なう。この「快楽」と「善」との端的な同一視——彼は議論のなかで「快楽」と「善」、「苦痛」と「悪」をそれぞれ相互に置換可能な言葉として扱っている(355 B～C)——は、これだけを見れば、プラトンの他の対話篇のなかで同じソクラテスの口から語られている見解と、まったく相容れないことは明らかである。『ゴルギアス』(495 E sqq.)をみても『パイドン』(68 E～69 C)をみても、また『国家』(VI. 509 A)をみても『ピレボス』(53 C sqq.)をみても、快楽と善とは同じでないこと、両者はきびしく区別されなければならないことが、一貫して強く説かれているからである。『プロタゴラス』においてだけそれがそうでないということは、人々をしてその取り扱いと解釈に困惑せしめ、ここでの「快楽主義」の主張は本気でまじめなものではない、という見方をも促している(Cf. J. and A. M. Adam, *Platonis Protagoras*, p. xxxi; N. Gulley, *The Philosophy of Socrates*, pp. 109–118, et al.)。

このようにして、先に述べた議論の進行が全体として示している様相に加えて、これらの脱線的な遊びの要素や、他の対話篇と相容れないようにみえる発言などは、それらがこの対話篇における劇的な効果を高めているちょうどそれだけ、いったいそれでは哲学的思想の書としての『プロタゴラス』は、結果としてどのような教説を提供しているのであるかという疑問を、しばしば人々に抱かせたのである。

しかしながら、よく注意して検討してみるならば、まず右に見たソクラテスのシモニデス解釈といわゆる「快楽主義」については、それぞれに与えられた思想的意味そのものは比較的はっきりしていると思われるし、そしてそれを明確に把握することによって、プラトンがこの対話篇全体を通じて達成した思想的な成果もまた、おのずからくっきりと浮かび上ってくるように思われる。

シモニデス解釈の演説については、プラトンはソクラテス自身に、自分のしたことに対する明確な態度表明を語らせている(347B～348B)。もともとシモニデスの詩を話題としてはじめに取り上げたのはプロタゴラスであり、彼らソフィストたちは、それが「人間にとって教育の最も重要な部分をなす」(338E, cf. 325E)という考えのもとに、ここに示されたような詩の解釈と批評のジャンルをつくり出し、それを得意としていた。しかしそれは、ソクラテスに言わせれば、「凡庸で俗な人々の行なう酒宴とそっくり」(347C)のことだったのである。「私たちは詩人たちに向かって、その語るところについて質問することもできません」(347E、『パイドロス』275D参照)と彼は言う。詩をめぐってのこうした談義は結局、「はっきり確証できない事柄について、がやがやと論じ合うだけ」(347E)のことになる。だからソクラテスもまた、自分が読み取りたいものを詩の中に自由気ままに読みとりながら「がやがやと論じ」て、ソフィストたちのやり方のパロディを演じてみせたのであった。

なぜ詩人の言葉の意味は「確証ができない事柄」であるのか。それは、『ソクラテスの弁明』(22B～C)のなかで指摘されているように、〈知〉に対するソクラテスの厳格な要請のもとにみられるとき、もともと詩人自身が「自分の語っている事柄について何も知ってはいない」からであり、「彼らの詩作は〈知〉によるものではない」からにほかならない。この観点からの詩人批判は、やがてプラトンにおいて、『国家』第一〇巻にみられるような、イデア論的形而上学の立場からの批判へと、徹底化されて行った主題である。

詩のなかに〈知〉は不在である。――ソクラテスがシモニデス解釈によって演じてみせるパロディは、このようにしてそれ自体が、詩についての論議を「教育の最も重要な部分」と考えてあやしまない「教育者」ソフィストに対する、痛烈に皮肉な批判であり、そしてその批判はさらに、真の〈知〉に対するきびしい要請から促されているものである。

つぎに、「快楽と善とは同じである」という命題の意味であるが、たしかにこの命題をそれだけ取り出せば、上述

のように他の対話篇で表明されているところと相容れないけれども、しかしこの命題にもとづいて論じられている事柄自体の内容はけっしてそうでないことは、容易に知られるであろう。それは結局、快く生きたいという万人共通の願いがほんとうに達成されるためには、その場かぎりの快楽にまどわされることなく、長い目で見てほんとうの善であるような快を選ぶこと——「その多少、大小、遠近を誤たずに評価して選ぶこと」(357A～B)——が必要であり、そのためには「計量の技術」(ἡ μετρητικὴ τέχνη, 356D)としての知識こそが、決定的に重要であることを説くものである。それは実際にはむしろ節制の教えであり、そして何よりも、その節制を可能にする〈知〉の強調なのであって、「快楽主義」(hedonism)と呼ばれるよりはむしろ、「知性主義」(intellectualism)と呼ばれるほうがふさわしいような主張であるといえよう。

もともと「快楽と善とは同じ」というこの命題は、世人が言う「善を善と知りながら快楽に負けてそれを行なわない」とか、「悪いことと知りながら快楽に目がくらんでそれを行なう」とかいった事態——いわゆる無抑制(アクラシアー)——はありえないということを証明するために、その踏み台として提出されたものであった。そしてこのソクラテスの有名なパラドクスほど、「知る」という言葉の内にソクラテスがこめた重み(cf. 352B～C)を、端的に示すものはないであろう。「悪いとは知りながら……」という言い方には、「知る」ということについての甘えがある。ソクラテスのいわゆるパラドクスは、ほんとうに知っているのなら絶対に行なわないはずではないかと、この甘えをきびしく禁止するのである。

(4) 結び——『プロタゴラス』において達成されたもの

このようにして、ひとつの脱線であるシモニデス論も、一見人を当惑させる快楽と善との同一の主張も、それぞれ違った仕方においてではあるが、しかし共に同じく〈知〉に対する厳格な要求の上に位置づけられるものであり、

そしてこれが結局、議論の全体を貫いている哲学的思想の上での一つの筋目につながっているのである。ソクラテスは最後に議論の全体をふり返って、その皮肉な結果に注意を促している(361A～C)。すなわち、ソクラテスはいま正義も節制も勇気も、すべての徳は〈知〉に帰着することを証明しようとしたが、しかし徳が〈知〉であるならば徳は教えられうるはずであり、この点について彼が最初表明していた否定的な見解と矛盾する。他方プロタゴラスも、議論の当初には徳が教えられうることを力説していたのに、いまは徳が〈知〉であることへの同意を極力避けようとすることによって、結果的には最初と反対の主張をするに至っている、と。

両者の間の議論全体のもつ意味は、このソクラテスの注意の言葉の内に、よく示されているといえよう。すなわち、プロタゴラスが〈いましめ〉と〈つつしみ〉によって成立するところの、人間として国家社会の一員としてもつべき徳性を「技術」と呼び「知恵」と呼んで、それが教えられうるものであると主張したとき、彼もまた、徳は〈知〉であるという見解を表明したことになる。しかし、プロタゴラスがソフィストとしての自分の立場を守るために、このようにして徳の教授の可能性を説くとき、ソクラテスは、真実の徳はけっしてソフィストのようなやり方では教えられないこと、そしてそれはさらに彼らの〈知〉の把握が不充分であることから由来していることを、本能的に鋭く感知する。そしてまさにこの感知のゆえに、彼は同じ「徳は知である」という主張をまったく違った方向から、パラドクシカルな仕方で提出するのである。――二人の議論はこのような展開の筋道をもつものであり、さまざまの話題のもつ意味もこの筋道へと収斂される。

同じ「徳は知である」という見解が両者によって表面的に共有されているとき、すべての問題は、その〈知〉の内実の差異にかかっている。そしてこの〈知〉の内実の把握の仕方いかんということこそは、〈知〉の愛求としての哲学にとって、何よりも根本の問題であることはいうまでもない。ただし、『プロタゴラス』においては、この点に関するソフィストとソクラテスとの決定的な差異は、先に見られたように、プロタゴラスに対するソクラテスの丁重な

態度の内にいわば包みこまれるようにして、尖鋭な対立に顕在化されるまでには至らず、議論は結局、両者のお互いに対する讃辞によって終ることになる。これもあらかじめ注意されたように、ここでは、その両者の差異が指し示すはずの哲学的問題を、問題自体として追求し徹底させるというよりは、むしろ、このソフィストの長老とソクラテスとの対置によって現出する状況を、そのまま状況としてリアルに描写するという手法がとられているからである。

けれども、この〈状況〉は、右のような大切な思想的筋目を内包するものとして、プラトン哲学の本格的な発展の出発点となるものであり、そしてわれわれは、『プロタゴラス』におけるこのような手法によるソフィスト批判の全体が拠って立つ、根本的な立場と視点がきわめて明確に提示されているのを見とどけてあった。それはソクラテスによって示された、魂のあり方についての切実な関心ということであった。これを揺ぎのない基盤として、真の〈徳〉とは何か、ソフィストたちの把握とは異なった真の〈知〉とは、人間にとって窮極的にいかなる事態を意味するのか、等々の問題をそれ自体として追求して行くことが、いまやプラトンに与えられている今後の仕事である。

すべてこのような意味を含めて、プラトンが『プロタゴラス』において描き出そうとしたのは、彼がやがて確立した哲学がそこから生み出されてくるところの、前件もしくは先行条件としての〈状況〉なのであって、そしてそれをできるだけ生き生きと描き出すことによって自分のために確認するという課題は、見事に達成されているといえる。

この訳は、筑摩書房版『世界古典文学大系』(第三巻「プラトン」)および『世界古典文学全集』(第一四巻「プラトンI」)に収録されていた旧訳に、かなり大幅にわたって手を加えたものである。W. K. C. Guthrie (Penguin Classics), W. R. M. Lamb (Loeb Classical Library), O. Apelt (Die Philosophische Bibliothek), A. Croiset (Société

d'Édition《Les Belles Lettres》）などの英・独・仏訳のほか、使用した主要参考文献は次のとおりである。

I. Bekker, *Platonis scripta graece omnia*, vol. I, Londini 1826.

J. S. Kroschel=*Platonis Protagoras cum prolegomenis et commentariis iterum*, Lipsiae 1882(G. Stallbaum, *Platonis opera omnia* vol. II, sect. 2).

J. A. Towle, *Plato Protagoras*, Boston and London 1892(with the Commentary of Herman Sauppe, Translation with Additions by Towle).

J. Adam and A. M. Adam, *Platonis Protagoras*, Cambridge 1893(1953).

W. Nestle, *Platons Protagoras*, 7. Aufl. 1931.

ナ 行

ハ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

ワ 行

サ 行

タ 行

『プロタゴラス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

ワ 行

ハ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

タ　行

ナ　行

サ行

『エウテュデモス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行